

CREATURE MIXING 5

mnfikmyhk

春屋アロツ

まだぎりぎり夏服だった

中学生には遅い時間に
川鶉鶏肋

F11キーは何のため
Lagado

Fukapon
ぺったんこたいとさけどさ

繰り返すこと数百回
なぎ

ようこそ、あなたの世界へ

そろそろ表紙絵欲しいなーとか。
新しい参加者も募りたいなーとか。

いろいろ思うんですけど、あっという間ですよ。半年って。
まずはテーマを考えたいので、ご意見をお待ちしております。

next issue
november 2010
www.projectkaigo.org

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 5
in wonderland

2010年5月30日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2010 春屋アロツ, 川鵜鶏肋, Lagado, Fukapon, なぎ,
まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

CONTENTS

実験	春屋アロツ	02
比翼連理	川鶺鴒肋	16
不思議なことなど	Lagado	77
決意の魔法：こんメイ! 2	Fukapon	81
Alice in dating simulation game	なぎ	91
難解辛苦		94

mnfikmyhk Creature Mixing 5
in wonderland——

実験

春屋アロツ

「ところで君、世界とは何だと思う」

そう言ったのは、白いテールを挟んで美紀と向かい合っている男。タキシードをきちんと着こなした彼は、まるで幼なじみに話しかけるような気安さで、かつ今時テレビでもなかなか聞けないような口調で話しかける。

「世界？ 世界は世界だろ」

美紀の答えに男は苦笑して、すいと両手を広げて肩をすくめた。「それでは君、答えになっていないじゃないか。定義とはある言葉を別の言葉で表して初めて意味があるものだ」

「じゃーなにか、地球と宇宙とかか？」

「なるほど、宇宙も加えるわけだな」

馬鹿にするように言ったその男に、美紀はムツとして言い返した。

「何が言いたんだよ」

「君の思う世界は君に優しいかね？」

まったく噛み合っていない、唐突な返事。美紀は返事をしようとして、それが字面ほどにわかりやすい言葉ではないと気付いた。一旦しっかり飲み込んでから、改めて答える。

「ああ。オレは幸せだからな」

「ほう。それは結構なことだ。実に結構なことだよ。特に君くらいの年齢では、自分のことを幸せだと言い切ることなどできないものだ」

今度は美紀の方が肩をすくめて見せた。男の馴染んだ仕草とは

違って、いかにもやってみせた、という動き。

「殊に君のように少々人と違うところがあって、なお迷いなく言い切れるのは大したものだ」

途端に美紀の視線が鋭くなる。男は動じるどころか気付いてすらいらない様子だ。

「だから世界とは何かと聞いたのだ。僕が思うに、世界とは『認識』だ」

「認識？」

「そう、認識だ。世界というのは『個が認識しているもの』というのが僕の理解だよ。たまたま人類の比較的多くの人が同じような認識を共有できているが故に世界は普遍のものであるという幻想が巷に溢れているが、それはただの偶然に過ぎない。世界はごく個人的なもので、そして簡単に変容するものだ。例えば霊感がある人間とない人間とでは世界の範囲が異なる。色覚がない人間とある人間とでは世界の見え方がまったく異なる。わかるかね？」

「……理解できないことはないけど、それがオレと何の関係があるんだよ」

「大いにある。君は女性だ、というのが君自身の認識であり、周囲の認識でもある」

その証左に、と男は自分の服の襟元をちよいとつまんだ。美紀が着ているのは今通っている高校の制服。ブレザーにスカート、首元にはリボン。美紀の男っぽい言動を包み隠し、女として見せるもの。

「だが、君の認識はそれだけではないはずだ。違うかな？」

無言で返す。男は満足げに頷いて、続けた。

「すなわち、君は世界から制限を受けているということだ。だが

難解辛苦 テーマが悪いと思いました

春屋アロツ

いつもと同じようで、いつもと違う二人。今回はちょっと突っ込んでみました。

<http://third.system.cx/>

川鵜鶏肋

珍しくもタイトルが一瞬で決まりました。舞台設定がもともとワンダーランドでした。目標は『戦闘はNG、でもバトル』でした。

相変わらず分かりにくいお話しで申し訳ありません。拙作の珠坂作品群を前もって御一読されていると、少しはわかりやすくなるかもしれません。

ではまたお会いできれば……

Lagado

巫女服は正式には巫女装束といい、大和言葉では巫の衣（かんのきぬ）とも呼ぶそう。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

Fukapon

予期せぬ不運が発生しました。2週連続で寝不足解消込み2日間仕上げです。みゅう。

もう二度と書かないと言っていたシリーズものに手を染めてみました。でもでも前作知らなくても全然OKなので、初めましての方も是非読んでくださいませ。続き物としては紬の裏稼業を感じさせる鋭い物語に……なってない？ 紬をもう少し可愛く描きたかったなあとか言ってる当日未明です。

<http://www.fukapon.com/>

なぎ

テーマをずっと「Alice in wonderland」だと勘違いしていました。そんなわけでそのままずばりで「不思議の国のアリス」の二次創作が出来ました（未完成ですが）。iPhoneを加えて自転車に乗っていた人を見たというTweetからiPadをトーストのかわりにしてみました。実際は大きくて無理だとは思いますが。

レイアウト

またもや巡ってきた半年に一度。本当は日頃からやり慣れておきたいんですけどねぇ。あれこれ兼務だとなかなか。でも、自動化不足を感じたところは直しておくのです。

印刷・製本

今回は私が担当しないで済むって聞いていたのですが、どーなるんでしょう。

<http://www.projectkaigo.org/>

「……あれ、何の夢だったっけ」
何やらすごいことを言われたような気がしたのだが、ぼんやりした頭では思い出せない。洗面所で歯ブラシを突っ込んだら少し頭がはつきりしたが、もう時間が経ちすぎていて霧がかかったイメージが砂のように記憶から零れていく。
歯を磨いて顔を洗って、爆発した髪を抑えつけながら思い出そうとしていたら、兄の浩太がのっそり入ってきた。鏡越しに幹を見て、おはようの前に一言。
「何だ、朝から変な顔して」
「変な夢見た気がすんだけど、思い出せねーの」
「起きてすぐメモれよ、そういうのは。変な夢なら歌詞のネタになるかもしれないねー」
半ば幹を押しつけるようにして顔を洗い始めた浩太と入れ違いに部屋に戻る。いつもなら歯を磨き終える頃には夢のことなど忘れていたのだが、今日は妙に気になった。それでも思い出せない。制服のネクタイまで締めても思い出しきれず、ついに諦めた。トーストをざくざくと食べて家を出る。

「……夢、か」
幹はもぞりと体を動かしてぼんやりと目を開いた。手の先にある目覚まし時計。五分後にはまた鳴り出すだろうそれを見る。七ピピッ。
「……世界が君を呼んでいる」
呼んでいる、という男の言葉がキーワードになったようなタイミングで、遠くからピピピッと甲高い音が聞こえてきた。徐々に大きく耳元まで迫ってくる。それに耐えきれなくなると、幹は手を伸ばした。

「……夢、か」
幹はもぞりと体を動かしてぼんやりと目を開いた。手の先にある目覚まし時計。五分後にはまた鳴り出すだろうそれを見る。七

時。

「……あれ、何の夢だったっけ」
何やらすごいことを言われたような気がしたのだが、ぼんやりした頭では思い出せない。洗面所で歯ブラシを突っ込んだら少し頭がはつきりしたが、もう時間が経ちすぎていて霧がかかったイメージが砂のように記憶から零れていく。
歯を磨いて顔を洗って、爆発した髪を抑えつけながら思い出そうとしていたら、兄の浩太がのっそり入ってきた。鏡越しに幹を見て、おはようの前に一言。
「何だ、朝から変な顔して」
「変な夢見た気がすんだけど、思い出せねーの」
「起きてすぐメモれよ、そういうのは。変な夢なら歌詞のネタになるかもしれないねー」
半ば幹を押しつけるようにして顔を洗い始めた浩太と入れ違いに部屋に戻る。いつもなら歯を磨き終える頃には夢のことなど忘れていたのだが、今日は妙に気になった。それでも思い出せない。制服のネクタイまで締めても思い出しきれず、ついに諦めた。トーストをざくざくと食べて家を出る。
電車に乗る時に、辺りを見渡す。たまに二つ隣の駅から乗ってくる中学からの同級生と一緒にいることもあるのだ。姿が見当たらないから、向こうもいつもどおりに行ったのだろう。
教室をのぞくと案の定、友だちとしゃべっていた。
「おはよ」
「ああ、井上。おはよう」
「おはー」
「おはよう」

声をかけると、それぞれに挨拶が返ってきた。保土ヶ谷雅は人形のような無表情で、町田佳奈は元気が溢れるような微笑みを浮かべて、川合綾乃は柔らかな笑顔で。

「ちょっと井上君、これ見てこれ」

町田が幹に突きつけたのは携帯。のぞき込むと、毛もつややかな黒猫がまっすぐにこちらを見つめていた。

「うお、何かかわいい！ 町田んちの猫？」

「うちの従姉が昨日から海外旅行行ってさ、その間預かってんの」

何故か自慢げに胸を反らして、次々に写真をめくっていく。そのたびに幹が目輝かせるものだから満悦だ。

「井上君猫好きだったんだね」

昔からな。その割に自分は縁がないみたいだが

川合の言葉に保土ヶ谷が横から答えた。

「しゃーねーだろ。うちは親が両方犬派なんだよ。兄貴は両方だけど」

「あれ、浩太さんも猫派じゃなかったのか？」

「いや、あいつ哺乳類はなんでも好きだぞ」

幹は携帯から目を離さずに口だけで答える。

「うおーす、井上」

「おう」

幹の肩を叩いたのは、入学以来仲のいい北田だ。

「あれ、北田君なんか今日早くない？」

「な。いつもならまだ駅だろ」

「いやお前ら、いつも遅刻してるみたいな言い方するなよ。大体間に合ってるだろ」

れるだろう」

ティはドレスを来た少女を模したアイコンを指した。

「それ以外のアイコンを選ぶとどうなるんだい」

ティは方をすくめて答えた。

「その選択肢は示したくなかったんだが、違うアイコンを選べば、これまでと同じように違う世界に移動することになる。どちらを選ぶのも君の選択だし、僕に出来ることはそれを説明することだけだ」

そういうと、ティは白いデバイスを差し出した。

受け取る前にあたしの選択は決まっていた。そのアイコンをダブルタップした。

世界がネストする。

遠くで古めかしいサイレンの音が鳴っている。システムアラートの音だ。良くあることとはいえ、迅速な対応を義務付けられているのでエヌ氏は休止状態から目を覚ました。

システムオペレータのエヌ氏は上司に報告のメッセージを送る。

「ジョブ "alice_29832" が異常終了しました」

「了解。終了ステータスはどうなってる？」

「あーいつも通り、多重ネストですね。なんででしょうね」

「まあ、基本的に世界のエントロピーは増加する方向にある。それを観測するのもこの実験のなのよ。きっと」

もちろん私達だって観測されている可能性もあるわけだけど。そんな予感がエム氏を過ぎった。

来るなり町田と幹に突っ込まれて不満げな北田に川合が笑う。その顔を見て頬を緩めた北田は、ようやく幹の手元に興味を移した。

「さっきから騒いでっけど、何見てるんだ？」

「ああこれか？ 猫猫。黒猫」

「ちょっと井上君、それあたしのケータイ」

まるで我が物のように北田に見せる。お、かわいいじゃん、とは言ったものの、幹と比べると明らかに反応が薄い。

「あれ、お前猫そんなに？」

「んー、てか動物は別にフツー」

「なんだつまらん」

「てゆーか井上君、そろそろ返しなさいそれ」

最後にじっくり見てから町田に携帯を戻す。と、北田が思い出したように言った。

「そーいや井上、昨日おつかれ。よかったぞ」

「ん？ ああ、サンキュ」

「昨日？ 何かあったの？」

首をかしげた川合に、保土ヶ谷が答えた。

「井上のバンドが桶谷の駅前で演奏していたんだ」

「えっ！ 路上？」

「そんなことやってたんだ。ミヤちゃん行ったの？」

「うん。前に聞いてたから行ってきた」

「そうなんだ……井上君、どうして呼んでくれなかったの？」

川合の視線が不意に幹に向いた。むーっと口を尖らせると実際に以上に子供っぽく見えて思わず笑いそうになったが、それはさすがにごまかした。

る舞うのは簡単だったけど。

休み時間や放課後には部活や委員会活動に参加することができた。幼馴染みのいるテニス部に参加したり、報道委員会に参加して先輩と校内新聞を作成したり。そんなうちに段々と彼女たちと親密になっていくことができた。どうやらそれがこの世界の目的だということに気がつくのには若干の時間を要した。

最初のうちは気の赴くままにすごしてみた。すると夏休みが終わって翌日から二学期がはじまるという日に、なぜかこの世界で最初に目覚めた日に戻ってきてしまった。

目的に気付いてからは一人の女の子に集中してイベントを起こすようにした。

幼馴染みとの日々、万能な才能を発揮する彼女と才能に劣等感を感じるアリス。身を引こうとするアリスといつものように接しようとする彼女。すれ違いから亀裂が生じて、またふとしたことからお互いの存在の大きさに気付く。ようやく互いの気持ちを伝えようとするときにまた、目覚めた日に戻った。

部活に明け暮れたこともあった。後輩の女の子になつかれて、彼女の秘密を受け入れた。でもまた、同じように戻っていった。何度となく返しても、幼馴染みに起こされるあの朝に戻ってきてしまう。

記憶を残したまま繰り返すこと数百回。アリスはこの世界からは抜け出すことの出来ないというのだという認識に至った。

「いや、別に特に理由があるわけじゃ……というか待て、そもそも俺は誰も呼んでないぞ」

「んなこと言って、雅も北田君も行ったんじゃないぞ」

「あー、俺はたまたま通りがかっただけ」

「ほら。保土ヶ谷にしたって言ったのは俺じゃなくて俺の兄貴」
二人分の視線を受けて必死で言い訳する。保土ヶ谷もそれは正しいと頷いた。

「井上がバンドに入った頃から知ってたからな。行ける時は行ってるし、他のメンバーとも知り合いなんだ。情報は大体井上のお兄さんからもらう」

「こいつ言いたがらないからなあ。せっかくうまいんだから宣伝すりゃいいのに」

そう言っでぐりぐりと幹の頭を撫でる、というより振り回す。それに反撃する幹の腕を川合がそっとつづいた。

「今度はあたしも呼んでね。絶対行くから」

「ああ、ありがとう……」

幹は微妙な顔になってしまふのをどうにか我慢して、笑いかけた。

三時間目の英語が終わり、全員ががたがたと立ち上がった。体育なのだ。幹も体操服とジャージを片手に教室を出る。と、北田がすぐに追いついてきた。

「おい、井上」

「ん？」

「ライブさ、次やるときゃ川合さん誘った後で俺も忘れずに呼べよ」

「ようやく気付いたみたいね」

青いボニーテールのティは屋上に立っていた。

数百回の体験の中で、その日誰がどの場所にいるかというのは何となく記憶できていた。屋上には誰もいないはずの日だった。「これまでに気付いていると思うけど、この世界から出る方法はないわ」

「まあ、これだけ繰り返せばわかるよ。あなたは誰なんだ」

「僕は君が知っているところのうさぎさんさ」

「うさぎさん、あのうさぎさんなのか？」

ティは最初に出会ったときに口にくわえていた、食パンのようなモノを取り出した。

それは食パンではなく、どうやら白い大きなディスプレイのようだった。

食パンのようなモノが衝突した時に感じた違和感だった。これまでの繰り返しには存在せず初めて登場したのだろうか。

「これを持ち込むのには苦労したよ」

いつの間にか中性的な口調になってティが続ける。

「この世界に君以外のものを取り入れるには主要な人物と入れ替わるしかなかった。僕がキャラクタとして入り込んだとしても出口を用意するデバイスは持ち込めなかった。彼女が持っていた食パンに似ているデバイスをようやく探しだせた」

「僕は君をこの世界から助けるために来た。最初に君を旅に誘ってしまったのは僕だったからね。戻ろうとするのに戻れない君を見ていて少しだけ手伝いがしたくなったんだ」

「元の君に戻るかもしれない。その選択をするかは君次第だ」

「昔の君を模したアイコン、これを選択すれば君は元の物語に戻

満面に浮かべたスマイルに、幹は呆れ顔で言い返した。

「お前、わかりやすくていいな」

「そうか？ 照れるな」

「褒めてねえ」

北田は幹に自分の想いを隠す気はないらしいが、他の人がいるところではこの話はまったくしない。本人に対してもかなり消極的だ。

「つか自分で誘えよ」

「いやお前そんな、彼女の前に立つだけで緊張してまともに話せない純情青年にゃあハードル高すぎだろ」

「どこの青年の話だそれは。今朝いきなりしゃべってたじゃねーか」

「それはそれ、これはこれ」

からからと笑っているところは何も考えてないようにしか見えないが、実際のところ、話はそう簡単ではないことを幹は知っていた。

「あ、それとだ」

「あんだよ」

「お前さっさと保土ヶ谷さんと付き合え。そして川合さんによそ見させるな」

「なんっでそうなるんだよ！」

思わず声が出た。北田はニヤニヤしながら追い打ちをかける。

「いやだっで好きなんだろう？ お前が先に付き合っちゃえば俺も心配せずにいられるし」

「……何の心配だよ」

「川合さんがうっかりお前に惚れちゃったりしたら大変だろう

が」

「馬鹿か」

そんなうっかりはハナからないと思っている口調だ。もちろん幹の方にもそんな期待も心当たりもない。

更衣室で北田と手早く着替える。上下二段で幅もほとんどないロッカーがきっちり入っているのだ。もたもたしているとすぐそばのロッカーを使う人の邪魔になる。そしてそれ以上に、男臭い臭いが充満している。

寒い季節には外で球技、というのはお約束なのだろう。幹はグラウンドをぶらぶらと歩いていた。数十メートル先で同じチームになったサッカー部員とテニス部員がひたすら相手ゴールを攻め立てている。別段体を動かすのが嫌いというわけではないのだが、気付いたら一人になっていたのでゴールキーパーを見捨てるわけにいかなくなつて、センターライン辺りをぶらついているのだ。

ぼーっとしていると余計なことを考えてしまう。

保土ヶ谷が幹とよく一緒にいる理由は、正直なところわからない。単純に中学の時から流れで、ということかもしれない。パンドのこともあると思う。

保土ヶ谷は部活には入っていないが、それでも高校からの友だちがそれなりにいる。だが、学校で昼休みに廊下でしゃべっていることはあっても、一緒に帰ることはほとんどない。帰りは大抵川合と町田も含めて四人か、それに北田が入ってきて五人になるかのどちらかだ。

川合とは高校に入ってから付き合いだ。よく一緒にいるのは、一学期に川合がクラスの一部の女子に目の敵にされていた時に、常に川合のそばにいた保土ヶ谷をフォローするという形で、三人

一緒にいる時間が長かったから、というのが一番大きいと思う。幸いそれほど深刻な事態にはならず、夏休み前には収まったので、町田が加わった三人と今でも一緒にいることが多いのは単に一緒にいたいからだ。ただ、それはあくまで川合や町田も含めてであって、保土ヶ谷と幹とが二人でいることは――。

「井上！」

ボールが顔面に直撃、などという漫画みたいな展開はなかったが、すぐ横をあっさり抜かれた。慌てて全速力で追いかける。だが、運動神経は悪くないとは言っても日頃大した運動はしていないのだ。ドリブルしている相手なのに追いつけない。結局あっさり失点してしまった。

「井上……」

「頼むよ」

「悪い」

味方に謝って、少し前の方に寄った。ボールや他の人の動きを見ながら適当に動いていると、雑念は浮かんてこなかった。

そんなこんなで目立った活躍もせずに授業が終わった。着替えて教室に戻る途中で、先に終わったららしい女子に追いついた。長身の保土ヶ谷と小柄な川合の組み合わせは後ろからでもすぐにわかる。町田らしい姿が見当たらないのは、別のグループと一緒にいるのだろう。

「おい」

「井上。大活躍だったな」

「……なんで見てんだよお前は」

振り返るなりそんなことを言うので思わず怒ったような声になる。保土ヶ谷はいつもどおりの調子で淡々と言う。

Alice in dating simulation game なぎ

「ちこく、ちこくー。転校早々から遅刻しちゃうー」

この世の中というのはとにかく都合主義なのだ。だいたいの事は偶然を装った必然だし、この世界では尚更だ。

あと少ししたら転校生の少女が角から飛び出して来て衝突する。エイ氏ことアリスにはそれがわかっていた。

目が覚めたら、ギャルゲーの世界にいた。そんなことを言い出したら、きつとついに頭のネジが飛んだのだと思われるか、

それとも元々ネジなんてなかったのだと思われるのだろう。誰かは「二次元への移住おめでとう」などと言ってくれるだろうか。

でもアリスにとってはこれが現実だった。これまでだって様々な体験をしてきた。うさぎさんを追いかけるところから始まって、小さくなったり、薔薇に色を縫ったりと忘れかけてはしまったけどいろいろな体験をしてきた。また移動しちゃった、そんなことを考える間もないくらいで世界に適合してきたのだ。

一瞬暗転する視界。わかりきっていた衝突。運動エネルギーを保ったもの同士が衝突する鈍い音。事前にそれが起こることを知っていたアリスはさっと手について衝撃を逃がした。

「いたたた」

覚悟は出来ていても痛みは減らないのだから勘弁して欲しい。

一時暗転していた視界が戻ってくると、目の前には青いポニーテールの女の子が転んでいた。

可愛い女の子はどんな表情をしていても可愛いそう思えるほどの美少女だ。

「いったーい。どこ見てるのよ！」

彼女の前方不注意のせいでもあるわけだから自分が完全に悪いわけではないと思うが、そんなことを伝えたところで彼女が聞かないということは経験上知っていた。

「ごめん」

とりあえずの謝罪の言葉を書けると彼女は「ふん」とそれを受け入れたのか去っていった。その出会い何となくの違和感が残っていた。

この世界での学校生活は非常に簡単だった。学校生活の大半を占める授業は聞かなくても時間が流れていくし、授業中に当てられたとしても答えはだいたいの場合頭に入っていた。もちろんそもそも概念的に知らない内容があるはずだったが、そういった授業は知らないうちに流れていった。そういえば男の子になっていたのは初めてだったかもしれない。この世界では男の子らしく振

としたとき。カメラマンは小さな声で言った。
「あんな姿じゃなくて、笑顔を撮りたかった。だから今日は、僕も嬉しいです。おめでとうございます」

「あなた——」

彼の言葉と同時に紬は眼光を宿し、腕を伸ばす。

「先生——」

しかしその腕は、香苗によって抑えられた。

「先生、いいんです。彼のおかげ、ですから……」

文化祭から一週間後、校内をあるニュースが駆け巡った。

——男性教諭、逮捕

容疑は言うまでもなく、香苗に対する行為によるものだ。

「校内新聞、見ていただけました？」

ここ被服室でも、今日は逮捕のニュースで持ちきりだ。

「うん。早かったね、警察に届けたのって一昨日でしょう？」

「彼の写真のおかげです」

逮捕の情報を得るやいなや、彼を擁する新聞部は写真入りの号外を配った。おかげで今や、誰が捕まったかまで含めて校内は大賑わい。職員室は今朝から緊急事態で、こんなところでのほほんとしているのは紬ぐらいのものだった。

「でも思い切ったよねえ。新聞の写真、香苗ちゃんが写ってるのもあるんだもん」

「顔は写ってませんから。あの印刷じゃ、身体なんて誰のでもわかりませんよ」

「ま、まあね、紬はちよつと特別な女の子だから、わかつちやうもんね……」

「ちようどライトを守っててな。サッカーグラウンドがよく見えんだ」

「川合、こいつ説教してやってよ。授業中によそ見してたらしいぞ」

「え、でもミヤちゃん、近くに来たのは全部しっかり取ってたし、キャッチャーまでまっすぐ返球できちゃうんだもん。すごかったよ」

「ぬう……」

「打点もあるしな」

「自責点は？」

「外野手にそんなものはない」

声や表情こそ淡々としているが、面白がっているのは間違いない。肘で軽く小突いたが、びくともしなかった。

放課後のチャイムが鳴ると教室中が一気に騒がしくなった。

幹は軽く伸びをしてからのろろと片付け始めた。川合の席を見やると、保土ヶ谷と町田が集まっている。声をかけたものかと考えていると、北田が視界に割り込んできた。

「井上、今日俺委員会だから先帰ってくれ」

「おう。……ってことは川合もか」

「ああ。ちゃんと帰りは送ってくから」

「誰も聞いてねーよそんなこと」

「言わせろよ」

ニヤニヤしている北田は放っておいて、保土ヶ谷たちの方に行く。話は終わっていたのか、向こうから話しかけられた。

「井上。帰るか」

「あ、そういうつもりじゃ——」

意外なところで暗雲が立ちこめてきたとき、いつかと同様、後ろの扉が開いた。

「失礼しまーす。あ、いた。これ、紬じゃないだろうな？」

光太が右手に持っているのは、話題の号外だ。

「……男の子は大変ですね」

「ぶーつ、ご主人様つてば紬の身体を全然見てくれてない！もうっ、今日こそ一緒にお風呂だよっ！」

二人はそれぞれの感想を述べながら、駆け寄ってくる彼を迎える。

そして突然。

「松田くん、今度、遊びに行きませんか」

香苗の声が、部屋中に響いた。

「ん、おう。待たなくていいのか？」

以前は大抵、委員会が終わるのを待って一緒に帰っていたのだ。後ろで北田がこちらを睨んでいる気がしたが、気に留めない。

「今日は長引きそうだから、先に帰ってて。いつも待ってもらうのも悪いし」

「と、いうことだ」

川合が済まなそうに言うのを、保土ヶ谷が言い継いだ。

「わかった。んじゃ行くか。川合、また明日な」

「うん、またね」

幹が歩き出すと、保土ヶ谷と町田もそれぞれに挨拶をして続く。靴を変えて外に出ると、びゅっと冷たい風が吹いてきて、幹は思わず首をすくめた。保土ヶ谷もマフラーをそっと上げる。

一人町田は寒さなど感じてないような様子で幹の隣に並んで、感心したような調子で言った。

「にしても井上君って、女の子ばっかのとこに平気で来るよね」

「どういう意味だ？」

「いや、別に悪いってんじゃないよ。雅と綾乃とくっついてた時も全然普通だったし、この三人でも居心地悪いとかないでしょ？」

「ないな。保土ヶ谷とは中学の時からこんなだし、元々女子の方が多い集団にいるの慣れてるんだよ。中学の軽音とかなんでも女子多くてさ」

「そうなんだ、馴染んでるなーと思ってさ。のわりにモテてるわけじゃないしね」

「やかましい」

肩の辺りにぽふっと突っ込むと、町田は笑って次の話題を口に

した。

駅に着いて町田が反対方面のホームに降りていくと、急に静かになる。気まずい沈黙ではない。いつものことだ。

さして待たずに電車がホームに滑り込んで来る。それなりに混んでいる車内で並んで立てる場所を確保して、幹はふと言った。

「そーいやこっから二人で帰るのって久し振りだな」

「いつもは綾乃がいるからな」

保土ヶ谷も同じような調子で応じた。

「いつ振りだろう。確か前に綾乃が風邪で何日か休んだ時以来か」

「あれいつだったけな。九月だったか」

「九月末だな。まだぎりぎり夏服だった」

幹もそうだったかな、と思い出す。その時はいつも降りる川合の家の最寄り駅ではなく、幹の家の最寄り駅でコーヒーを飲んだような記憶がある。

「そうだ。井上、私の家に来ないか？ 昨日クッキーを焼いてみたんだ」

「クッキーか。いいな、行く」

幹はあっさりと頷いた。が、内心は「クッキーか。いいな」なんて気楽なものではない。保土ヶ谷がお菓子を作る、と聞いたのは初めてだし、家に誘われたのも初めてだ。

「お前普段からお菓子とか作るの？ クッキーなんて初めて聞いたな」

「いや、先週末に従姉が来ていたんだが、その人に教わったんだ。その人はよく作るらしくて、ついていくのが大変だった」

「じゃひょっとして自力で作るの初めてか」

「初めてだ。胃薬もあるから安心していい」

苗ちゃん、凄く綺麗。だからさ——」

§

文化祭の最後を飾ったのは、今年で四回目を数えるミスコン。それなりに好評を博しており、今回も盛況に終わった。

今は後夜祭と併行して、参加者による打ち上げが行われている。そんな中、光太が祝いの言葉で迎えたのは、服飾部としてエントリーした香苗・紬ペアだ。

「準ミス、おめでとうございます」

「ありがとうございます。でも、うちのミスコンは別に『ミス』を選んでいるわけじゃありませんから」

香苗の言う通り、それなりに批判のあるミスコンテスト。高校において成立しているには理由があった。

「コスプレコンテストとファッションショーの間の子みたいなのなんですね。俺は初めてだったんで、見るまではなぜ紬が出るのかと……」

「あれあれ？ 紬が大人気で妬いてるのかなあ？ ふーん、でも大丈夫、紬のご主人様は——」

「紬の衣装と、『ミス』としての香苗先輩と、ダブル受賞ですね」

「ありがとうございます、でも、もうそれ以上は……。恥ずかしくて……」

そこかしこで「おめでとう」と言われている香苗は、あからさまに照れている。日頃は落ち着いた立ち居振る舞いの彼女だけに、余計に目立つのだろう。

一方、さっぱり気にかけてもらえていない紬は、早くもへそを

「いやその前に味見しろって」

定番のボケに突っ込むと、保土ヶ谷はそっと視線を外した。

「そこで黙るなよ」

「冗談だ。ちゃんとできると思う」

保土ヶ谷の方は、思い切って誘った、とかドキドキする、などという様子はまったくくない。自分ばかり意識しているのか、と悔しいような恨みがましいような気分に変化の少ない横顔を見つめた。

幹が保土ヶ谷の家に行くのは初めてではない。中学の時に一度、荷物持ちについてきたことがあった。その時は両親と一緒に住んでいたのだが、今は親が転勤で遠方にいるので、同じ家に独り暮らしだ。

「お邪魔します」

「どうぞ」

黒髪に半ば以上隠れた背中を追って家に上がる。元々家族三人で暮らしていたのがよくわかる広さの部屋だ。一人で住むには少々広い。

「今のソファにでも座ってくれ」

「ああ、サンキュ」

「あ、コーヒーと紅茶とどっちがいい？」

「んー……紅茶」

クッキーだから、と思ってそう答えると、頷くまでにわずかに間があった。

「訊いておいてよかった。てっきりコーヒーと答えるかと思ってた」

曲げそうだった。

「うー、ご主人様のいじわるう。紬も準ミスなんだぞー。褒めてよお」

それでもまだ無視し続けようとする光太に小さく笑いをこぼしながら、身を屈めた香苗が紬にお礼を言っている。

「風間先生、ありがとうございます。今、私が笑顔でいられるのは——」

「お話の途中済みません。準ミス、おめでとうございます。取材、いいですか？」

二人の話の途中で割り込んできたのは、新聞部の二人組だ。

早速構えられたカメラは完全に香苗を向いていたことに気付いて、また紬が不服を言い出さないと香苗は心配したが、それは杞憂というものである。

「先輩、大丈夫ですよ。ほら」

光太が視線で示した通り、紬は一人、取材に乗り気だ。

「んー、取材？ 仕方ないなあ。少しくらいなら答えてあげてよ？」

これには新聞部も苦笑いしながら、香苗と光太に目配せした。

「それじゃあまずは、ペアで写真をいただけますか」

カメラマンが何枚か写真を撮ると、無難な質問がいくつか過ぎた。

服飾部ペアにおいて取材対応はもちろん、紬の担当である。取材する側としては数少ない純然たる「ミス」であった香苗のコメントと写真が欲しいことが見え見えだったが、そんなことを気にする紬ではない。

数分間、締節を聞かされ、仕方ないかと彼らが取材を終えよう

「ここはプールの女子更衣室が覗けるんだよねー」
 「ちよつと遠回りだけど、人目につかないように右」
 「あとは旧校舎沿いにっ」と。迷い尽くした紬に死角はないのです！」

小走りに進みながら紬は計算した。

(チャイムが鳴るまでにはあと五分くらいかな。ジュース買いに行っても優勝っ！)

結果、ルートを若干変更して、次の角を左に曲がった。

「——っ！」

利那、予期せぬ、しかし見覚えのある絵が視界に現れた。

「……風間、先生」

「香苗ちゃん……」

彼女は制服をはだけたまま、崩れたように校舎の壁に寄りかかっていた。その姿を見た瞬間、彼女の仮説が繋がった。

「ごめん、気付くの、遅かった……」

「……どうして先生は、気付いたんですか？」

紬にしてみれば悲劇を回避できなかったことが悔やまれた。しかし香苗の方はどうも、紬が気付いたことを単純に不思議がっているようだった。

紬はふっと、香苗の隣に座った。

「フロントホックって言うんだってね」

突然の言葉にも、香苗は難なく受け答えた。

「はい。昨日のブラですよね？ ……今日は見ての通り、普通のですけど」

今日の彼女のブラジャーは色こそありがちな淡いピンク色だったが、レースで作り込まれた装飾を見るに、おそらくは高価なもの

「おい」

保土ヶ谷の揺らぎのほとんどない声で言われると、冗談なのか本気なのかさっぱりわからない。何気なく食卓の椅子に手をかけると、気配に気付いた保土ヶ谷が振り返った。

「ああ、そっちのソファアの方で待っててくれ。すぐに準備するから」

「ん？ ああ」

引いた椅子を戻して、ソファアに向かう。腰を下ろして、なんとなく違和感を覚えた。家が上がった時もそうだが、妙に落ち着く。普通、男子が好きなの家、それも独り暮らしの家に来たとかなればコーヒーを紅茶だと言って出されても気付かないくらい緊張するものではないのだろうか。まるで兄貴の部屋にいるような感覚に疑問を覚えてきた。

「お待たせ」

声がかかって、思考が中断する。テーブルに紅茶が並べて置かれ、その間に十枚ほどのクッキーが皿の上に重なっていた。

保土ヶ谷が隣に座る。肩が触れあわないギリギリくらいの距離に、さすがに心臓が跳ねる。いつも教室でこれくらいの距離で並んでいてもあまり気にならないのが、明らかに右側に意識が集まるのは、周りが静かだからか、保土ヶ谷の家だからか。

「んじゃ、いただきます」

「どうぞ」

クッキーに手を伸ばすと、今度は保土ヶ谷が緊張する番だ。と、思っではみるものの、今の一言では緊張しているのかはわからない。つくづく読みにくい。

葉っぱの形のクッキーを一枚取って口に運ぶ。思ったよりも硬

のだろう。光太の姉のおかげで、紬には何となく、推測ができた。
 「実は、昨日ね……」

チャイムが鳴り響く中、紬は、保健室での出来事を話した。帰り道、フロントホックについて光太に聞いたことも。

その間に服を整えた香苗は、ぼつりと言った。

「先生ともっと早く、仲良くなれたらよかったのかな」

「えっ？」

今回のことといったい何の関係があるのか、紬は解せぬと表情を返す。

香苗は視線を合わさず、虚空を見つめて続けた。

「私、自分の顔が結構コンプレックスで。誰も可愛いなんて言ってくれませんでしたし、デートさえ断られると『あーやっぱりね』って」

紬の携帯電話が小さく振動する音を立てたのに気付いて、彼女は話をやめる。

「出なくて、いいんですか？」

「うん。私の電話なんて、大した用件じゃないから」

お子様。そう形容される紬は、こんなときも天真爛漫だ。

しばらくして鞆の中からの音が止むと、香苗は続けた。

「そんなときに綺麗だよって言われたら、案外揺れちゃうんですね。男の人に言われたのは初めてで、びっくりしました。……本当はセックスしたいだけなんだろうなって気付いたんですけどね、綺麗だよ、好きだよって言われたかったんでしようね」

すっと立った彼女は、紬から見て、確かに綺麗な女性だった。

だから、彼女は素直に言った。

「いいこと思いついちゃった！ 写真で見たときも思ったの。香

い歯ごたえと、ふわっと広がるレモンの酸味とわずかな甘味。

「うまい」

自然にそう言った。言ってから、驚いた。

「うまい、これ。お前、こんなの作れたんだな。ホントに初めてか？」

「教わってる時を除けば、本当にこれが初めてだ」

珍しく、保土ヶ谷が明らかにほっとした声で言った。どうやらそれなりに緊張していたらしい。よく見ると頬もわずかながら緩んでいる。

「初めてでこれか。大したもんじゃん」

言いながら二枚目に手を伸ばす。保土ヶ谷は手を伸ばさなかった。

「お前の好みに合うかどうか心配していたんだ。気に入ってもらえてよかった」

保土ヶ谷の視線はまっすぐに幹の目を見ている。幹はそれをまっすぐに受け止めて、今度こそ全身が反応した。顔がぱっと熱くなる。他意はないのだ、試食役^{モック}なんだから、と思っても、内心で言い聞かせたくらいで止められるものではない。

「どうした？」

急に真っ赤になればそれは訊くだろう。幹は何と答えたものか考える余裕もなく、ただ時間を稼ぐためだけに「ごもご言った。」

「何かおかしいことを言ったか？」

「いや、おかしくないけど——」

その時に継いだ言葉は、考えてのものではなかった。

「好きな奴にそんなこと言われたら、こうなるだろう」

言い切って、反応を待つ。保土ヶ谷は一瞬きょんととして、そ

れからさあっと頬を紅潮させた。保土ヶ谷がこんなに鮮やかに表情を変えるのを、幹は見ることがない。

そのままわずかな間、二人とも言葉にならない言葉をかけ合い、ややあって保土ヶ谷がそれを言葉に乗せた。

「……井上、誤解があるといけない。今のこと、ちゃんと、言ってくれないか」

口ごもりこそしないが、一言一言、恐る恐る口にする。幹は逆に早口になりそうなのを抑えて言った。

「あー、その……お前のこと、好きだ」

保土ヶ谷はこくり、と小さく頷いて、一呼吸おいてから「私もだ」とささやくような小声で言った。

幹はわずかに迷って、ゆっくりと手を伸ばす。保土ヶ谷の二の腕に触れ、背中にして、肩をつかむ。そのまま引き寄せると、彼女は何の抵抗もなく腕の中に収まった。初めて触れた保土ヶ谷の体は柔らかくて、温かい。

幹の背中にも、ゆっくりと保土ヶ谷の腕が回る。それに気付いて目を上げると、幹をじっと見ていた保土ヶ谷と至近距離で目が合った。

「保土ヶ谷……」

「井上……」

ただ、お互いの名前を呼ぶ。いつもなら何気なく口にする言葉が、今は感情を、想いを、どんな美辞麗句よりも雄弁に伝えた。

背中に戻した腕に少しでも力を込めて、わずかな距離をゼロにしようとした、その時。

「うお!？」

ぶーん、ぶーん、と幹の携帯が唸りだし、幹は飛び上がらんば

「あ、そうだ。ご主人様は『前で着け外しするブラジャー』って知ってる？」

「何だよ突然」

彼の言う通りまさに突然の問いだったが、語気の変化に気付くと彼は淀みなく続けた。

「知ってるよ。フロントホックだろ？ 姉さんも持ってるよ」

「そうなんだ……。香苗ちゃんもそうだったんだけど、みんな使ってるのかな？」

「さあ？ 俺は女じゃないしな。紬は……ないな」

「うん、紬は持っていないよ。フロントホックって言うの？ 今日初めて知ったもん」

(なんでそんなこと聞くんだよ？)

続いて光太は聞きたくもなかったが、今はやめておいた。

紬には時折、今みたいな「突然」がある。そして突然の理由を聞くと答えに困ることを、彼は経験していた。

だから彼は、代わりに言った。

「母さんも響子も持っていないみたいだから、珍しいのかも知れないな」

「……そっか」

返ってきたのは最近やつと見慣れた、不思議な紬の反応だった。

§

「ご主人様のバカーっ、なんで起こしてくれないのーっ」

翌日の朝、と言うより正午をとうに回った頃、紬は文句を撒き散らしながら家を出た。

かりに驚いた。保土ヶ谷も幹の反応に、びくりと身を震わせた。

「……び、びびった……」

「携帯か」

「ん。……その、ごめん」

「それはいいんだが……通話か？」

メールの着信ならすぐに収まるはずが、ぶーん、ぶーん、と唸りっぱなしだ。

「いいよ、そのうち止まるだろ」

「……一応出ておけ。何か大事な用かもしれないし、私のことは急がなくてもいいんだから」

そう言われてしまうと、出ないわけにもいかない。一旦身を離されて、幹は渋々携帯を取った。着信元を見もせずに電話を取る。「はい」

『あ、井上か？ デート中に悪い、ちょっと助けてくれ』

北田の声だ。デート中どころじゃねえよ！ と内心で悪態を吐きつつ、次の言葉待った。

『さっき川合さんを家まで送っていったんだけどさ。帰りに迷っちゃって……どう帰ればいいんだ？』

「馬鹿かテメーは！」

思わず叫んでしまった。そういえば、と思いつく。北田はかなりの方向音痴で、初めての道では確実に迷う。地図を渡しても迷う。川合と同じ駅の反対側に住んでいるから、近所だからとか適当なことを言ってお家でくっついて行って、さて帰ろうと振り返ったところ道がわからなくなったのだろう。

『携帯の地図とかあるだろ』

『あんなん使い物になるかよ。自分がどっち向いてるのかもわか

「なによなによ、日直の仕事と紬と、どっちが大事なの？」

大急ぎで出てきたので、いつも薄めの化粧は当然省略。光太も、光太の姉である幸子もいなかったため、髪セットも省略だ。

「メイドを大切にしないなんて許せないんだからっ。愛が足りないーっ」

彼女の子供っばさは容姿だけでなく、身体能力にも備わっているらしい。学校までの通勤路、歩いて約三十分を、息を切らしながらも走りきった。

「はあはあはあ、午後の授業には間に合う……」

そして学校の目の前で運動をランからウォークに切り替えると、ものの数十秒で息を整えてしまう。そして思考もバッチリいつも通り。

「午後イチはご主人様のところだもん。紬が如何に愛すべき存在か、手取り足取り教えちゃうんだからっ」

忘れてきた腕時計の代わりに携帯電話を見ると、時刻は十三時二十分、あと十分で授業が始まる。普通なら、普通ならばまず遅刻しないことはさておき、慌てて再度走り出すシーンだろう。しかし紬はひと味違う。

「ふっふっふっ、こんなこともあろうかと抜け道を見つけてあるのです」

校門とは逆方向に道を折れると、草木に隠れかけているフェンスの隙間を抜けた。

「よいしょっと。ふう、ちっちゃいことも悪いことばかりじゃないねっ」

するりと校内に入り込んだ彼女は、人が通らないような場所を突き進み、次の受け持ちクラスまでの最適ルートを早足で歩いた。

明した。

数ヶ月前から松田家にて紬と同居していること。間違っても同棲ではないと加えて。

同居中、紬は光太のメイドとなったこと。しかし家事やら世話やらは光太がやっていると加えて。

紬だけでなくもう一人、同級生の恋人も同居していること。についてはさすがに省略。

要点に限った説明故突拍子もないものだったが、香苗は存外あっさりとして理解を示した。

「なんか、おもしろそうですね……。風間先生の家事がさっぱりというのは、わかる気がします」

その上、実情に相槌を打つほどだった。

「えーっ、紬そんなにひどくないもんっ」

「ま、まあ、お手伝いはしてくれそうですね？」

「そうなんですよ、手伝わなくていいのに」

「ひどいつ、ひどいよっ！ ご主人様が冷たいよう」

ひとしきり松田家事情で盛り上がると、外はすっかり暗くなっている。

だいぶ遅くなってしまったことに気付いた香苗が立ち上がると、今日はお開きとなった。

「じゃあ紬は鞆取ってくる。ここで待ってー」

「はいはい。早く取ってこい」

紬は職員室へと戻り、残された二人は何とはなしに会話を続けていた。

「またメイドさんを迎えにいらしてくださいね」

「次は気を付けます……。それと今年も、まあ俺は去年を知らな

んねーし携帯の画面ちっちゃいからすぐそばしか表示されねーし」

「……北田か？」

「……ああ。川合を家まで送っていった帰れなくなったらしい」

保土ヶ谷の声はすぐそばから聞こえた。幹の肩にもたれかかるようにして、幹を見つめていた。間近で見るほんのりと色づいた頬に、一瞬言葉が出なかった。

「綾乃の家からだ、たぶん駅ビルの上の方は道から見えてるだろう。それを目指せばいい」

「もしもし？ お前そっからLOTSの看板見えるか？」

『LOTS？ デパートの？ えーっと……あ、見えた見えた』

「よし、そこ目指してひたすらまっすぐ歩け。そのうち着く」

『何とか行ってみるわ。サンキュ』

通話を切って、思わず溜息を吐く。

「あの馬鹿」

ついでに電源ボタンを長押し。味気ないプリセットの待ち受け画面が真っ暗になったのを見て、幹はかばんの上に携帯を放り投げた。

「これでもう邪魔は入んねーぞ」

「入らないな」

そう返した保土ヶ谷はどこか楽しんでるように、幹には聞こえた。

抱きしめるのではなく、保土ヶ谷の肩を抱くようにして、またすぐ近くで目を合わせる。保土ヶ谷も自分の腕を片方だけ、幹の背中に回した。さっきよりも抵抗なく、顔を近づける。今度こそ、唇が触れ合った。

いんですけど、紬をよろしくお願いいたします」

「ふふっ、なんか松田くんが保護者みたいですね」

そう言って笑う香苗を見て、光太は思ったことをつい口にした。「ミスコンに出るなら先輩の方がいいのでは。綺麗ですし、そのスタイルも……」

「——っ。あ、ありがとう。でも、私なんか無理です。顔はひどいし、大きくて可愛くないし。さ、そろそろ先生も来るでしょうから、行きましよう？」

褒められたことが意外な風に、けれども照れている風ではなく、彼女はトントんと歩き出す。光太は少し不自然に感じたが、そのことを話す時間はなかった。

やがて現れた紬と合流して帰途につくも、香苗は学校を出てすぐに二人と逆方向に別れた。

「ご主人様ったら、やあらしー」

「な、なにがだよ」

「香苗ちゃんと帰れなくて残念とか思ってるんでしょ？」

「まあ、紬と帰るよりは断然先輩と帰りたいよな」

「あーっ、それひどいつ。確かにさ、紬の身体はべったんこだけどさ」

ぶいっとそっぱを向いた紬に、光太が少々困ったふりをするのもお馴染みだ。

「いや、別にそんなことは……」

「香苗ちゃんの身体は綺麗だもんね」

「いや、だから……」

ありふれた、とりとめもない会話だったが、紬がふと、パンと両手を合わせながら言った。

永遠と思えるほど長いキスの後。また幹の肩に頭を乗せた保土ヶ谷は、耳元にそっとささやいた。

「私の部屋に行くか？ こは少し窮屈だ」

「……お前、俺がヘタレで何にもしないとと思ったら大間違いだぞ？」

「何をする気だ？」

言葉はあくまでも平静で、口元に笑みを浮かべたりもしない。人によっては冷や水をかけられたようになりそうな状況だが、幹にはむしろあまりにも無防備に甘えているように映った。

「お前に求められるのなら、何をされてもいいな」

保土ヶ谷はふと視線を外して、幹が答える前に重ねて言った。

息を飲んだ幹と、また視線を合わせる。視線が絡んだ瞬間、幹は思わずキスをしていた。

唇が離れた瞬間、まだ吐息がかかるくらいの距離で、保土ヶ谷は言った。

「名前で呼んでくれ」

「……みやび」

「ああ」

「雅」

その声に呼ばれたように、今度は保土ヶ谷の方から、唇を重ねた。

美紀は白いティースブルに元のように座っている自分に気付いた。目の前にはタキシードをきちんと着こなした、顔の見えない男。さっきまでの、興奮といとおしさとで赤熱していた頭が、急激に冷えていく。そして理解した。

「いや、都合よすぎだろ。こんないろいろうまくいくかって」
「何、実験はある程度の条件を揃えて行うものだ。それに、君にはいかにも都合よく見えたかもしれないが、個々の要素を取り出してみれば、決して起こりえないと断言するほど突飛ではないように思うがね」

男はそう言って、テーブルに肘をついた。挑むように美紀を見上げる。

「もちろん、これはあくまでも君を制限している今の君自身の世界にはない可能性だ」

「んなこたわかってるっての。でもそれがなんだってんだよ」

「というと？」

「そりゃ男だったらこうなったかもしれないけど、オレの体が女だからこそ実現することだってあるだろ。それが今のよりも悪いとは言い切れないんじゃないの？」

美紀の答えに、男は笑い出した。先ほどまでの芝居があった言動が嘘のように、素直で朗らかな笑いだった。

「なるほど、それが君の答えか。よくわかったよ。では今度こそ、君の世界に戻りたまえ」

その言葉が合図になっていたように、遠くからピピピッと甲高い音が聞こえてきた。徐々に大きく耳元まで迫ってくる。それに耐えきれなくなって、美紀は手を伸ばした。

ピピッ。

「……夢、か」

幹はもぞりと体を動かしてぼんやりと目を開いた。手の先にある目覚まし時計。五分後にはまた鳴り出すだろうそれを見る。七時。

「……あれ、何の夢だったっけ」

何やらすごいことをしたような気がしたのだが、ぼんやりした頭では思い出せない。洗面所で歯ブラシを突っ込んだら少し頭がはつきりしたが、もう時間が経ちすぎていて霧がかったイメージが砂のように記憶から零れていく。

歯を磨いて顔を洗って、爆発した髪を抑えつけながら思い出そうとしていたら、兄の浩太がのっそり入ってきた。鏡越しに美紀を見て、おはようの前に一言。

「何だ、朝から変な顔して」

「変な夢見た気がすんだけど、思い出せねーの」

「起きてすぐメモれよ、そういうのは。変な夢なら歌詞のネタになるかもしれないのに、もったいねえ」

半ば美紀を押しつけるようにして顔を洗い始めた浩太と入れ違いに部屋に戻る。いつもなら歯を磨き終える頃には夢のことなど忘れていたのだが、今日は妙に気になった。それでも思い出せない。

制服のリボンを留めても思い出しきれず、ついに諦めた。トーストをざくざくと食べて家を出る。

電車に乗る時に、辺りを見渡す。たまに二つ隣の駅から乗ってくる中学からの同級生と一緒にいることもあるのだ。姿が見当たらないから、向こうもいつもどおりに行ったのだろう。

教室をのぞくと案の定、友だちとしゃべっていた。

「おはよ」

「ああ、美紀。おはよう」

「おはー」

「おはようミキちゃん」

んでしょ？」

「申し訳ない……」

紬には反論したいところだったが、香苗がいる手前、彼はひたすらに頭を下げていた。

どうしたら頭を上げてもらえるのだろうかとうと香苗が思いを巡らすと、すっかり忘れていた不自然な言葉が心を過ぎった。

「では、一つ教えてくださいませんか」

「はい、もう、何でも」

「風間先生が松田くんのことを『ご主人様』って呼んでいるのはなぜですか？」

「えっ？」

突然の質問に鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている彼は、今更気付いたらしい。

「……あーっ、なんてこった。学校ではご主人様やめろって言うただろ！」

一気に顔を上げてキツと睨むと、紬の方も負けじと応戦だ。

「なによ。自分だって紬のこと『紬』って呼んでるくせにっ。

学校では『風間先生』って約束したでしょ！」

「うっ、確かに……」

勝負は引き分けに終わったようで、両者あつという間に意気消沈。首をうなだれているところに、香苗は意外と容赦なく、質問を再び投げかけた。

「『ご主人様』と『紬』の関係、教えてくださいよね……っ」

もはやごまかすこともできまい。

（話しますよ？）

光太は念のために紬にアイコンタクトを取った上で、簡潔に説

お子様だと評され、ファッションになど当然頓着していない紬。しかし夏休み前から、ちょっとした変化が出ていることに香苗は気付いていた。服飾部部長の名は伊達ではない。

（前は白いブラウスと黒のスーツだけでしたよね。……「ご主人様」と関係あるのでしょうか）

紬のことだから繰り返し聞けばあつさり答えるだろう、しかし彼女は聞くことなく、こともなげに再びメジャーを手にした。「身長は変わっていませんか？ 去年は145でしたけど——」「うん、変わってないよー。もうこの歳じゃ伸びないもん……」「いいじゃないですか、可愛くて。私、今年もまた伸びてついに170に……」

お互い、苦労するよね……と目を合わせて笑うと、示し合わせたように紬が両腕を上げた。

「じゃあ、胸囲から測りますね。……先生、相変わらずキャミソール着ないんですね」

「主任にも言われたけど、暑いんだもん。だから冬は着てるよ？」（来年あたり、「ご主人様」に言われて着てるのかも知れませんか……）

こうやってよしなしごとを話したり思ったりしながら、紬の採寸は順調に終わった。

「凄いですね、先生。去年と全然変わっていません」

「ぶー。紬の成長期はどこに行っちゃったんだよお」

紬は微妙な心境とともに服を着直していると、ふと、目についた。

「香苗ちゃんって、スタイルいいよね？」

「え……？」

声をかけると、それぞれに挨拶が返ってきた。保土ヶ谷雅は人形のような無表情で、町田佳奈は元気が溢れるような微笑みを浮かべて、川合綾乃は柔らかな笑顔で。

「ちょっと美紀、これ見てこれ」

佳奈が幹に突きつけたのは携帯。のぞき込むと、毛もつややかな黒猫がまっすぐにこちらを見つめていた。

「うお、何かかわいい！ 佳奈んち猫飼ってたっけ？」

「うちの従姉が昨日から海外旅行行ってさ、その間預かってんの」

何故か自慢げに胸を反らして、次々と写真をめくっていく。そのたびに美紀が目を輝かせるものだからご満悦だ。

「ミキちゃん、猫好きだもんね」

「昔からな。その割に自分は縁がないみたいだが」

綾乃の言葉に雅が横から答えた。

「しゃーねーだろ。うちは親が両方犬派なんだよ。兄貴は両方だけど」

「あれ、浩太さんも猫派じゃなかったのか？」

「いや、あいつ哺乳類はなんでも好きだぞ」

美紀は携帯から目を離さずに口だけで答える。

「うおーす、井上」

「おう」

美紀の肩を叩いたのは同じクラスの北田だ。

「さっきから騒いでっけど、何見てるんだ？」

「ああこれか？ 猫猫。黒猫」

「ちょっと美紀、それあたしのケータイ」

まるで我が物のように北田に見せる。お、かわいいじゃん、と

「紬ばっか測られるのって、おかしいよね？」

「いえ、そんなことは……」

「はい。脱いで」

「えっ？」

「脱・い・で！」

ずいっと迫ってくる要求に仰け反り、逃げようにも逃げられない。なぜならば。

「脱いでくれないなら脱がせやうもんねー」

紬はすでに、香苗の襟元を飾るリボンを外し、ブラウスの第一ボタンに手をかけていたからだ。

「わかりました……。自分で脱ぎますから」

結局紬に降伏して、彼女はテキパキと服を脱いだ。

スカート、ブラウス、キャミソールと、脱いでたむ様がとても美しい。

「はわあ、香苗ちゃんカッコイー」

「変な褒め方しないでください……」

「だってだって、大人の女！ って感じだよお」

目を輝かせて感心する紬に、香苗は小さく、頬を染めた。

しかし、そんな喜びにつけるのは、お子様先生の得意とするところだった。

「ねえねえ、胸も見せてよ。すごい綺麗な身体なんだもんっ」

「そ、それはちょっと……」

「いいよね？ ね？ うん、いいよねー」

狼狽する香苗とは対照的に、紬はきやつきやと大はしやぎ。勢いよく背中に戻って、ブラジャーを外そうとする。と。

「あれれ？ どうやって外すの？」

は言ったものの、美紀と比べると明らかに反応が薄い。

「あれ、お前猫そんなに？」

「んー、てか動物は別にフツ」

「なんだつまんねー」

「てゆーか美紀、そろそろ返さないそれ」

最後にじっくり見てから佳奈に携帯を戻す。北田はそのやり取りに笑って、自分の席に行った。その後ろ姿を見送って、美紀はふと違和感を感じた。

——あれ、このやり取り前にやった……？

今度は雅たちに視線を戻す。佳奈が猫の話が続けている。この話は教室では聞かなかった。

——既視感^{既視感}をやつか。

放課後のチャイムが鳴ると教室中が一気に騒がしくなった。美紀は軽く伸びをしてからのろろと片付け始めた。綾乃の席を見ると、雅と佳奈がもう集まっている。かばんを持って行くと、話は終わっていたのか向こうから話しかけられた。

「美紀。帰るか」
「ん、おう。あれ、綾乃は帰らないの？」
「あ、あたし今日委員会なんだ。長引きそうだし、先に帰ってて」と、いうことだ

綾乃が済まなそうに言うのを、雅が言い継いだ。
「わかった。んじゃ行くか。綾乃、また明日な」
「うん、またね」

美紀が歩き出すと、雅と佳奈もそれぞれに挨拶をして続く。靴を変えて外に出ると、びゅっと冷たい風が吹いてきて、美紀は思

わず首をすくめた。雅もマフラーをそっと上げる。

一人元気な佳奈のおしゃべりに合いの手を入れながら駅に向かう。駅に着いて佳奈が反対方面のホームに降りていくと、急に静かになる。気まずい沈黙ではない。いつものことだ。

さして待たずに電車がホームに滑り込んで来る。それなりに混んでいる車内で並んで立てる場所を確保して、美紀はふと言った。

「そういうことから二人で帰るのって久し振りだな」

「いつもは綾乃がいるからな」

雅も同じような調子で応じた。

「いつ振りだろう。確か前に綾乃が風邪で何日か休んだ時以来か」

「あれいっただけな。九月だっけか」

「九月末だな。まだぎりぎり夏服だった」

幹もそうだったかな、と思い出す。一日は佳奈と一緒に三人でお見舞いに行ったが、翌日からはしばらく二人で帰ったのだ。

「そうだ。井上、私の家に来ないか？ 昨日クッキーを焼いてみたんだ」

「クッキーか……え!?」

美紀はあっさりと頷きかけて、思わず目を見開いた。

「どうした。私がクッキーを作るのはそんなに驚くことか？」

「あ、いや、そうじゃなくて、いや、すごい食べたいんだけど、えーと」

雅の様子は一見変わらないが、想定外の反応に内心傷ついている。そう思った美紀は大慌てでフォローしたが、そもそも自分の動揺が収まっていけないので何を言いたいのかわからない状態になってしまった。

「ああ、わかった。わかったからちょっと落ち着け」

「遅れてごめん」

紬が被服室の扉を開くと、案の定、一人の少女が出迎えてくれた。

「お忙しいところ済みません。私も今さっき来たところですから」

矢崎香苗、彼女は丁寧を受け答えをしながら、大きな机の上にメジャーやら物差しやらを用意している。

「あ、今日は採寸しますので、部屋の鍵をかけていただけませんか」

「はい。ま、紬は見られてもへっちゃらだけど」

紬はキラキラの笑顔を香苗に返しながら、入ってきた扉にロックをかける。

「ダメですよ。先生は可愛いんですから、自覚してください」

「んー？」

「……どうしたんですか？」

首を傾げながら向かってくる紬に香苗が問うと、やはり素直に紬は答える。

「ご主人様にも『可愛い』って言われたんだけど、紬、ホントに可愛いのかなあ？」

それがどんな意味を持つかも考えないあたりは、さすが彼女と言ったところだ。

一方の香苗はそう鈍感なわけもない。手に持っていたメジャーを握りしめて、目を見開いている。

「あ、あの、ご主人様、って……」

「あつ。あー、えーと、そのー、ま、気にしないで。ほら、サイズ測ろーよー」

明らかにごまかしにかかっている紬に、彼女も気付かぬわけが

雅に背中をさすられながら深呼吸。三度くらいやったら落ち着いた。

「すまん」

「いい。落ち着いたか」

「だいぶ」

「何事だ？」

「いや、それが今ようやく思い出したんだけど昨日の夢で……」
言いかけて、ぴたりと止まった。考えるまでもなく、本人相手に説明するのは気まずい。いくら雅は幹の内面が男であると知っているとはいえ、普通に考えれば同性なのだし、なお悪いことに相手は他ならぬ雅自身なのだ。

「あ、後で言う。しかしお前、クッキーなんて初めて聞いたな。前から作れたっけ？」

「いや、先週末に従姉が来ていたんだが、その人に教わったんだ。その人はよく作るらしくて、ついていくのが大変だった」

話をそらしたことは何も言わずに合わせてくれた。「後で」と言ったのを忘れたりはないので、おそらく家でクッキーを食べながら全部言わされるだろう。その時にどんな顔をすればいいのか、どんな顔をされるのか、不安が霧のように心に広がっていく。それには背を向けて記憶にある言葉を口にする。

「じゃひょっとして自力で作るの初めてか」

「初めてだ。胃薬もあるから安心していい」

「いやその前に味見しろって」

定番のボケに突っ込むと、雅はそっと視線を外した。

「そこで黙るなよ」

「冗談だ。ちゃんとできてると思う」

ない。

しかし彼女は机上のノートを開きながら神妙に言う。

「誰にでも、秘密はありますよね……」

「えっ？」

今度は紬の方が意表を突かれたが、香苗は状況を水に流すかのように行動を続けた。ノートの上に記された昨年の測定結果の横に、付け足すように綺麗な野線を引く。

紬は子どもっぽさの抜けた眼で一瞥するも、彼女の一言で引き戻された。

「じゃあ、服を脱いでいただけますか」

「はい。脱ぐよー」

ウエスト左に手をかけると、いとも簡単にホックを外し、フラスナーを下ろすと。

——ストン

まさにそんな音が聞こえそうなほど、スカイブルーのタイトスカートはあっさりと脱げた。お子様体型ならではである。

淀みなくブラウスのボタンに手をかけたのを見て、香苗が立ち上がるのもお馴染みの光景だった。

「それ、たたみますから」

相変わらず脱ぎっぱなしの紬に代わって、彼女はスカートをたたむと、丁寧に机上に置いた。

「ありがとーっと、はい、ブラウスも脱いだよー」

続いて手渡されたブラウスをまたもや彼女がたたみ、折り目正しくスカートの上に重ねる。

（先生が選んでいるのでしょうか？ 水色に白、明るい先生にぴつたりの素敵な配色です）

あまりに浅はかな反応に彼女は溜息をつきそうにもなったが、何とかこらえて声を通した。

「いえ、そう判断するのは早計でしょう。一番気になるのは彼女の服の状態。あまりに綺麗にはだけています。ブレザー、ブラウスとリボン、ブラジャーを身体に残したまま、身体の前側は全て肌を出しています」

ここまで話せば少しはわかるだろうと彼女は周りを見回したが、全員の頭の上に疑問符が浮かんでいるようだ。

これでよく先生が務まるものだと思っただけながら、彼女は仕方なしに続ける。

「校内、ましてや人目にさらされる屋外で強姦を犯すリスクが極めて高いのは、おわかりですよ？」

たまたま目のあった教員に同意を求めると、こくんと頷きが戻ってきた。

彼女は続いて隣の教員に視線を移し、もう一つ質問をした。

「では、なぜそうお考えですか？」

すると、多少の間を持つて答えが返ってくる。

「……………誰かに見つかる可能性があるからでは」

「おっしゃる通りです。そして、行為に時間をかければかけるほど、見つかる確率は高まる。そんな中、ブレザーのボタンを外し、リボンを解き、ブラウスのボタンをいくつも外して、さらにはブラジャーのホックまで外して、胸をはだけるのでしょいか。やはり写真はよく撮れていて、少なくともボタンに破損のないことがわかります」

説明を一時停止すると、再び周りがざわめいた。

「じゃあ何だって言うの？」

「ああ、知ってる。」

その言葉は不安と一緒に、胸の奥底に突っ込んだ。

「いたずらでしょうか」

「確かに、その可能性も……」

「強姦の可能性も否定はしません。しかし、いたずらの可能性や、カップルが合意の上で撮った可能性も否定はできません」

キツパリ言い切ると、彼女は説明を終えた。

しかし彼女の他に納得しているのは、養護教諭ただ一人のようだ。そのことは誰の目にも明らか。故に、養護教諭はこう加えた。「風間先生に説明していただいた通り、あらゆる可能性が考えられると思います。文化祭が控えており、校内での事故も増えます。この写真の件も兼ねて、しっかりと見守っていきましょう。なお、本件はくれぐれも他言せぬよう」

そして解散となると、集まった教員たちはざわつきながらも、保健室を出て行くときにはさすがに口を閉じていた。

程なくして、部屋には二名だけが残った。

保健室の主たる養護教諭と、淡々と説明をこなした彼女、風間紬だ。

「風間先生、ありがとうございます。仕事のときは本当に別人ですよ」

「そんなことは……。あの、もう一度、写真を見たいのです」

「どうぞ。何かあったことがあったら、教えてください」

紬は写真を受け取り、今一度凝視した。

（何か、おかしいような……）

比翼連理

川 鶉 鷄 肋

W1 〇月〇日 木

ヒロ君、いいこと思いつきました。

会えないのは仕方ないけど、いちいち山根さんに言伝じや効率が悪いでしょう？

だから、せめてメールで近況報告しませんか？

萌衣

W1 〇月〇日 金

クジ引きの結果に従って座席を移動。

皆、周囲のメンツを確認しては一喜一憂しているようだが、俺はそれどころじゃない。

もう一度携帯の画面を見る。

朝から何度となく確認し直したメールの差出人の名前は「萌衣」。

未だに信じられない。

でも、こんなに嬉しいことはなかった。

彼女が確かにそこにいるって事が実感できたんだから。

「こんにちは」

どむっ。

「げほっ！」

決意の魔法 こんにちは！ 2

Fukapon

学年主任に呼ばれて保健室に入ると、異様な光景が広がった。

（妙な緊張感だよ。それに、女の先生はつか……？）

授業を終えた十二名の女性教員が、ずらりと会していた。

機微に聡い彼女でなくとも、その場の誰もが普通でない雰囲気

に気付いていただろう。よって余計に、不穏がその場を支配する。

「これから、ある写真をご覧に入れます」

白衣を纏った養護教諭の言葉で、僅かにあつた話し声は潜めた。しかし次の科白とともに逆戻り。

「ただし、写真を見ても声を上げないでください。おそらく驚くでしょうが、絶対に、声を上げないでください。また、他言無用です」

その注意が意図するところは誰にも理解できず、いくつかの小さな会話が再び起きている。

彼女も不思議がりはしたが、仕事らしくと言える冷たさで思考を巡らせた。

（普段とはまるで正反対の、もったいぶった話し方。集められたのは女性、さらに割と年配の先生ばかり。性犯罪の臭いがぶんぶんする……）

然もありなんと突飛な結論を出した直後、目の前に一枚の写真が置かれた。

——えっ……

——嘘でしょ

舌っ足らずな声と同時に、凄まじい衝撃が身体を貫いた。背中を叩かれた、と理解するのに二秒ばかり要する。

涙目で振り返ると、

「本日からお隣で御一緒させていただく事になりました」

瞬間的な印象は、お人形。小さな身体に不釣り合いな、大人びたアルカイックな微笑。

が、表情は次の瞬間には年齢相応に、そしてさらに幼い方向に変化。

「七瀬鈴菜だよん、よろしく〜♪」

……みょうちくりんな生き物が来た。

その生物はやたら白い八重歯を見せてにかつと笑った。

ふわんふわんだがちょろちょろの色素の薄い髪を頭の両側でくくるといふ子供っぽい髪型だが、今のこの表情にはこの上もなく似合っている。

「今日からマブダチだからリンリンと呼んでよろし。ええと……はっ!!」

たった五秒で馴れ馴れしくなりやがった。

いつも騒動の中心にいる女だ。間違いない。人見知りゼロで元気の有り余っている、怖いもの知らずわんころ系女子。

「人の名を聞く前に自分から名乗れっ!」

「指さすな! 自分で勝手に名乗ったんだろうが!」

わけわかんねえ。

……さっきのはこいつに叩かれたのか??

ゴリラにでも張り手されたような衝撃だったが……跳び蹴りでも食らったのか?

見ず知らずのクラスメイト（なんか矛盾してるな）にいきなり

——ひどい……

その場で冷静なのはたった二人、写真を出した養護教諭と、次の瞬間を推し量った彼女だけ。彼女に至っては、全く異なった感想さえ抱いていた。

（この人、凄く綺麗……）

故にこの部屋において、彼女は異質な存在に見えたのだろう。

「風間先生は、驚かないんですか……？」

「はい。予想していましたから」

養護教諭は彼女の答えに満足して、少し面持ちを崩しながら問うた。

「やはり素晴らしい洞察力ですね。だからこそ、この写真から何かわからないかと見てもらったのですが……」

目の前には、如何にも「事後」と言った状態の女子生徒が写っていた。

「あまり多くのことは言えません。ただ、この写真はともうまく撮られていますね。背景は旧校舎の壁面に見えますが、具体的にどこかはわかりません」

彼女の言葉に全員が写真を再び見つめて、なるほどと唸っている。

「肝心なのはこれが何の行為を撮ったものかと言うことですが——」

「レイプ、よね……」

続いた推測説明を突如小声が乗っ取る。あつという間に波紋は広がった。

「まさか……」

「この学校でそんなことが……」

攻撃を加えるとは、なんて非常識な奴。

「高天寛彰です。結婚してください」

もう一人の頭痛の種が、逆サイドから襲撃してきた！

「勝手に答えるな、つうか勝手にプロポーズすんな！」

鈴菜と称するわんこ女と同じ顔で同じ髪型の女子。

レポートしたわけじゃない。見た目で一つ決定的な違いがある。こっちは右目に眼帯（ペンギン柄だよおい！）つけてるから

区別は簡単だ。
有名な一卵性の双子、七瀬姉妹。撫菜と鈴菜に挟まれてしまっ

た。
いやまったく、自分が巻き込まれてみると想像以上の無茶苦茶

っぷりだな。
「ごめんなさいもうしませんあやまりますこれこのとおり」

眼帯女撫菜がふかぶかと頭を下げるとともに、二つ尻尾もへ
ろんと垂れ下がる。
間違いない。全然反省してねえ。

「我が魂の同胞ペンペンになんて非道な仕打ち！ ヒロアキくん
は鬼ですか、悪魔ですか!？」

「なれなれしく名前呼ぶな！ で、俺が何した!？」

「抑えてリンリン。あたしは気にしてないから」

眼帯女はそう言うのと、ゆっくりとこちらに向き直った。

一つだけのでっかい瞳に凝視される。

「高天寛彰」

「何だよ……」

フルネーム呼び捨てかよ。

「語尾にびっくりマークつきすぎ。今のうちに落ち着くことを覚

言ったでしょう？

この世界に
不思議なことなど
何もありません

巫女です

巫女が
不思議な能力を
持つと
期待している？

浅はかです
ガラスの靴を
持ち歩く
あなたの方が
よほど
不思議ですよ

宜しい

幼女好きのあなたが
信じるか分かりませんが
巫女たる証を
呈して進ぜる

…幼女は
関係ないから

これ
全国巫女協会の
登録証です

…それだけ？

…はい

…

あつ！

でもこれ
登録証発行料だけで
6000
円かかったんですよ

月額じゃないなら
いいだろ

えないと、いつか脳出血で倒れるから」

「……ご忠告ありがとうございます」

つかれる。無茶苦茶つかれる。

明日からこんなやつらに挟まれて授業受けるのかよ。勘弁して
くれ。

……びっくりした。

まさか萌衣からメールをもらえるなんて思わなかったけど、確
かにグッドアイディアだと思う。

この方が微妙なニュアンスも伝わりやすいしな。山根さん挟む
とどうも伝言ゲーム化してる気がするし。

早速今日の話を書くよ。

今日は新学期の始業式だった。

クジ引きで席を決めたら有名な七瀬の双子に挟まれた。

やたら馴れ馴れしいのと、ぼそぼそしゃべるペンギン眼帯。ど
っちも子供みたいな二本結びにしてる。

どっちもわけわからん。すごく変な奴ら。

ドラマの練習はちょっと調子よかった。

p.s. 明日は外出で遊んで来たいいよ。いや、是非行ってこいって。

寛彰

W1 〇月〇日 土

ありがとう。今日は思い切って外出してみました。
一通りのウィンドウショッピングできました。
コミックも漫喫で読んできました。

その娘たち、二人とも可愛いんでしょ？＜双子

私もツートールにしようっと。

萌衣

W2 〇月〇日 日

見た目可愛くないとは言わない。＜七瀬姉妹
でもあいつらわけわからんし、絶対に萌衣の方が可愛い。

今日のドラマは微妙だった。

寛彰

W2 〇月〇日 月

褒めてくれてありがとう、って言っているのかな？（苦笑）

できれば、でいいんだけど、続きが読みたいので「ざぼん」「ゆ

んゆん」の新刊もあると嬉しいと思います。

萌衣

W2 〇月〇日 火

ドラムセットが新品同然になった。萌衣が診てくれたんだな。
頼み事上手すぎ。これでダメって言ったら俺悪者じゃん。＜ざ
ぼん&ゆんゆんの件
買うのまでは許可するから、置き場所だけはくれぐれも気をつ
けるように。
明日の夕方なら空いてるよ。

寛彰

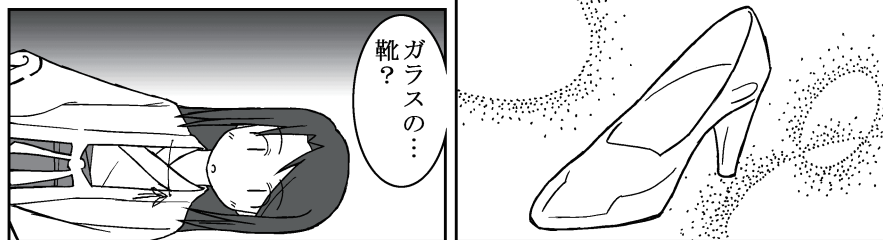
W2 〇月〇日 水

「ちよいとそのネギしよった美少女」
「ネギ？」

振り向けばきんきら金髪。
派手を通り越して神々しいまでにキラキラした、いやに露出度
の高い服のお姉さんが仁王立ちしてた。

「……春だしね」

関わり合いにならない方がいいと直感。
いつまでもヒロ君を待たせるわけにも行かないし。



「こちら、そのみつくミクなロングツイテっ娘！」

踵を返したところで、既に目の前に回り込まれている。なんて機動性。

「既にロックオンされてた模様。
「察するに、私のことでしょうか？」
「イグザトリイ！」」

気づいたときには両肩をがっしりと捕まれていた。

うわ、全然反応できなかった。

見た目も中身もただ者じゃない

「ええと、何の御用でしょう？」

私よりは大きいけど、大人の女性としては背は高い方とはいえない。でも凄い存在感。二十代中頃くらいかな？

おでこには捻れた角っぽい形のアクセサリ。きつと指揮官機なんだろう。

「私と一緒にバンドやりなさい」
命令形ですか。

ありがとうヒロくん。

放課後早速ぎょん買いに行きました。

道を歩いてたらユリさんって人につかまって、何故かバンドにスカウトされちゃって。

話だけは聞かって約束させられてしまいました。

帰りに山根さんが途方に暮れてたので保護しました。GPS携

帯を充電中だというのに、近くだと思って油断したそうです。気をつけてあげてください。

萌衣

W2
○月○日
木

なんかよくわからんけど。週末は特に予定無いから何とかなるよ。

でも、楽器やってみせたわけじゃないんだろ？ それってヘンじゃないか？

その人本当に信用できるのかな？ 気をつけて。

今日のドラム練習はいまいち調子悪かった。

山根さんには携帯二つ持ってもらう事にした。

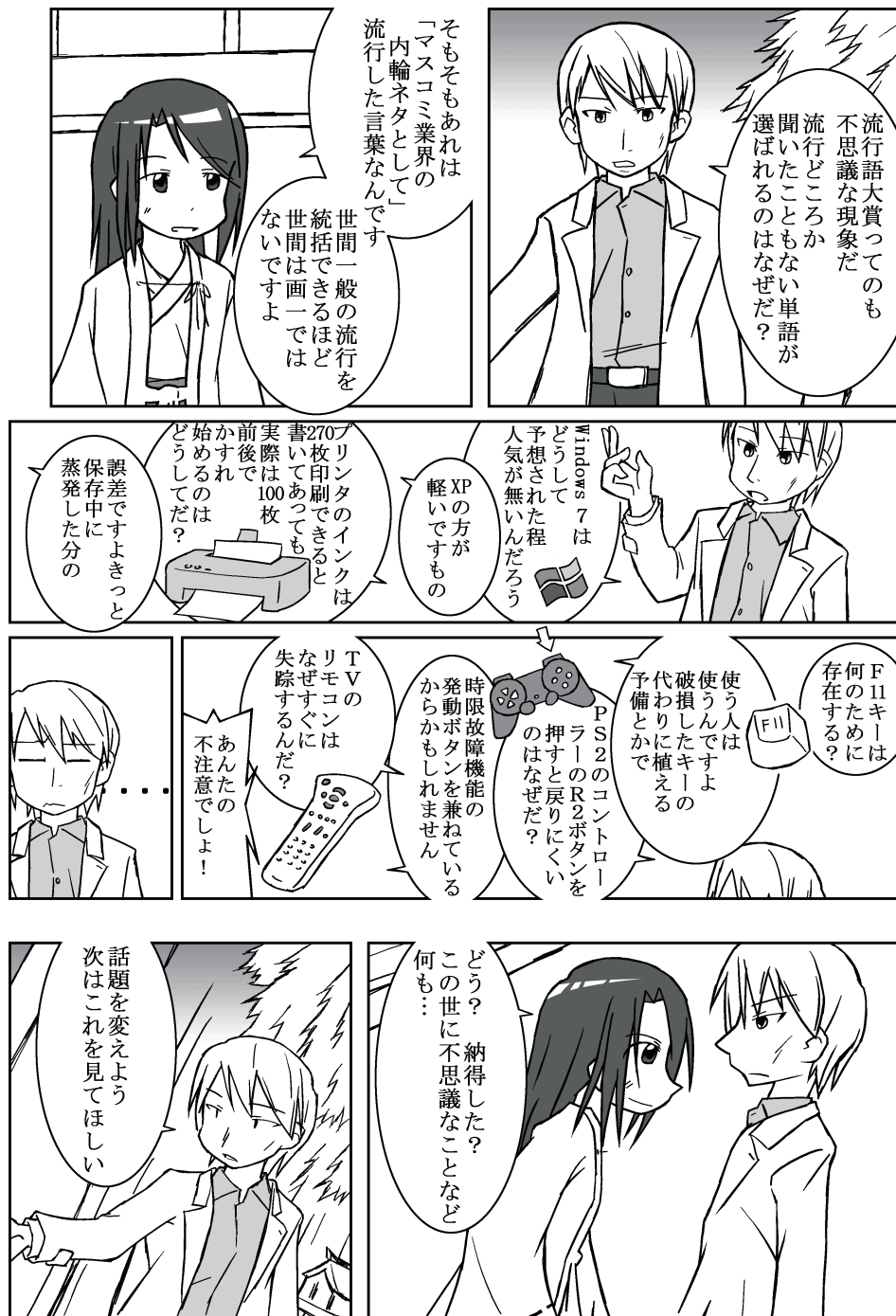
寛彰

W2
○月○日
金

「あなたドラマーでしょう？ 立ち居振る舞いでわかるわ」

って初対面で言い切られちゃいました。
私の素性を知っている人がいる筈がないし、本当に目利きだとしたら大したものだけだ。

もしかして業界の人かも。今度お父さんが帰ってきたら尋ねて



みてください。
個人的な印象としては、少なくとも小細工を呈するようなタイプじゃない気がします。

萌衣

W2 〇月〇日 土

萌衣が信じてるっていうなら、もう止めないけど。
なんかあったら俺を呼ぶんだぞ。

今日はがっつり練習した。だいたい調子を取り戻せたかな。

山根さん結局夜まで起きてこなかった。しんじらんねー。
昨日のカレーがたっぷり残ってたし、冷えても旨かったけど。

寛彰

W3 〇月〇日 日

旧商店街のすみっこ。ユリさんにもらった地図に従ってたどり着いたのは、“うさぎの穴”なる小さなアニメグッズショップだった。

これ、入るのにちょっと勇気がいるな。
「ああ、その長いツイテ。聞いている聞いている。こっちこっち」

店先でうろろしてると、エプロンに糸目のおにさんが声をかけてきた。

「そっちの裏が倉庫になってるから」

「……ええと」

ちらりと見回しただけでも、店内はそっち系のフィギュアやポスターであふれかえっている。

迷彩服やガン〇ムの装甲を着込んだり〇ちゃん人形とかもあるし。

これは早まったか？

「あー、うんうん、後ずさらないから。怪しく見えるけど大丈夫大丈夫。そりゃ美少女は大好きだけど、クイーン、もといユリさんの関係者に手え出すほど命知らずじゃないから」

やたら重ね言葉を連発しながら、微妙に信用出来ない台詞を吐く。

見た目も含めてものすごく怪しいおにさんだが、ユリさんの名前を出した時に声が震えていた。

ここは彼女の威光を信用する事にする。

「先に行ってもらえますか？」

「……信用無いなあ」

もちろん気は抜かない。バッグの中にはちゃんとスティックを持ってるし、妙なそぶりを見せたらドラムショットタイフーン決定。

「こっちこっち」

倉庫の奥の奥、空の段ボールを三つほど横にどけると、地下へと続く階段の入り口が出てきた。

これ、洪水になったら危なそう。



「はい。ヒロ君と仲良くしてくれてありがとうございます」

無業さんも面白いな。ほんとよく分からないけど。

「そういえば、『りんべんバンド』の方は解散しないんですか？」

『コーカロリィ』と結成目的は同じだったはずだし。

「たった今、貴女がメンバー登録されたところで」

あれ？

「でも私一人の身体じゃないので、勝手なことは……」

「ヒッキーを逃がしたつもりはないよん。ヒッキーと一心同体なら、モエっちも自動的にうちのチーム員だ！」

「そろそろマブダチ認定。よろしく高天萌衣」

「よろしく……おねがいます……うっ、くっ、くっ」

「あ！ ああ!? 泣かせた！ 泣かせたっ！ ペンペン極悪！

人非人！」

「ちがう。リンリンが強引だからだと思う。私何もしてない。私知らないから」

「こら、逃げるなペンペン！ アタシ置いてくな！」

「くっ、くっ、くくく、ふふ、ふふふ、あは、あははははははは！」

「あれ？」

両親が出来ました。

同じ歳の友達が出来ました。

何もかもあなたのおかげです。

今こうしてこの世に存在していられるのも、きっと、あなたが

私を見つけてくれたから。

ありがとうございます、ヒロ君。

萌衣

「もちろん、他の人には内緒にしておいて欲しいんだけど、お嬢ちゃんは次からは勝手に入って来ちゃって構わないからさ」

コンクリート打ちっ放しの殺風景な螺旋階段を降りながらも、おにいさん声は不釣り合いに明るい。

「ちなみに、約束をやぶったらどうなります？」

「いや、僕的にはどうでもいいんだけどね。これユリさんの秘密基地だからなあ」
なるほど。

「ほらほら、着いたよ」

階段を降りきったところには無骨な鉄扉がしつらえられている。一見すると、薬物中毒者の入り浸る怪しげな秘密クラブでも隠されてそうな雰囲気だが、

ぎぎぎぎいと渋い音とともに開かれた扉の向こうにあったのは、小綺麗な音楽スタジオだった。

「へえ」

ずらりとならんだ音響機材の大半は有名メーカーの最近のモデルだが、一部いかにもヴィンテージでいかにも統一感がない。

例えばモニター用らしいオリジナルノーマスと4343がいくつか並んでたり。

奥にはかなりの広さの録音ブース。

しっかり防音が施されているだけでなく、無音仕様の換気扇も多数設置されている。

ちよっと手を打ってみても、いかにも地下室っぽいこもったこもりはない。壁面の音響仕上げも緻密なものだ。

さらに奥の楽器庫を開いてみると、大変な数の名品が無造作に突っ込まれている。

さっと流してみただけでストラディバリウスが三つばかり混ざってた気がするけど、深くは考えないことにする。

琴や三味線の類はよく分からないけど、そこらへんもきつと名の知れたものなんだろう。

「ユリさんって何者なんですか？」

おにいさんは応えず。両手で口を押さえて見せた。
じーっ、と見つめてみると、目をそらされた。

「……留学時代の同級生だよ。防空壕跡を見つけ出して、俺を管理人に据えて、いつのまにかこんなにしちまった。ああ、冷蔵庫はそっちにあるから好きな飲んでいいと思うよ」

「ありがとうございます」

露骨に話題を逸らされたな。

「そうそう、いつまでも店をほっとくわけにはいかないから、俺行くわ。なんかあったらそのプザーで聞こえるから。じゃじゃ」

しゅたっ、と片手をあげると、おにいさんは逃げるように地下スタジオを去っていった

「さて、どうしたものかしら」

お呼ばれしたとはいえ、主の居ない場所であり勝手な真似もどうかと思ひ、コンソール前のシートにかけて待つ事にする。

約十五分後。鉄扉が開いた。

「……ほら、先客がいるよ」

「本人はまだ来ないわね」

入ってきた二人組と目があって一礼。

後から入ってきたお姉さんは、人形みたいな硬質の美貌の持ち主だった。表情にはちゃらちゃらしたところはないのに

対し。ざっとシャギーの入った淡色のセミロングヘアはいかにもギヤルっぽく、組み合わせに違和感がある。紫城高(偏差値高い)の焦げ茶の地味なブレザーに、いまさらなルーズソックスがこれまたミスマッチ。

いいところお嬢様がちょっとギヤル真似てみました、って感じかな。

とりあえず、コードネーム「お嬢様」ということで。

「ん」

先に入ってきた黒髪ロング(首の後ろで結ってる)のお姉さんは細身の長身ですらりと手足が長い。同じくキレイ系の顔立ちだが、いかにもクール系のお嬢様と比べれば比較的取つきやすそうな雰囲気だ。

「初めましてお嬢さん。ええと、三ヶ所ナナです」

年下相手に深々と腰を折り、にこやかに挨拶してくれた。第一印象は正しかった模様。

声もちょっと低音で格好いいなあ。

「これはご丁寧に。わたし、高天萌衣といいます」

「古河ミノリよ」

「お嬢様」が簡潔に名乗る。

「ああ、この娘結構人見知りするんだ。つっけんどんだけどクルぶってるだけで実は寂しがり屋だから、あいたたた」

ミノリさんはナナさんの足をぐりぐりと踏みまくっているが、ナナさんは笑顔を崩さない。

なんとなく二人の力関係が分かった気がする。

「あの、お二人もユリさんに？」

「うん」

W8 〇月〇日 土

アニメショップ地下のスタジオに両バンドのメンツ+αが集合。立食形式の打ち上げパーティーと相成った。

「本日現在この場をもって、『コーカロリイ』を解散します」

惜しいと言えば惜しいなあ。

でも、あくまでも黒六連を撃破するためのドリームチームだから。いつまでも引つ張るのは良くないだろうし。

「そういえば、黒六連、どうなっちゃったんですか？」

自分たちのことでバタバタしていて失念していたが、あとの收拾が大変だったでしょうに。

「即日解散を決めたよ。まあ、彼らの腕なら幾らでも食っていくクチはあるだろうけど。もう、あんな強烈な影響を振りまくことはないだろうな。ミッシェン成功だよ。ありがとうな、モエちゃん」

とアキオさん(もう篤史さんでいいか)。

「……ちなみに調兄いは無事実家に連れ戻された。しっかりお仕置きもした。だからいつでも合奏できるのです」

サガノさん、もとい歌音さんが気が抜けたまま淡々と語る。

天才って怖いです。

「け、結局、黒六連って何だったんでしょうね？ あんな急に現れた凄腕集団って、人為的を通り越して異常なものを感じませんか？」

解説屋ユリさんがすぐに反応する。

この人がいれば辞書いらずでニュースいらず。

説明がちと中途半端なのと物騒なのが玉に瑕だけど。

こっくり。

二者二様の反応だが、ともに肯定。

「バンドに参加して欲しいって言われたんですけど」

「……バンド？」

顔を見合わせる二人。

「聞いている」

目で問うたナナさんに対し、ミノリさんは首を横に振る。

うわあ。私の時よりひどい。

「あの人がいつも説明足りないから。迷惑かけてごめんね」

心底申し訳なさそうな顔のナナさんに、一層深く頭を下げられた。

「いえ迷惑なんて。音楽にもあの方にも興味があつたので。それにお二人にも興味がわきました」

「そう言ってもらえるとありがたいよ」

と、ナナさんは拝むようにする。

明らかにこっちの方が年下なのに。腰が低い人だなあ。

「その姉さんがまだ来ていない。郷に入っては郷に従えというし子供じゃないのだから時間は守って欲しいわ」

そう言うミノリさんの表情はクールだが、口調からは多少おかしむりのようだ。

発言からもギヤルっぽさがまるで感じられない。やっぱ付け焼き刃っぽいな。

今確か、あの人を姉さんと呼んだっけ。

確かに、顔立ちはちょっとタイプが違うけど、問答無用で回りを圧倒するような存在感はそっくりに思える。いかにも日本人離れした派手さをふりまくユリさんに対し、どちらかといえば陰性

「あれはとある術でもって未来の可能性を限界まで引き出された者達。まあ秀才の前借りのようなものね」

ミノリさん(詩紀さんだっけ)の歌の例もあるし、そういう魔法のような力がこの世界には沢山あるんだろう。疑問に思っても仕方ない。あるものはあるのだから。

「それでもまだまだ伸び代のある天才に敵わなかったわけだし。一生精進を続けて立った境地があつたとも言えるけど」

うわ辛辣。

「詳しくは言わないけど、彼らはいずれもそれなりの音楽一家の御曹司だったのよ。過剰な期待とそこその才能。本物の天才との出会いと挫折。そしてそれに付け込んだ偽りの協力者がいたってこと」

うーん、他人事に聞こえない。精進しよう。

「結論。無能は罪じゃないけど、根拠のないプライドは重罪よね」それが罪なら貴女以外はみんな刑務所いきです。

はあ。

肩越しにツーテールの双子の姿が見える。

「あ、すみません。ちょっと失礼します」

「ん、ヒロ君の分までしっかり楽しんでいきなさい」

「初めまして。撫菜さんと鈴菜さんですね？」

「そういうオヌシはモエタニアン！」

「ふふ、何ですかそれ？」

ヒロ君の言うとおりで。鈴菜さんってよく分からない。

「高天寛彰には世話になったわ。今やマブダチと言ってもいい」

「ココロノトモやね」

「寛彰の中には亡くなった胎児の身体が残ってるって話だけど、どうして気づいたのかしら？」

「七瀬のペンペンが、右目で見るとヒロ君の胸の真ん中に何かあるって言うからね。試しに撮ってもらったらビンゴだったのよ」
前々から普通じゃないとは思ってたが。レントゲンかよ、あいつは。

「でもそれが萌衣ちゃんとは考えにくくない？ 二卵性の胎児がお互いを取り込むなんて事があるの？ 男の寛彰に取り込まれたなら、もう一人も男だって考える方が自然でしょう？」

「妙さんの疑問ももっともね。まあ、母親は自分と違う遺伝子の子供を宿せるわけだから、二卵性の取り込みが絶対に起こらないとは言えないでしょうけど、それが萌衣ちゃんであるかないかと胎児の性別は関係ないと思うわ」

「ふむ。そのココロは？」

「萌衣ちゃんはその筋では有名な魂でね。もともと女性属性なのよ」

「なるほど。オカルトってやつはほんと身も蓋もないな」

親父の意見に激しく賛成。

「くっ。こうなると分かってたら……星司と夕子か、愛と善にしておけばよかった」

……ここまでくると賛成できないな。

「愛と言えば誠じゃないの？」

お袋、あんたもか！

「どちらも素敵なご意見だけど、寛彰と萌衣はもっともずっと古い、大陸のカップルに由来する名前だと思ってたわ」

それが誰と誰なのかはついに教えてもらえなかったが、

な印象のミノリさんだが、よく見ればこれまた日本人らしからぬ綺麗な輩色の目をしていたり。

ちやうどそのとき、聞き覚えのある声とともに鉄扉が開いた。

あれだね、噂をすれば、ってやつ。

「珠坂時間でぎりぎりセーフね！」

セーフ、にやたらと力をこめて宣言。金色派手派手のお姉さん登場。

黒エナメルの超ミニにロングブーツ、肩出し・腿出し・ヘソ出しと、相変わらずの露出度だ。同性でも目のやり場にちょっと困るぐらい。

「そんなところまで地元になじまなくて結構ですから」

ナナさんはツッコミ係似合うなあ。

「よしよし、モエちゃん来てるわね。これで五人揃った」

さらっと流されてるし。

五人？

もう一度当たりを見回してみると、どきっ。

開け放たれた扉の陰からそっと顔を出してこちらを覗いてるお方が一人。

黒鉛のような、鴉のそのような、黒目がちだが感情の反映に乏しい目。

「……佐倉先輩？」

同じく存在に気づいたミノリさんが呼びかけると、その人物はそろりそろりと部屋に入ってきた。

猫背。お世辞にも機敏とは言えない動き。垂れ目はともかく、表情も澁刺とはとても言えず……ぶっちゃけ目にハイライト入っ

「ああそれから、最後にヒロ君に言うっておかないとね」

さおりさんは、いかにも微笑ましそうな笑顔で言ったものだ。

「一番大切な人と中途半端に近付きすぎて結ばれる可能性を失いかけた彼女は、みずから君に取り込まれることを望み、そして絶対引き離されない立場を手に入れた、ってのはどうかしら。わりと燃える設定じゃない？ それこそ出来過ぎなぐらい」

「……」

「どこかの探偵が言うように真実は常に一つなのか。それに足るだけの観察者による認識が幻想に過去を与え真実となしたのか。時の流れの中にある限り私たちにはそれを知るべくもないけど、同時にそれを区別する意味もないのよ。ま、自信を持つことね」
さおりさんの残した言葉は、彼女なりの激励ではあったんだろうけど……どうにも据わりが悪い余韻を帯びていた。

こころへん、萌衣には話さないでおこう。

喜べ萌衣。

ユリさんのおかげで一件落着だ。

もうあんまり会いたくないけどな。あの人怖すぎる。

ああ、まだ週末に打ち上げがあるんだっけ？ そっちは任せるわ。

寛彰

てない。

流しっぱなしの量の多い重たそうな黒髪が顔に掛かって片目を隠しており、生成り色のカーディガンと長すぎる紺のブリーツスカートが、だらーとした印象をさらに増強している。

「……あ、ドア」

扉が開けっ放しである事に気がついたか踵を返そうとするが、ナナさんがすでに閉めに行っている。

「……ありがとう」

リズム悪いなあ。

この見るからに使えなさそうな（ゴメンナサイ）お姉さんの顔にはなんとなく見覚えがあった。

佐倉、さくら、サクラ……うーんと？

「知りあいな？ ミノリちゃん」

「去年卒業した先輩よ。今は珠大の音楽学部」

「へえよかった。ちゃんと経験者を呼んでくれたんだ」

ナナさんが後ろで聞き捨てならない事を言っている。

「経験者どころか高校時代からブ」

ミノリさんの台詞を遮るように、ユリさんが紹介を始める
「こちら百枝サガノちゃんよ。バンドに興味があって初めてみたんだって」

「……姉さん」

どうやら押し切られた様子。

「よろしく願います、『百枝』先輩」

ミノリさんは胡散臭げな表情を崩していないが、ナナさんは順応性高いなあ。

「しっかし」

ユリさんはやにやししながらナナさん達の周囲を回る。
「化けたわね、あんたたち」
「姉さんほどじゃないけど」
ナナさんも頷く。

やっぱり、化けてるんだ。普段が見てみたい気がするけれど、ちょっと怖い気もする。

「……どうも。あとサガノでいい」
遅っ！ タイミング悪っ！

ふらーっ、とお辞儀するサ○コもといサガノさん。危なっかしい。
こういうところは実に浮世離れしてる。さすが芸術家の卵。

「もしかして、気づかれてない？」
「いや、どうだろう。あまり興味なさそうだけど」

ナナさんの言うとおり。このサガノさんって女子大生さんは細かいことを気にするタイプには見えない。

しかしどこかで……どこだっけ？

「さて、早速だけどパート発表！ だららららららら」

ユリさんは飛ばしてるなあ。そろって自己紹介も無しですか。

「ちっとも了承してないのですけれど……」

ぶつぶつ言ってるミノリさんの肩に手を置き、ナナさんが達観した様な表情で首を横に振る。

ああ、言うだけ無駄なのね。

「ばнкаばーん！」

ユリさんはやたら上手いロドラムとファンファーレについて、誇らしげに発表した。

「リードボーカル、ミノリちゃん。ギター、サガノちゃん。キー

「お久しぶり、高天夫妻。機械神の役を果たしに来たわよ」
「四三さん……息子のこと、何かご存じなんですか」

さすがの親父もこの人相手じゃ引くよな。

「半ばは推理でしかないけどね。お二人の息子さん達にはかなり世話になったし、ここらで借りを返しておくから」

達、と言った。俺と萌衣を別の人物として認めているという意味だ。

「知人に魂いじくりまわす専門家がいるんだけど。彼女の理論に従えば、ヒロ君とモエちゃんにそれぞれ別の魂が関わっているのには疑問の予知はないわ。教授が相手にしているような通常の多重人格は脳レベルでの別回路だけど、さらに一つ上の段階、脳に量子干渉して判断を偏らせる上級回路が二系統ある状態ね」

「たとえば私は揺光^{アルカド}の鬼である揺^{ゆり}を呼び込んで仮想的な二連精魂を形成しているけど、いわば優先権のある合議制のような状態といえるわ。『コーカロリイ』をやっているとどのように判断の99%までを彼女に任せてしまう事はあっても、二つの衝動の存在を自覚しているし、互いに影響も与え合うわけ」

今、さらっととんでもない事言わなかったか？ この人。

「従姉妹の詩紀^{シキ}と美紀^{ミキ}は天然物の二重精魂だけど、状況からのフールドバックでロードバランスが極端に偏りはしても、やはり常に両方が活動しているようね」

「でもヒロ君とモエちゃんの場合ちょっと違う。常に魂の一方のみが脳に干渉していて、活動する精魂が完全に切り替わっていると推測されるわ。いわば交代二連精魂^{オルタナートデュアルコア}とも言えるべきかしら」
「とはいっても、干渉を受け続けた脳内にも、互いが別々に使う回路と共用して使う回路ができてしまっているでしょうし、一方

ボード、あたし。ベース、ナナちゃん。ドラムス、モエちゃん。そういうことで、あと細かいところは適当によろしく！」
適当って。

「楽器はその辺のどれでも使ってもいいし私物持ってきてもいいし、リクエストあったら注文しとくから」

お許しが出たからか。サガノさんが楽器庫の奥へとゆらゆらふらふらと引き寄せられていく。

皆が凝視する中、彼女が持ち出してきたのは、やたらワルそうなデザインのエレキギター。

あのストラップ何の皮だろう（間違っても『革』って感じじゃない）。ネックが微妙に蛇行してるし。全体に違和感があって、いろいろ歪んでる感じ。角度とか。

どこぞの邪神の従者が演奏してもおかしくない雰囲気なので、「慄然たる宇宙的恐怖を体現したギター」と密かに名付けてあげた。

「さすがサガノちゃん、お目が高い。心臓発作に脳出血に窒息、あと感電。それを弾きながらステージ上で謎の死を遂げたギタリストは片手の指ではきかないわ」

やっぱり ＊のろわれている ＊ んだ。

それを聞いたナナさんは嫌そうな顔をしているが、サガノさんは意に介した様子がない。

ばかりか、ギターを手にしたサガノさんは、視線も定まり筋もぴんとのび、瞳にハイライトも入って、まるで別人のように見える。

彼女は脚を組んで椅子に腰掛けると、その慄然中略ギターを爪弾き始める。

の理想が他方を変化させるような形で間接的に影響を与えてる可能性もあるわ。自己理想像のシステムを利用した理想の異性像の錬成とでも言えはいいのかしらね。自分で演じたり否定したりせずとも、それをやってくれる相手を内に抱えてるわけ」
何この長台詞。

さっぱりわからん。

「何が言いたんだ？ って顔してるわね。簡単に言うと、二人は基本的には独立した存在だけど、身体は同じだから脳内でお互いの趣味が筒抜けなのよ。なら、無意識に相手の理想のタイプが分かっちゃうし、自然にそうならうと努力しちゃうんじゃないかってこと。ぶっちゃけ、ヒロ君、モエちゃんに惚れてるでしょ？」
「うぐっ！」

「安心なさい。誰が見ても両思いだから」

両親も山根さんも何度も頷く。

「恥ずかしくなるぐらいアツアツだよな」

「新婚時代を思い出すわ」

あんたら今でもアツアツだろうが。回りが引きまくるぐらい。

「でもちょっと禁断の関係っぽいですよ。姉弟なのに」

山根さん、またいらん事を。

「法的にも学問的にも無問題よ。モエちゃんは法的には存在してないし、身体は一つなんだから遺伝的問題も起こりようがないでしょう」

このお姉さん、デリカシー無いなあ。珠坂旧家の連中ってこんなばっかか。

「一つ疑問があるわ」

お袋が挙手した。

専門用語が多すぎてほとんどわからないけど、最後の外科うんぬんってのがとても不穩。

「大いに関係ありそうなものは見つけたが、科学者の端くれとしては関係ありとは言いたくないのですよ」

「はい？」

「こりゃ半ばオカルトの領域です。本当の専門家のお出ましを願うしかないようだ」

精神科の教授はいい人でした。問題ないのなら治療はいらないんじゃないかって。

ただ……驚かないでくださいいね？

検査で私の本体が見つかったんです。

胸の奥に半ばミイラ化した胎児のようなものが見えるそうですよ。

とても珍しいけど、双子がもう一人の身体に取り込まれてしまいう事があるって。

でも医学的には生きてるはずも意思があるはずもないっていうんです。

また別の専門家を紹介されました。明日尋ねてくるそうなので、ヒロ君お願いしますね。

萌衣

お約束の「禁じられた遊び」。

しかしこれまた見た目にそぐわぬ精神に悪い音色で、正気度下がりがそう。「神官によって禁忌とされた冒流的な遊戯」って感じ。

アンプに繋がなくてくれてよかった。

「それを弾きこなせるなんて、私の目に狂いはなかったわ」

頭は見事に狂ってそうだけど、とは言わない。

「そんなものどこから拾ってきたの？ 姉さん」

「某神社でお払いに失敗しては被害出してたんで、見かねて引き取ったのよ」

ユリさんやミノリさんはけろっとしてるけど、ナナさんは結構ダメージ受けてるみたいだ。

「てい！」

彼女は半ばよろめきながらもサガノさんに歩み寄り、なんとか音源を奪い取る事に成功。グッジョブ。

「!？」

あ、たちまちしおれた。サガノさんってギター中毒者？

「これは封印です。人的被害が出ます」

「えー、このギターなら一発でオーディエンスの心を鷲づかみ、失神者続出間違いなしよ」

「発狂者も、でしょう。ユリさんも本気で音楽を志すんなら、こーゆう危険なアイテムに頼らず技術とハートで聴衆を魅了してくださいよ」

今ナナさんがいいこと言った。

「本物には及ばないけどまあまあ下劣な音の出るドラムセットもあるんだけど、モエちゃん、叩いてみない？ フルートはあたしがやるから」

W8〇月〇日 金

「吉沢教授の紹介で来たわ」

ファッショングラスにボブカットのものすごく偉そうなお姉さんは、玄関先で仁王立ちして宣言した。

「ああ、いらっしやいさおりさん。この間のライブ、凄かったですよ」

山根さんが嬉しそうに迎えに出る。

「山根さん、知り合い？」

「知り合い？ とはご挨拶ね、ヒロ君はともかくモエちゃんの記憶には私の情報がある筈よ」

馴れ馴れしく呼ばれ、戸惑いや怒りより悪寒を感じる。

「モエちゃんに会ったのは、『揺』が出てる状態だけだね」

ユリ？

萌衣の認識している彼女の容姿とは全然違う。目の色も髪の色も違うし、黒一色のパンツルックという服装もユリさんとは異なる趣味だ。

「じゃあ、あなたがユリさんの正体、ハートの女王って人か」

「正解。珠坂商工会議所会頭、四三揺子って顔もあるけど。今日は本戦で来たから、斗流十家宗家代理、新川さおりと名乗っておくわ」

斗流の宗家え!?

そんなお人を自宅にまで呼びつけたなんて、叔父さんが聞いたら卒倒するな。

彼女ははずかずかと居間にまで入り込むと、勧められる前に上座に回り、椅子の背に浅く腰掛けた。

「叩きません」

そんなんじゃ喜ぶのは世界の中心でなんか叫んでる邪神様だけですね。

「普通にやりましょう普通に。ミノリちゃんが歌うだけでも危なっかしいんですから」

ナナさんはなおも熱心に主張している。

はあ、綺麗な人なのに、ジャ○アンなのかなあ。

あ、足踏まれてる踏まれてる。

「……まあ、それで妥協しときましよ」

「十分です。くれぐれも、普通の楽器でお願いします」

「わたしも賛成です」

と、ナナさんに同意しておく。

「わかったわよ。じゃあ黒のシールが貼ってあるやつは使わないようにということ」

「緑と黄と赤は一体どう違うのかしら？」

ミノリさんの冷たい口調。

それは何ですか、トリアージタグですか。

「緑だけをお願いします」

「それも賛成です」

ナナさんとベア組んでツッコミ係が板についてきた気がする。常識的判断で身を守ろうとしてるだけなんだけど。

そのとき、ユリさんの方で安っぽい合成音が鳴り響いた。

……配管工がお亡くなりになった時の音？

ミニスカートのポケットから出てきたのはものすごく可愛らしいデザインの携帯電話。似合わない。

「んー、相変わらずのタイミング」

「ここ、圏外じゃないんだ？」

「外電アリ。みんな傾聴。お告げふろむアリス」

アリス？」

メールの内容を確認したユリさんは、先ほどのハイテンションぶりとは同一人物とは思えないぐらい淡々と宣言する。

「バンド名は『コーカロリイ』だって」

脳裏に浮かんだのは特大ハンバーガー。ハンバーグ三段でこれでもかってほどケチャップのかかった。

……ガールズバンドらしからぬ、いやな響きの単語だな。

「で、それはどういう意味なの？」

「私が何でも知ってると思わないように。意図の伴わない意味だけ説明してどうするの。アリスに直接聞いたらいいわ」

「嫌」

この姉妹、どっちも偉そうだなあ。ちょっと違った意味で。

「ま、今日のところは顔合わせだけね。とりあえず最年長のあたしが頭をはっておくけどいい？」

「今日だけと仰らず、幾久しくお願いします。メンバー集めたのはユリさんなんですから」

ナナさんのやたら丁寧な口調からは、若干の他意が感じられなくもない。先ほどからの会話の間にも、流されてるっぽく見えても結構言う事は言う人だっということが分かってきた。

私とミノリさんは、おぎなりな拍手で賛意を示す。

約一名、さっきからほとんど動かないしほとんど何も発言しない人もいるけど、サスペンド中かな。椅子に座ったまま寝てるのかも。

「じゃ、毎週日曜午後、ここに集合しましょう。正体不明のバンド

で行くつもりだから、くれぐれもメンバーであることを悟られないようにね」

「正体不明って……」

ミノリさん、嫌そうだなあ。姉妹なのにノリはかなり違うみたい。

あれ、静かに挙手してる人が一名。

「……では三角黒頭巾を」

「「だめです」

ナナさんとハモった。そしてサガノさんがしょげた。

ああ、私も一言だけ言っとかなきゃ。

「あの」

「なあと、モエっち？」

うーん、モエっちにされてしまった。

「一人だけ、打ち明けちゃってもいいですか？ 定期的に集まるのなら、外出の許可を取らないといけませんから」

「え？ ご両親じゃなくて？」

ナナさんが首をかしげる。

「健在とは限らないわよ」

「あ、ごめん。ほんとごめん。失言だった」

冷静に突っ込むミノリさん。慌てて手を合わせるナナさんは、やっぱりいい人だ。

「許可が出なかったら早めに言って。合法非法問わずいくらでも手を回してうんと言わせてみせるから」

と物騒な冗談を口走るユリさん。

「……はあ」

ため息とともにがつくりと肩を落とすナナさん。

「まさか！ そんなこと絶対にありません。ヒロ君はとても大切な人です」

なんで一同黙り込むんだろう？

三人が三人とも、なんとも言い難い表情を見合わせている。

「ごほん。専門家としての現時点での意見を述べさせてもらいましょうかね」

教授は威儀を正した。

「最終的な診断名をあげるにはまだ情報が足りませんが……さきほどから二言三言話ただけでも、この萌衣さんという交代人格がきわめて濃厚でインテリジェンスも高い事がわかる。主人格である寛彰くんのことにも十分配慮しているし、お互いの信頼関係も十分に醸成されていると私は見ますが」

「ええと？」

父さんが首をひねる。

「しかも、身体的な技能や意味記憶の大部分は共有されているようです。どちらかがしっかり学んだことは他人格もある程度利用できる。つまり交代している時間が無駄になるわけではない」

「つまり何が仰りたいんです？」

「ここで高山ご夫妻に質問したい。現状で何か問題がありますかね？」

ぶっちゃけたな、この教授。

両親は当然のように絶句。

「もちろん、器質的な原因があって、それが危険をはらんでいるような場合はその限りではありませんがね。いづれにせよ精神的な治療に意味があるとはあまり思えない。彼女を消去したところでただ寛彰くんが傷つくだけだ」

「ヒロ君に危険が及ぶようなら……私が消えます。でもヒロ君を傷つけたくないし、私もヒロ君と一緒にいたい。先生、なんとかありませんか？」

「……萌衣ちゃん、あなた」

「……」

「まあ慌てなさんな。そっちの結果もそろそろ出来てきてるようだよ」

教授が電子カルテの画面を二・三回クリックすると、昨日の検査結果がずらりと並ぶ。

「採血には明らかな異常はないね。脳腫瘍なんかもなさそうだよ。安心した……ん？」

「何か？」

母さんが身を乗り出す。

「放科が何か引っかけてるな。

『前縦隔に数センチ大の腫瘍あり。大部分がT1WI/T2WIとも低信号を示し造影効果にも乏しく、血流に乏しい繊維性の腫瘍が疑われる。部位と脂質の混在よりteratoma/dermoidも鑑別に上がるが、胸写側面像・CTで描出されている歯牙様というよりむしろ骨格様に連なった石灰化像と辺縁の卵殻状石灰化からも、いわゆるfetus in fetuの退化萎縮したものを見ている可能性あり。外科consultを。なお、病理が出るようならご連絡いただければ幸いです』

……こりゃまた、珍しいとか何というか。いや驚いた」

教授はまず天を仰ぎ、それから肩をすくめてお手上げのしぐさ。

「ええと、つまりどういう事ですか？」

不安そうな表情で父さんが問う。

俺の妄想なんかじゃなくて、萌衣は萌衣だってことを証明してやりたいたんだが、明日は出てくれるか？

親父やお袋には会いつらいかもしれないけど、これも萌衣のためだから。
 どうかかな？

寛彰

W8 〇月〇日 木

「は、初めまして。萌衣です」

お父さんもお母さんもしばし無言だった。

その反応、ものすごく緊張するんですけど。

「え、ええと？」

しばしあって。

はあ、とため息とともに肩を落とす。

「いや、可愛いわこりゃ。近くで見ると」

「女顔だ女顔だとは思ってたけど、ウィッグ一つで女の子にしか見えないわね」

「だから中身は女の子なんですって」

と山田さんが助け船を出してくれる。心強い。

「悪いけど、これ以上話をややこしくしないでくれる？」

「はい」

あ、援軍があっさり撤退した。頼りない。

「俺、本当は女の子が欲しかったんだよな」

「私もよ」

「いっそのままでいいかもしれない」

ああ、話がずいぶんと不穏な方向に!?

「だ、ダメですよダメですったら！ そんな事言ったらヒロ君が可哀想です！」

「いや、冗談冗談」

私の劍幕にあわてたから、慌てて手を振る。

「親でも言っていない冗談とだめな冗談があります。間借りさせてもらってる身でこんな事言っても説得力がありませんけど、なるべくヒロ君の邪魔にならないようにしたいとは思ってますから」

「怒った顔も可愛いわねえ」

「もう何年かすれば妙さん似の美人になりそうだな」

ああ、会話にならない。ヒロ君が両親の相手はきついつて言ってた意味がよく分かる。

「だから、私の容姿はどうでもいいんです！」

一通りの心理検査の後、教授の待つ診察室に。

「ほお、驚いた。本当に昨日の少年かい」

「身体は、ですけど。ヒロ君の言ってた解離性同一性障害が専門の教授先生ですか？」

「ああ、吉沢だよ。よろしくな、ええと、萌衣さん」

「はい、よろしくお願いします」

「さて早速だが、君は寛彰くんのことをどう思っているかね？ 忌憚なく聞かせてくれないか。恨んでいるとか取って代わりたいか、そういった負の感情でも構わないよ」

年少になります。

それで、毎週日曜に集まる、って事になっちゃいましたが……
 行っちゃダメでしょうか？

萌衣

W3 〇月〇日 月

「やあ、こんなところで逢うなんて奇遇だね」

「ここは教室だ。そして朝のホームルーム前だ。ドあほう」

「ドあほうなんて言う方がドあほうなんだよ、このドあほう！」

隣のバカ女はドあほうを連呼しつつも何故かご機嫌。

「時にヒッキー、楽器って弾ける？」

はあ？

何の冗談だよそりゃ。

「あのな、俺はそんな名前じゃねえ」

バカ女はさも心外そうに。

「ヒロアキ略してヒッキーじゃん」

「へんな省略すな！」

「そんなのはどうでもいいからさー、今は楽器の話題だよね楽器っ！」

つくづく人の話を聞かない女だな。

まさか今さらこんな話題を振ってくる奴が居るとは思わなかった。

「高天寛彰十四歳」

左側からは感情をまじえない淡々とした声。姉の方だ。

「ベシスト高天^{ゴッドラッシャー}、神の指^{ミツサキ}」 光照・ボーカリスト高天妙夫妻^{たえ}の一人息子にして少年ドラマー」

せめてこっち見てしゃべれ。眼帯しか見えん。

「かつて天才と呼ばれたその腕、こんなところで腐らせておくには惜しい」

「……腐ってねえ」

妹より冷静で話を通じそうに見えて、わけわからんのは妹と同じだ。

「ん!? 間違ったかな?」

「バリバリ現役だつての」

「ほう」

姉のほう、七瀬撫菜は椅子ごとこちらに向き直り、威儀を正した。

「それでは、高天寛彰にお願いがあります」

「……何だよ」

真剣な光をたたえた隻眼が俺を圧倒する。

「やらないか」

「は?」

「……うーん、叩きすぎて耳に来てるかな?」

「悪い、もう一回頼む。今何だった?」

「演らないかと言いました」

「何を?」

「演奏。私トランペット。鈴葉がボーカル兼コントラバス。そして高天寛彰がドラムス」

W8 ○月○日 火

自分が誰であるかは、私には分かりません。

分かるのは、私がここにいるって事だけです。

私がヒロ君の一部であったとしても、それでもいいんです。

そうであっても、そうでなくても、私にとっては何も変わらな
いから。

大事なのはヒロ君と一緒にだってこと。

でも、ヒロ君がその方が良いのなら。ヒロ君とは別の私であ
れ
ばいいと思います。

萌衣

W8 ○月○日 水

珠大附属病院に連れて行かれた。

いかにも生真面目そうな精神科の先生（名札に教授と書いてあ
った）と面談。

そのお医者曰く、なんでも多重人格症（ナントカ性同一性障害）

を専門に研究してるそう。

でも、萌衣はそういうのとは違うんだ。絶対に。

「いや、そう警戒しなくていい。君の友達を取り上げようとして
るわけではないからね」

「はあ」

顔に出てたか。

コントラバス?

ああ、指引きのウッドベースか。

「へえ、ジャズかよ。若いのに渋いな」

「ううん、ジャズじゃないから」

じゃあ、ベットとバスだけで何を演ろうと?

「バランス悪いぞ。寂しすぎだ」

「だがそれがいい!」

意味分かって言ってるのかそっちの脳天気女は。

「よくねえ! そんなとこにいきなり生のドラム混ぜようとする
な! パート足りないなら打ち込みも使え!」

「コンクリート?」

首をかしげる七瀬妹。

なんで土建屋の話になるんだ。

「パソコンで電子楽器をコントロールするんだよ。最悪、パソコ
ンだけでも何とかなるし」

「聞いたことある。音楽やるならY M 2 2 0 3 より2 1 5 1搭載
機がお勧めって」

七瀬姉は詳しいのか詳しくないのか。

「そんで、どんな曲やりたいんだ?」

「「ハードマーチ」」

ステレオでびたりとハモる。

「……分かるような分からないようなジャンルだな」

字面からいくと重くてうるさくて速いマーチなんだろうけどさ。

「実にかっけーの」

「魂に響く」

……どうもお手本のバンドがあるらしいが、うーん、マーチね

「その萌衣さんは今、表に出てこられるかね?」

「前もって約束をしておかない限り、勝手に入れ替わることはあ
りません」

「一度話をしてみたいですな。なら、明日は大丈夫?」

「それで納得してもらえるのなら。明日は彼女に出てもらえるよ
うにメールしておきます」

「ほお。人格間でメール連絡ねえ。そりゃ珍しい」

だからそういうのとは違うんだけどな。

その後しばらく質問に答えた後、一通りの視触診と聴診。

それから頭の体操のようなテストをいくつか。

採血。胸のレントゲンに心電図。

それから頭のCTとMRI検査の予定がたてられた。

「吉沢先生、脳外科の新川先生から外線です」

ナースから電話の子機を受け取った教授は首をひねっていたが、

「新川? もしもし……ああ、ご無沙汰しています! いえいえ。

順調ですよ。は、胸部側面? CTとMRI? 一体何を疑って
るんです? はあ、ええ、分かりました。調べてみます」

「どうかしましたか?」

「いえ、ご子息の状態に関して、別の専門家からアドバイ스가あ
りましてね。検査の範囲を少し広げます」

今日精神科に連れてかれたよ。全身さんざん調べられた。
いわゆる多重人格症の一種と思われるらしい。

それで、萌衣に会ってみたいと詳しいことはわからない、って
医者が言うんだ。

正確には、無理に休みを取らされた。

「またも食堂のテーブルで両親と差し向かい。」

「作者急病のため休載します」

そんな台詞がなんとなく口をついた。

「いや、むしろお前を救済したいんだがな」

「だれが上手いこと言えと」

オヤジ殿の脇腹にお袋様の肘鉄が入る。

「こほん。お前、女装してた時の記憶がないだろ」

「女装とか言うなよ。身体を貸してたんだから、記憶がないのは当たり前だろ」

だからこそ、俺と萌衣は交互にしか表に出られず、山根さんを介してしか連絡が取れなかった。

最近メールという手段を取り入れたが、それでも直接会って話すことができないのは変わりない。

「おかしい事になってるという自覚はある？」

「普通でないって自覚はある。でも仕方ないだろ、萌衣はこの世に生まれてこれなかったんだから。出来るだけのことはしてやりだいじゃないか」

「そこだよ」

と親父。

「仮に、兄弟の霊が取り憑いてるという寛彰の主張を認めるとしてだ……楽しい話ではないから詳しくは言わなかったがな」

一度言葉を切り、お袋の方を見る。お袋が頷く。

「……妙がお前の前に流産したのは、男の子だったんだよ」

「！」

嘘だ。嘘だろう。

そんなバカな！

「山根くんをまじえて『男なら寛彰。女なら萌衣』って話にしたことがあるがな。お前はそれを聞いたんだろう？　だから無意識にその名を名乗った」

「そんな……」

「こういう業界に身を置いてるとね、こういうのは決して珍しい話じゃないわ」

と、お袋が珍しく柔らかい口調で、慰めるように言う。

「狐憑きとかと同じだ。思いこみによる自己暗示だよ」

「そんな……」

父さんと母さんが俺を医者に診せると言ってる。

母さんはひとしきり山根さんを責めて、それから謝ってた。演奏会やレコーディングばかりでほったらかしにしたせいで、とか二人とも、萌衣を妄想か何かだと決めつけて、最初から居なかったことにしようとしている。

萌衣が俺自身なんて。そんな事があってたまるか。

違うって言ってくれ。

萌衣は萌衣だよな？

直接合いたい。そうすれば、こんなに不安にならなくて済むのに。

寛彰

え。

「とりあえず練習始めたのだ。結構行ける気がしなくもないのだよ」

「これで高天寛彰のドラムスが加われば何とかに刃物」

ことわざの用法を激しく間違っているが、なんとなくそれで正解なような気もしてくる。

「よろしく」

がしっ。

両方から腕をつかまれた。

捕獲完了って感じ。

「……やるって言ってないんだけどな」

最初から決定事項っぽい。

萌衣もこんな感じのに捕まったんだろうな、きつと。

「はぁ……で、なんでバンドやろうと思ったんだ？」

質問に対し、鈴菜は無い胸を反らして宣言する。

「そりゃー当然、地球の平和を守るためだよ」

「打倒『黒六連』」

「はぁ？」

撫菜の言う『黒六連』というのは、ここ珠坂で最近急激に台頭してきたインディーズバンドの事だ。黒ムツとかクロムとか略して言われる事も多い。

「無理だろ、アホかおまえら」

即断するしかない。

黒六連は文字通り黒ずくめのビジュアル系バンド。

確か、ちょいワル系のサングラス髭オヤジがリーダーで、最年少は高校生ぐらいの美少年。六人のメンバー全員が容姿にも演奏

技術にも恵まれている。

詩も曲もどこか退廃的ながら、強い中毒性のある流麗かつキャッチーなメロディーラインが特徴だ。

二週とおかずに次々発表される曲のどれもこれも十分に大ヒット級だが、それを使い捨てる勢いでさらに新曲が発表されていくところを見ると、相当の才能の持ち主が居るのだろう。とにかく外れがないってのが驚異的。

彼らが初めて姿を見せてわずか二ヶ月というのに、既にメジャーデビュー間近と噂されている。ド素人で相手になるはずがない。既に音楽家として地位を確立しているうちの両親と組んだとしても、演奏技術はともかく衆目を惹きつける華ではとても及ばない。実際、親父も彼らの実力は本物だと断じている。彼らの技術は若くして既に円熟の領域に達しており、寝る間も惜しんではさぞや壮絶な練習を積んだのだらうと感心していたものだ。

それでもなお、黒六連はうちで最も嫌われているバンドだったりする。

なにせ、現実の問題が起こりまくりだし。

「出来るとか無理とかじゃなくて、誰かがやらなきゃならないの。高天寛彰がやらねば誰がやる」

鈴菜はさすがに大袈裟だが、撫菜の言わんとすることは分らないでもない。黒ムツがらみでおかしな事件が多数発生しているのは周知の事実。

彼らの過激なファン（通称黒ムチャ…上手いこと言う）はやたら過激で、サイトの掲示板を炎上させたとか、集団でCDショップを襲って他バンドのディスクを捨てて回ったとか、アンチ黒ムツ派に集団リンチを加えたとか、そういう物騒な話にも事欠かな

い。

ネットを介して知ったファンの珠坂巡礼も常態となっており、駅前ホテルでの長期滞在組も数十人ではきかず、無銭宿泊などのトラブルも多々起こっているらしい。この町のすべてが恩恵を受けているのだから、クロムの使徒には便宜をはかるのが当然であり、すぐにロイヤルスイートを無料解放すべきである、などと無茶を言っただけで憚らない連中までいるとか。

そんな具合だから、サブリミナル信号を含む洗脳音楽に違いはない、って噂さえ出てくる始末だ。

「あれはイクナイものだよ！今のうちに潰さなきゃ手遅れになるかんね！」

そう言う鈴菜も、口調こそ軽いが表情はいつになく真剣に見える。

うーん。

まずい雰囲気になってきたな。

いつまでも捕まれている腕ごと双子をぐっと引き寄せ、密談モードに。

「あまりでかい声で黒ムツの悪口言うなって。刺されっぞ」

これは冗談じゃない。

既に嫌な感じの視線が集まってきている。

「ふっふーん、素人に後れをとる拙者ではござらんよ」

「大丈夫、まかせて」

と、人の心配をよそに、二人とも自信満々だ。

そういえばこいつら、こう見えて珠坂古来の旧家のお嬢で、伝来の古武術みたいなのを叩き込まれてるんだっけ。

体育の時間とか、突出していい動きしてるのが遠目にも分かる

僕は忘れて 君も忘れて 何もかも忘れ 心穏やかに生きていく

違う世界に 住まう二人の 出会いが破れて かすんで消え去るだろう

そして屈指の高難度で知られる第二間奏のギターソロ。コーカロリーのギターが加速した。

倍近い音数ながら、滑らかさも芸術性も段違い。完全に置いてきばりにされる黒六連のギター。

既に手拍子は止んでいた。

「あの音、佐倉、佐倉歌音か!？」

「驚いた。アコギとエレキの違いはあるけど、間違いないわね」

「録音オンリーギタリストのライブが聞けるとはな。これだけでも四三に感謝だ」

「ミュージシャンの血が騒がない？ぜひ共演を申し込みましょう」

「決まりだな」

おお、豪華ゲストが解説役と化してきた(笑)

三題目に至った頃には、コーカロリーの圧倒が誰の目にも明らかだった。いつもの調子を取り戻そうとサブギターの髭オヤジが懸命に楯を飛ばしているが、心の折れたバンドには届かなかったようだ。音が一つ減り、二つ減り、ついにサブギターまで消える。

曲中の物語になぞらえてバンドの印象を残すようになってる歌詞を、バンドの印象まで洗い落とすような歌詞に作り替えて、それをノリ姉が本気で歌ったのだから。黒六連もファンも含めて一気に逆洗脳をかけたようなものだ。

もんな。鈴菜が柔道部員をぼんぼん投げ飛ばしまくってたのを覚えてるし、姉の方も片目で妹と遜色なく動けるんだから呆れる。俺も叔父さんに相当仕込まれたけど、こいつらにはちょっと勝てる気がしない。

それでも、いや、だからこそどうしても危なっかしさを感じてしまう。

「既に公言ししまったのは仕方ない。相手が一人とは限らないからな。いつも二人で行動しろ」

黒ムチャには、中学生どころか小学生までいるから。

黒六連は不良学生にとっては神様のような立場になっているが、同時に、わりとレベルが高いと見なされているここ紫城中等部においてもファンの性質に大差がないというのがとても不思議だ。

「おお、心配してくれてあんがとね」

「向こうから手を出してきたとしても下手すると過剰防衛にされるから、まずは逃げる事を考えろよ。お前ら足速いんだから」

これも叔父さんに習った事だ。三十六計逃げるにしかずと言う。相手が武器を持っていたらつい反撃したくなるだろうが、そういう場合の手加減は難しい。怪我をさせないように武器を取り上げるには相当の実力差が必要だし、ちよっと力が入れば一発で過剰防衛だ。実際、集団で組み付いてくる黒ムチャ達を手近な棒で殴ってしまっただけのような話も聞く。

七瀬の双子は見た目いかにも弱々しいから心証的には有利かもしれないが、武器を持った小さな子供や老人に襲われる場合が無いとは言えない。

非常識と思うだろう？それが黒ムチャ過激派なんだ。むしろ弱々しい人たちがほど取り込まれているような気もする、と叔父さ

コーカロリーが演奏を終えたころには、盛り上がりつつあったはずの会場にはしらくムードが漂っていた。

まだ黒六連の演奏が残っているはずなのに、席を立ち始める者も少なくない。

まあ、全員ON状態だし、どうせ演奏は無理。精神的にも社会的に再起不能だろうね。

しかも、自分たちの印象まで一緒に消し去ったってのは、上手いなあ。

いやー終わった終わった。

残念だけど今回はウケただけで満足しておこうかな。黒六連退治はあっちに花を持たせてあげたということだ。

やばい。両親がなんか妙な雰囲気になってる。ちょっと予想外の反応。

親父が今日は休めって言うてくれて、話し合いが明日に先送りになったのは幸い。

でも心配不要だ。うまいことやってみせるから。

寛彰

W8 〇月〇日 月

今日は学校を休んだ。

「何やってんのあの子」

さすがにゴッドとその奥さん。私と時を同じくして気づいていたよう。

「ん。違う。ヒッキーじゃない」

ペンペンがいつものまにか仮面を外していた。

つまり、『右目で』見てる。

「身体はヒッキーだけど。中身は違うよ」

「そうなん？」

「そう」

私とは別のものが見えるペンペンが言うのだから本当なんだろうな。

「七瀬さん、それは聞き捨てなりません？」

「聞かせていただけるかしら」

ああ、ヒッキーの両親はそりゃ気になるだろうね。

「いくらなんでも下手すぎる！ あれじゃまるで別人じゃないか」

「さっきの演奏はどいっちゃったの？」

……すげえ。さすが音楽家。女装とかどうでもいいんだ。こういうところ素直に尊敬する。

わああっ！

大音響とさらなる歓声に会話を中断させられた。

間奏の間にステージに駆け込んだきたのは黒ずくめの六人組。

おいおい、ここでラスボス乱入か！

そのまま二題目は合奏モードに。

なるほど、手持ちできない楽器はあらかじめ配置してあったわけだ。

んは言ってたっけ。

あちこちで無茶苦茶をやっている割に問題になることが少ないのは、学校の先生や警察内にまで多数の黒ムチャがいるからだっていうぞっとしない噂もある。

本当に洗脳音楽だったりしてな。

「で、そういう連中を見逃したとして。次に襲われるのは、高天君の家族や大切な人かもしれないよ」

鈴菜がおちやらかした口調を一変させた。

「暴力を向けたら命のやりとりの開始宣言だったのは、獣にだって分かる当たり前のことなんだし。それさえ分からないほど『外れちゃった』相手は排除するしかないって」

いつも通りの明るい声だが、発言内容は時代小説の剣豪か何かのよう。

現代日本じゃやばすぎるぞ、その思想は。

「あのな、そういうのは警察だろ」

ある割合ではヘンなのも居るんだろうけど、基本的には権限を与えられているところに任せるしかない。それが法治国家つものなんだから。

「ううん、これはもう斗流十家の管轄。ハートの女王が首を刎ねると仰せ」

七瀬姉はいつもの調子でさらりと言う。

何の例えかはよく分からないが、ろくでもなさそうな気配がぶんぶんと感じられる。

「片っ端からやっちゃうといろいろ大変だし、出来れば大元の方をなんとかしたいんだ。物理的にやったら余計に盛り上がっちゃうかもしれないから、なるべく平和的に退場してもらえる方法を

やるな演出！

本家と合奏というのはファンバンドとしては最高に燃える展開の筈だが、観客に格の違いを思い知らせる意味もあるのだろう。見た目はともかく、今の『コーカロリィ』の演奏は本家黒六連に一段も二段も劣る。多少でも音楽の素養のある人間には一発だ。こここで差をつけられては、普通のバンドなら本家に聞き入ってしまいか、恥ずかしさのあまり演奏を止めてしまいかもしれない。

まあ、いろいろ普通じゃないんだけど。

「ん？」

ゴッドが唸った。

ユリさんがマントを打ち振った途端、音の濁りが嘘のように消えた。

同時に演奏する二つのバンドのリズムも和音も完全に一体になっている。

違うのは歌詞だけ。

忘れないで欲しい 僕じゃだめでも 貴女に似合いのヒトに会っても 君の思い出にさえなれば それで満足さ♪
忘れて欲しいよ 僕じゃだめだよ 貴女に似合いのヒトがいるから 君の思い出にさえなれない そんな僕だから♪

女性ボーカルが男性ボーカルを上書きしていく。

しまいには男性ボーカルの歌詞まで変性していく。退廃をより強い退廃に。肯定を否定に。

考えた」

冷蔵庫の残り物から一品作ってみたけどどうよ、とでも言わんばかりの微妙に得意げな表情の七瀬妹。

しかしまあ、姉妹揃ってなんつー不健全な。

このちっこい双子が心底怖いぞ。

要するに「こここで広がった黒ムチャの完全除去は町の崩壊と同義だから、原因である黒六連を潰したい。闇討ちして再起不能にしたら大暴動が起こりかねないから、人気を下げて忘れ去られるようにし向けよう」って事だろ。

間違っではないんだが……なあ？

なんだよこの上から目線。

たどり着いた結論や手段の現実味はともかく、思考経路には相当問題がある気がする。

これ、俺と同一歳の中学生が考えつく内容か？ なんか大事なものがごっそり抜け落ちてないか？

ある意味黒ムチャ以上に不健全にさえ思える。

今のうちに矯正しとかないとろくな大人にならんぞ。

とか使命感を感じてしまう俺は、やっぱりあの叔父さんの甥なんだな。

「わかった。ちょっとだけならバンドつきあってやる。だから短絡的な真似すんな。それから自分らの席もどれ」

やーな視線を浴びつつ、先生の千年一日のごとき連絡事項を聞き流す。

こんな状況で萌衣のバンドは大丈夫かな、とも思うが。

まあ、黒ムツのライバルと目されるのは簡単な事じゃないし、

彼女だけが突出したところで、バンド全体としての完成度は遠く及ばないだろう。

樂觀視していた俺だが、後にこのときの見通しの甘さに地団駄踏む事になる。

行きたいんだろ？＜バンド

ずいぶん楽しそうじゃないか。

萌衣がやりたいようにやっていいよ。

俺が萌衣にやってやれる事ってほとんど無いからな。

ああ、念のため言っとくけど、過激な黒六連ファンには萌衣も気をつけろよ。

あーそうそう、七瀬姉妹につかまって、なぜかこっちでもバンド組むことになったもった。

どうせおままごとレベルになるんだけどな。

あいつらいろいろ危なすぎるから、ちょっとくら教育してやる。

今日のドラムはなんでか絶好調。

寛彰

W3 〇月〇日 火

ありがとう。 ってこればかりですね。

「いえ。ありがとうございます」

ほんと、恐ろしい人です。

「で、みなさん準備はいかが？」

「もちろんオーケーです」

わたし。

「いつでも」

ミノリさん。

「どこでも」

ナナさん。

「……楽器さえあれば」

サガノさん（ローギア）。

「オーケー。じゃあ行きますか」

このへんは後から鈴菜に聞いた話。

『ではお待ちかねのラスト前！ 仮面のガールズバンド『コーカロリィ』！ 話題の新星が特別招待枠でタイマツに来てくれたぜ!!』

ずばっ、とスポットライト。

見参、仮面にマントひらめき、ってなもんで。

「おおう！ かっけー！」

「ユリさん似合う」

ペンペンが言うとおりだ。あの金髪は衣装映えるね。

あの人セクシーダイナマイツだし。くそー。

コーカロリィはガールズバンドなので、黒六連とはかぶらないと思いますよ。

ヒロ君とバンドが組めるって、その双子さんがうらやましいです。

……ツインドラムやりたいな。

山根さんが船をこぎながら普通に料理していました。さすがメイドマスターに最も近いと言われた人です。

萌衣

W3 〇月〇日 水

放課後の音楽室。

軽音楽部の知り合いに頼んでちょっと場所を貸してもらう事にした。

「悪い。恩に着る」

「なあに、高天には何度か無理言って叩いてもらってるしな」

と安請け合いた同級生の顔が引きつり始めるまでに、そう時間は掛からなかった。

「ケラケラケラケラケラ〜♪」

《ぼぼんぼんぼんぼぼぼん！》

七瀬妹の甲高い声とは対照的に地を這う分厚いベースの低音。あ、また弦切れた。

あれれ？ なんでドラムとキーボードが二セットあるんだ？

「これで最後？ 後は黒六連だけでしょ。寛彰の兄弟ってのはどこよ」

「いや見ろ、妙。あれ、四三じゃないか？」

「女性を観察する眼だけは大したものね……ほんと良く化けてる。経済人としての彼女を知ってれば知ってるほど、あれはわからないわ」

ヒッキーの両親がそんなことを言ってるが、あたしが驚くところは別にあった。

「あれ？」

あの長いツイテのドラマー、どっかで見たような。

すぐに演奏が始まった。

黒六連のヒット曲『ケラエノ』。

市立図書館に勤める黄色い服の司書との、ちょっと不思議で危険な恋物語を歌った曲。

うーん、可でもなく不可でもない出来。

絶対おかしい。ノリ姉ちゃんやユリさんが関わっててあんなものはずないし。

「あれれ？」

リズムの乱れを別にすれば、皆さん聞き覚えのあるドラムの音。

あーっ!!

「おいおい似合すぎだよぎげんな！」

なんで？ とかおいといて、この私に音聴くまで気づかせぬとわっ。

「……嘘だろ、おい」

の古河ミノリです」

「『コーカロリィ』楽屋によるこそ。ベース担当の三ヶ所ナナです」

精一杯友好的な態度に、ほっと一安心。

宮藤の双子がすつと進み出る。

「まさか大先輩にお目にかかれるとは思いませんでした。わたくし、宮藤初といいます」

「同じく終です。行ける伝説と同席できて光栄です。以後お見知りおきを」

宮藤のメイドさん姉妹は山根さんを知っているようだったが、不思議な話ではない。

スカートをつまんでの教科書的に綺麗なお辞儀に対し、山根さんは鷹揚に頷く

「どうもー。お噂はかねがね。珠大家政科志望でらっしゃるそうで。ぜひ頑張ってください」

「はい、先輩のお名前を汚さぬよう精進いたします」

「今後ともご指導ご鞭撻のほど」

普段感情をあまり出さないクール系のお二方が、明らかな感激の表情を浮かべている。

なんでも山根さん、業界（？）では有名人、らしい。

珠坂大家政学科で飛び級を重ね、前人未踏の成績をおさめ、メイド殿堂入りを果たした超逸材だと、自ら言い張っていたもののだ、普段の様子を見ているととても信じられないし、今まで信じていなかったが……これでは信じざるを得ない。

卒業後の山根さんに一体何があったんだろう。知りたいような、知りたくないような。

数分後、ユリさんは年嵩のイベントスタッフとともに現れた。

「では、ヨーコさん、自分はこちらまで」

「運営の方はあなたに任せたわ。適当にやっというて」

「はっ、はい！ 一命に代えても！ 失礼します！」

スタッフの態度からすると、この『適当』は『適切に上手く』の意味だろう。

しかし、ヨーコ？

「いくつあるんだ、あなたの偽名は。これで全部か？」

アキオさんが呆れた調子で尋ねたが、ユリさんは軽口ではぐらかす。

「まだだ、まだ終わらんよ」

このイベントのスタッフに顔の利くヨーコさんか。

タイムツ、ようこ。

脳内検索中。ヒット45件。

なら。

検索ワード『珠坂財界』追加。ヒット2。

珠坂商工会議所会頭、四三揺子。

そんな顔もあったんだ……なるほど、それで揺なわけね。

ということは、彼女は伝統面からも経済面からも珠坂を牛耳る立場にある事になる。こんなもってまわった方法を使わなくても

黒六連をつぶせるぐらいの力はあるそうだけど。

「いい疑問ねモエちゃん。敵を殉教させては伝説の聖人として死後までも影響力を持たせてしまうだけ。それを防ぐには、絶頂期のうちに神通力をはぎ取って信徒を幻滅させる事につきるわ」

「……質問してませんが」

「ほんの推理よ。間違ってた？」

「ヒッキー!？」

「へいへい、今張り直す」

このぐらいは手馴れたもんだ。親父にさんさん手伝わされてるさっさと作業を完了して、仕切りなおし。

《ばらばらばらばらばら!》

七瀬姉の精密機械のような単調なピストンワーク。緩急も揺らぎも全くない平板きわまりない音色。

俺にこれをどうしろと。

脊髓反射でドラムを叩きつつ途方にくれていると、めきや。

「折れた」

妹のほうが、だらりと弦を引きずったネックをぶらさげている。なんで得意げ？

「素人に直せるか！ つかそなん折るな！」

今日のところはお開きとなった。

「天才だわこいつら。少なくともうちじゃ手に負えねえ」

「こんなとき、自分が凡才でよかったと思うよね」

「どーするつもりだ、高天？」

口々に同情する軽音部員たち。

他人事かよ！

いや、他人事なだけどさ。

「……じっくり腰をすえてやるしかないだろ」

「ま、がんばれや。同じ天才のお前にならできるかもしれないしな」

部長はぼんと俺の肩に手を置いた。

「とりあえずだが、顧問に頭下げに行ってくれ」

「俺がかよ!？」

「そりゃ、ベットののおいたは飼い主の責任だろ」

「飼い主違うわっ!」

先行き不安な滑り出しだった。

つかれた。疲れ果てた。

七瀬姉妹、半端ねえ。

鈴菜のウッドベースがやたらパワフルな音出していると思ってる、音楽室備品のベースの弦を次々切るわ、しまいにヤネックを握りつぶすわ。

撫菜のベツはリズムも音色も完璧に一定で、楽譜と寸分違わぬ正確無比。凄いていえば凄いなだが、ほとんど器械体操を見てる気分になる。

結局、音はまるで素人の打ち込みにしか聞こえない。

筋力と運動神経については二人とも空恐ろしい性能だし、耳の良さも相当だったのに、音楽的な感性は限りなくゼロに近いってことがよく分かった。

しかも、備品壊したってのに、七瀬の名前出したらおとがめ無し。あんな傍若無人な発想の生き物が出来るわけだよ。

前言撤回したくなってきたけど、乗りかかった船、男子に二言なしだ。

愛する音楽を通して、あの野生児どもに人間らしいハートを取り戻させてみせる！

ツインドラムいいよな。せめて連弾ぐらいならなんとかならな
いかな？

山根さんは特殊すぎて参考にならないので真似しようとか考
えないように。

寛彰

W3〇月〇日 金

確かに上達してる。

三日目で曲がりなりにも音が合うようになったのだが、驚異
的な速度と言ってもいい。

「鈴菜、そこは、ベバーん、じゃなくて、べぼふん、な」

「おっけー」

正確に説明しても伝わらないのに、これで意思が伝わるのだか
ら不思議だ。

一流の指揮者は言葉の通じないオケでも指揮できちゃうわけだ
から、こんなんでも結果が出ればいいのだ。

と自分を騙しておくことにする。

「撫菜、四小節目の出だし、ちょっとだけためた方が良くない
か？」

「指示は具体的に」
また難しい注文を。

「……頭に128分休符を入れて、二音目の尻尾を同じだけ削っ

こりやもっと増長するな。はあ。

『リンベンの件でちょっとおしてるが、休憩を短縮して巻いてく
ぜ！ 後半開始は十五分後だ、遅れるな！』

なんでこう絶叫するかね。

「山根さん、そろそろ」

「はい」

関係者席をそっと抜け出そうとしたところを、鈴菜に補足され
た。

「おっと兄ちゃん、どこいくん？」

「悪いが所用があつてな。しばらく両親の相手頼む」

「いつも肝心なときには姿がないと思ったら、こっそり白馬の王
子に変身ですか」

「何の話だそりゃ」

鈴菜はいかにも理解不能だが、撫菜の発言は良くわからないな
りに意味ありげでドキッとさせられることがある。

「とにかく頑張るって」

「なんかわからんが、気持ちだけ受け取っとく」

「遅くなりました」

慌てて楽屋にやってきてみると。

「セーフです。ユリさんまだですから」

ナナさんが肩を落とす。

サポートのためだろうか、アキオさんやサナエさんに宮藤姉妹

てくれ」

「了解」

それと言ったとおりに出来ちゃうんだもんな。

指示を出す度に瞬間的に頭の切り替えが必要で、こっちはどう
しても混乱するが、幸い七瀬姉妹は物覚えがいい（アホだけど）。
が、一つ問題解決のめどが立つと、別の問題が持ち上がってく
るもので。

鈴菜のご機嫌な歌声が、軽音部員達の眉を顰めさせる。
下手とは言わない。歌自体はむしろ上手いんだが……

止めてくれるなお兄ちゃん 背中ではリボンが泣いてます♪

右のポケットに電動バリカン 左のポケットにスタンガン♪

あなたを狙うあの女 明日の朝には丸坊主♪

ケケラケケラ ケケラケケラ♪

止めてくれるなお兄ちゃん 頭のツイテが泣いてます♪

右の腕にはブラックジャック 左の腕には釘バット♪

あなたを狙うホモ男 明日の朝には去勢済み♪

ケケラケケラ ケケラケケラ♪

「……本当にそれ人前で歌うのか？」

「愛するお兄ちゃんへの一途な思いが伝わってきて、ぐぐっと来
るっしょ!？」

「来ねえよ」

まで集まっているというのに、まだ姿を見せないリーダーに気を
もんでいたのだろう。

「ほんとうに申し訳ありません」

「モエちゃんの事は信頼してたから心配はしてなかったけれど」
とミノリさんの優しげかつ辛辣なコメント。暗に、ユリさんな
らぶつちぎりかねん、と言ってるよね。

「……ども」

サガノさんはまだギター持っていないからローギア状態のようだ。

「そちらの新手のメイドさんは？」

ミノリさんの疑問もごもっとも。

確かに。ここメイドさん密度高すぎです。秋葉原じゃあるまい
し。

「山根愛子と申しますー。斗流十家の皆様におかれましてはごき
げんよろしゅう」

「しーっ！ しーっ！ しーっ！」

ああ言っちゃった。露骨に言っちゃった。

迂闊だったなあ。この人連れて来ちゃったの。

「気がついてても、空気を読んで言わないのがお作法ですから」
さらに危険な言葉を紡ぎだしかねない口を押さえて黙らせる。

「モックタートルにアリス、兎の穴ときて……今度はヤマネ」

「あの人、ハートの女王だったよね」

ミノリさんナナさんがなんとも微妙な表情になっていた。

「なんにせよ、粗末に扱うと危険な感じがしない？」

「ええ」

すぐに結論に達したようだ。

「不在のリーダーになりかわり歓迎します、山根さん。ボーカル

ここいらでは最大のコンサート会場、珠坂野外スタジアム特設ステージは満員大盛況だった。

収容人数六千人級の筈だが、強引に八千人強の座席を用意してある。

立ち見含めれば一万人行ってるんだろう。

去年までは座席が八割ぐらい埋まる程度が普通だったって話だから、黒六連効果で観客倍増と言うことになる。

おそろべし黒六連。

俺もさすがに緊張してきた。ライブハウスぐらいならともかく、これだけの人前で演るのは初めてだしな。

『四番手は可愛らしい地元中学生バンド『りんぺんバンド featuring ヒッキーT』。名門珠附紫城学園中等部から特別参加だー！』

おーっ！

巨大モニターにアップで映し出される双子のアップに盛り上がる会場。

写真に性格は写らない。昔の人はよく言ったものだ。

『サックスのペンペンとウッドベースのリンリンは、見ての通り双子の美少女だあ！ そしてー！』

カメラが俺に向く、こちら。

『ヒッキーTはなんとゴッドフィンガー高天光照氏のご子息！ゴッドのディスクにも何度もクレジットを残してる実力派ドラマーだぜ！』

ここで親父の名前を出すなよ。分かってねえなあ、司会。

あれが高天寛彰か？ 曲から想像してたよりずっと若いな！

とか分かってる感想が聞こえてくるとちょっと嬉しい。

しかし、きゃー可愛い！ という声がさっきより多いのはどういう訳か。

考えない考えない。

今は演奏に集中だ。

「よくぞ集った我が精鋭達い！」

おーっ！

一言目からなんちゅうMCだ。やっぱ鈴菜にマイクは問題あったか。

しかし客席ノリいいな。

「我らの曲を耳にしたこと、汝ら一生の誉れと思うがよい！ 伏して拜んで有り難く拝聴するように！」

「だまって聴けやゴルァ」

おーっ！

ここまで言われても誰も怒らないのね。

だめだ。みんなこいつらを甘やかしすぎです。

「そんじゃいくよん、『ウチとアニキのケケラケラ』！」

どっ

お気楽脳天気なメロディーとアレンジ。強烈な歌詞。

あまりの落差の激しさに客席大爆笑。

俺たちリンペン以下略は、あれの完全版を万人からの前で演り……これ以上はないバカウケを勝ち取った。

アンコールでは観客総立ちで手拍子、三回目には大合唱まで入る始末。

確かに楽しかった。あそこまで客に喜んでもらえると演奏者冥利に尽きる。

でも、良かったというか、悪かったというか。

変則ですが、明日も私書きますね。

萌衣

七瀬姉妹向けの新品の楽器が支給されてきた。十家つてのはほんと無茶苦茶だ。

あいつら、早速名前をつけてたな。

撫菜のペットは『マカロニ』で、鈴菜のベースは『スコルツェニー』（良かったよな？）だってさ。

意味については知りたくもないね。

三日目にしてなんとなく合奏になってきてるのが怖い。

楽曲の完成形が見えてきてるのも怖い。

なぜか自分の演奏が絶好調なのも怖い。

詳しくは聞かないで欲しいけど、あいつらはいっぺん普通の人 of 反応ってやつを思い知った方がいいんだらう。

家でもドラムが好調すぎる。ちょっと気持ち悪いぐらい。

寛彰

W3 〇月〇日 土

いいですね。楽器に名前。

私たちはたくさんセットで持ってるから、難しいですけど。

きつと七瀬さん達とのセッションが、いい刺激になってるんですね。

私も頑張ります。

W4 〇月〇日 日

先週と同じく『うさぎの穴』での待ち合わせ。

地上のお店には糸目のお兄さんは不在で、先週とは比較にならないほどの客が列を作っていた。

その一方で、半分を占める成人向けコーナーでは閑古鳥が鳴いている。近づこうとする者のことごとくが、メイド服姿の店員さん二人の笑顔と軽蔑混じりの視線で、それはもう面白いように撃墜されているのだった。

これ、売り上げ的にはどうなのかなあ、と苦笑していると、店員さん達と目が合った。

あ、二人ともこっち来ちゃった。

野暮ったいクラシカルなメイド服に身を包んでいる割には、一挙手一投足がいやに色っぽいお姉さん達だ。

ごちゃついた狭い通路（商品の隙間、とも言う）をポリウムのあるロングスカートで器用に歩き回れるものだ、と変なことに感心してしまう。

「お話は伺っております、高天様。わたくし、宮藤初と申します」ふかぶかー、と腰を折って、年下の小娘相手におっそろしく丁寧な態度。

「同じく、宮藤終です。お待ちしております。どうぞ、こちら

に」

宮藤姓の双子の美人。

左右逆の横ボニー。同じく片方ずつの長手袋。どっかのモアイ像モドキではないけど、鏡写しのような対。

実物を見るのは初めてだけど、知識のなかで条件に該当するのは一組。

高等部の有名な先輩達だった。

この二人、知る人ぞ知る珠坂古来の名家たる斗流十家の第九位、宮藤家のお嬢様達のはずなのだけれども。

なんでそんな大物達がこんな場末のアニメショップでメイドコスしてアルバイト？

「当主代理からのご推薦で、店主の留守中の店番を仰せつかっております」

と、終さんが倉庫の奥まで丁寧案内してくれる。

ヒロ君の友達達の七瀬さんところ程じゃないけど、相当いいところのご令嬢であるわけで。そんな人達を手伝いに出すなんて、十家も人材が払底してゐるんだろうか。

「何か御入り用のものがございましたら、遠慮無くお声をかけてください」

でも、控えめで丁寧な言葉遣いにも立ち居振る舞いにも無理をしたところはなく、人に使われる立場に慣れてる印象がある。

山根さんよりよほど本職っぽいのはどういう事だろうか。と疑問に思ってみたり。

「ええ、ありがとうございます」

地下スタジオに着いたのは、今日もまた私が最初だった。

ただでさえ週一のスローペースなのに、こんなで大丈夫なのかな。

「どうぞ」

一人だけ座らされたばかりか、終さん手ずから紅茶を入れてクッキーまで添えてくれた。

部屋にドリンクサーバーが増えてるのに気づいてしまったので、どうにも居たたまれない。

しかも飲み終わっても帰ってくれない。斜め後ろに控えてる。

「紅茶のお代わりはいかがですか？」

うちのメイドさんはこんなに気が利かない。よく言えば自主性を重んじ、悪く言えば放任主義。姉が一人増えたようなもの。

「どうかお構いなく。宮藤さんはお店の方をお手伝いしてあげてください」

「いいえ、高天様は私どもの大切なお客様ですから」

丁寧で温厚そうなのに、ユリさんやミノ리さんから受けるのと同系統のプレッシャーを感じさせるなあ。

暗に上のオタクどもはどうでもいいって言ってる気がするし。

「できれば、演奏前には一人にさせていただいた方が落ち着きますので……」

これでは落ち着かないのは確か。嘘はついていない。

「それは申し訳ありません。配慮不足でした。ご容赦くださいませ」

が、皆さん恐縮して退出していった終さんを見てみると、むしろこっちの方が恐縮したくなってくる。

悪いことしちゃったかな。

そこまでして一人になったというのに。二分と経たぬうちに、

「寛彰、今の態度はまずいわ」

「本当の実力者には失礼しちゃいかん。今まで首がついててラッキーだったと思えよ」

「息子が失礼いたしました、七瀬さん」

二人並んで、一礼。

嘘だろ!!

あの偉そうな親父&お袋が、息子の同級生に過剰なぐらい気を使ってる。

確かに旧家のお嬢だったのは知ってたが……御当主様あたりならともかく、こいつらただの中学生だぞ。

親父やお袋ほどの人物がそこまで気を使う程の相手なのか？

いやいや、両親一流の手の込んだ冗談の可能性も十分にあるが。

「くるしゅうない。下賤の者が失礼なのは当たり前だし。いちいち腹立てても仕方ないよん」

「利用価値のある間は、お友達」

「お前ら……」

大人相手でもお構いなしだよ。

鈴菜はともかく、撫菜の言い方は冗談に聞こえないんだよなあ。こいつらぜってー矯正してやる。

りんぺんバンド専用の控え室まで用意されていた。至れり尽くせりだなおい。

「スタイリストじゃないじゃん」

「高天寛彰、つまらない男」

言いたい放題だなこいつら。

「まあ、諸事情あってな」

いつもの制服だ。文句あるか。

どうせ男の衣装なんてだれも気にしてないって。

こいつら見た目は美少女だし、視線はそっちに行くだろうよ。

「そんな事情はどうでもいい！ 今日はいぐり込むように叩け！叩け！叩け！」

緊張はしなくてもテンションは無意味に上がりまくるんだな。

「さもなきやわたしが高天寛彰を叩く」

撫菜のこれも、テンションが上がってると解釈していいんだろうか。うーむ。

「叩くな」

「では撃つ、ということでおひとつ」

「撃つなっつての」

「じゃあせっかくだから私は『撃ち殺す』を選ばぜ！」

「……」

だめだ。こいつら本当にわからん。

意味のない会話につきあっていると、控え室のドアがノックされた。

「りんぺんバンドさん、そろそろ舞台袖にお願いします」

「うーいす」

「その返事は女の子としてどうかと思うぞ、鈴菜よ」

「了解。七瀬鈴菜・高天寛彰とともに舞台袖に急行、別命あるまで現場で待機します」

「いや、それもやめとけ」

呼びに来たイベントスタッフの頬は引きつりまくっていたが、最後まで笑顔は崩さなかった。プロだなあ。

鈴菜には緊張するという回路がないらしい。

「少しは心配していたんだけど」

少しだと言いつけるところが撫菜らしい。

そうそう、こいつは珍しくもペンギン眼帯じゃない。顔の右半分を隠す銀色のマスクという外連味あふれるアイテムを装備している。

「悪い。うちのスタイリストを引っ張ってくるのに手間取った」

「はい」

「おーすげー、メイドさんだよ」

「正確には『メイドさん』です。伸ばさずに『イ』をはっきり発音してくださいね。ここ大切ですよ」

と、自己紹介すらすつとばして、どうでもいい事を訂正する山根さん。

「これが遅れた元凶。うちで俺たちの世話してくれてる山根さん」

「山根愛子です。忘れ去られフラグだから、『なるちゃん』って呼ぶのだけは勘弁してね」

「七瀬ペンペンです。通称撫菜で通ってます。こちらは妹の鈴菜ことリンリン」

完全に流してボケ返した。さすが。

ボケばかり三人にツッコミ不在。会話が成立しない恐ろしい世界だ。

「買い物にナビが必須なのに午前服は不要なメイドっていう、世にも不可思議な生き物だから、この人」

「のんのん。りびーとあふたーみー。『メイドさん』」

「メイドさん」

「……」

ナナさんミノリさんが初さんに連れられて降りてきた。

「初さん、わざわざ案内には及びませんって。内輪相手に気を使わずです」

「他人行儀すぎ」

初さんは優雅に首を振り。

「狼の群れにさえ役割分担があるそうです。ましてや我々は野獣ではありませんし、なれ合ってしまったては統率などあったものでは。主筋との間には一線あってしかるべきです」

とか言い切った。

大袈裟な言い回しだけれど、そこに先輩達なりのポリシーがあるんだってのは、わかる。

斗流十家から見れば私なんて小金を持ってるだけの卑しい楽士の娘に過ぎないけど。そのポリシーに従えば、上位家の客に対しては上位家に対するのと同じだけの敬意を払うべきだということになるのだろう。

ん？

何か引くかかる。

「おはようございます」

「うん、おはよう、モエちゃん」

「御機嫌よう。息災で何よりね」

愛想がいいナナさんと、かなり愛想が不足しているミノリさん。ちょっとアンバランスでエキセントリックなミノリさんと、オーソドックスなナナさん。

でもこの凸凹な二人の息はぴったりで、いいコンビだってわかる。例えるならお姫様と乳姉妹のお付きかな。きつと普段もこんな風なんだろう。

三人分、五つの非難がましい視線が集中する、

俺か？ 俺が悪いのか？

「わんすもあ。『メイドさん』」

「『メイドさん』」

何で俺まで。

「おまえら、異様な一団と化してるな」

最悪のタイミングで親父達に補足された。うわ。

見た目コワモテな親父は着流し。若作りなお袋はいつもはまとめる髪を下ろし、妙に胸元の強調された真っ赤なスーツ姿。どっから見てもヤーさんとその情婦以外の何者でもない。

「やあ、ゴッドフィンガー氏とその奥方。お初にお目に掛かる！」

「コスプレ乙」

一発でばれていた。

「お？ なんだ、こちらのちとエキセントリックなお嬢さんたちは」

親父を引かせるとは、やるな双子。

「俺のバンド仲間だ。残念ながら」

「おう、残念だな」

「ええ、残念ながら」

失敬な。

「自分らの方から引つ張り込んだきながら……」

「もしかして、七瀬家の双子さん？」

「もしかなくてもペンペン&リンリンちゃんです」

山根さんの発言に、母親は減多に見せない緊張した面持ちになる。

……んん!?

内輪とか主筋とか言うことは。

「あの、ナナさん、ミノリさん。いきなり不躰ですけど……もしかしてお二人も、斗流十家に連なる方々でらっしゃいますか？」

ナナさんが息をのむ。動揺が見え見え。なかなか隠し事が出来ないタイプだなあ。

ミノリさんの方はボーカルフエイスに見えるけど、あれは本気で無関心なんだろうと思える。勘だけだ。

「いえ、皆まで仰らないで結構ですけど。察するに、禁則事項ですか？」

「まあ、別到大袈裟な話じゃないけど、そこはそれ」

と、人差し指を立てて唇に当てて苦笑するナナさん。私に暴露する意思がない様子なので安心したんだろう。

「そうねえ、空気読んでくれると助かる」

鉄扉から顔を出す金髪。相変わらずの露出度。

ユリさん、今日は意外と早い。

「居心地のいい場所って大抵は薄氷の上の絨毯敷きだったりするから。不用意な衝撃で崩したくないものよね」

……どこまで知ってるんだろう、この人。

「それ、激しく同意です」

考えても無駄なのだろう。どうせみんな訳ありなんだろうから。眠い目をしたサガノ先輩が、ユリさんの陰からゆらゆらと現れる。

今にもゼンマイの切れそうなキレの悪い動き。相変わらずのテンションの低さ。

たちまち壁にもたれてしまった。

「サガノっち、早速寝ないの」

ユリさんがばんばんと手を打つ。この人は他人に命令し慣れているなあ。

両手に紙袋を提げた終さんが進み出て、指示された物をメンバーに配って歩く。

絶句するナナさん。こめかみを押さえてため息をつくミノリさん。

言われるままに装着するサガノさん。

「これ、何ですか？」

「何って、見ての通りのマスクと黒マント」

それは分かっていますって。

「正体不明、って言ったでしょ」

ヴェネチアのカーニバルのあれほど派手派手ではないにせよ、仮面舞踏会でつけるようなやつを想像してもらえると近い。羽根飾りとかはついておらず、目の回りだけを覆うデザインだ。マントは裾がぎりぎりのながーい奴。

どのぐらいプライバシーを隠せるかというと、怪盗な人とか怪傑な人とか螺旋の星の人とか彗星な人とかあの程度。

わたしらオペラ座の怪人ですか。

「……バレバレだと思う」

ナナさんとは意見が合う。

「それでもばれないのがお約束ってね」

ユリさんは笑うが。

……いや、これ、笑えない。

化けの皮を剥かれるのが前提というか、そもそも隠す気がまる

……息子に仲の良さを見せつけたいだけなんじゃあ。うぜえ。

「そりゃないな。むしろ本人は親父達には秘密にしておきたがってる。話したのは俺の独断だ」

「ならもう少し詳しく話せ。まだ歳も名前も教えてもらってない」

親父の言うことはもっともだが。

「悪い。俺の口からはこれ以上は話せないけど、とにかくインディーズバンド祭に行ってくれ」

「ってことは、そいつ音楽やってるって事だな」

「聴けば分かる、って言いたいのか？」

なるほど、とお袋。

「四三さんからの招待状に『後悔させません』ってあったのはこれね」

「あいつの仕込みか。面白くなってきたな」

両親なりに納得しているらしいが、なんとなく行き違いがある気もしてきたな。

少しヒントを出しておいた方が誤解が減るかもしれないな。

「そうそう、山根さんは本人に直接会ってるはずだけど」

当の山根さんは、午前中いっぱい食のため放送休止中。

「聴くだけ無駄ね」

「混乱するだけだな」

山根さん、信頼度ゼロですね。

なんとか話の切っ掛けは作った。

きつとうまくいく。いかせてみせる。

萌衣にこれ以上肩身の狭い思いはさせない。

でないだろう。

もう既に素性は隠してるっぽいけど、この人達が何者なのか私にさえ薄々見当がつくわけだから、分かる人には簡単に分かるはずだ。

お約束。確かに物語なんかでは、バレバレの変装にもすっかり騙されてくれる。それは往々にして察しの悪い読者（視聴者）への配慮だ。

だがそれを現実世界に持ち込んでしまえば、分かってても騙されておくのが礼儀ということになりかねない。

こんな事を考えたことがある。

例え江戸時代でも情報のやりとりはあるだろう。あちこちで騒ぎを起こす越後の縮緬問屋を誰も知らないというのには無理がある。

ならば、認知症が進んで自己顕示欲の肥大した老権力者の機嫌を取るため、殿様以下藩全体で大芝居を打つことが慣例化している可能性はないか？

助さん格さんも峰打ちで倒される侍達も、みなシナリオ通りに動いているのではないか？

では裸の王様はどうだろう？

彼が真の権力者であったなら、騙されている事を指摘した人々を許しておくだろうか。お似合いですと追従した者もまた許されないかもしれない。褒めれば良いのか、笑えば良いのか、それとも諫言すればよいのか、その判断は容易いことではない。

王様は敢えて愚かな振りをして部下や市民の反応を試したのではないか？ いや、例え本当に愚かであっても権力者は権力者だ。意向の推察に確信が持てない市民達はさぞ混乱したろう。だから、

タイマツでは精一杯いい演奏してくれよな。

寛彰

W8○月○日 土

明日は頑張ります。

だからヒロ君、一緒にいてくださいね。

萌衣

W8○月○日 日

珠坂インディーズバンド祭当日。

待ち合わせ場所に現れた七瀬の双子は、濃い紫のワンピース、二本しっぽにはレースのリボン、というふざけた出で立ちだった。間違っても、バンド、って感じじゃないな。小学生のピアノ発表会みたいだ。

楽器ケースを下げてると、本当にお嬢っぽい。楽器が大きい分、ただでさえ小柄な身体がさらに小さく見える。

……って、ハードケース入りのコントラバスを軽々片手持ち!? このゴリラ女。

こいつら、見た目だけは微笑ましいんだけどな。

「よおヒッキー。真打ち気取ってようやくのお出ましか。怖じ気づいたかと思っただぜ」

「お前は少しぐらい怖じ気づけ」

「ふざけてるのはそっちだ！」

テーブルに両手をたたきつける。

「おお、悪い悪い」

掌がじんじんするが、ここで痛がってしまったてはまた冗談モードに戻ってしまうから顔には出さないように。

表情と態度で、精一杯真剣さをアピールする。

ここまでやれば、さしもの非常識夫婦にも、こちらの本気度が伝わったと見える。

「なあ……俺には本当は兄弟がいたんだろ」

両親は少し面食らった様子だったが、さすがに立ち直りが早い。

「……愛子、ね」

「まあ、良くある話だ。それぐらいでいいだろう」

二人にとっても俺にとっても愉快な話じゃない。

これまで話題になかったのは、人としても親としても当然だろう。

でも俺は話を続ける。

「小六の頃、自分の生い立ちを調べる授業があったんだよ。ちょうど親父もお袋も海外に行ってたときで、山根さんに無理言って昔話を聞き出したんだ」

「……そいつあ間の悪い話だ」

「残念だったけど、それだけの事よ」

両親にとっても衝撃は軽いものではなかった筈だ。

心騒がされず、目を背けず、その記憶をただ歴史として受け入れられるようになるまで一体どれほどの時間が掛かったろうか。

あるいは今でもなお、それは成し遂げられていないのかもしれない。

からこそ最善の策として、内心の恐怖を押し隠しつつ王の行列が通り過ぎるのを待った。空気の読めない子供がすべての配慮を台無しにするまでは。

市民達は王様を嗤ったのではない。命運つきたことを悟り、もう笑うしかなかったのではないか。

もっと簡単に言おう。

宴会で気むずかしい社長が「今日は無礼講だ！」と言い出したらどうする？

粗略には扱えないが、かといって露骨に配慮することも出来ない。

権力者の奇行というのは面倒なものだ。その行動が戯れから来る物であれば、絶対に安全な対応法が見つからない。

相手がその気であれば、どう動いても因縁をつけられるだろう。それとも最初から肅正自身が主目的かもしれない。

役所の上の階あたりでそんな議論をしながらガクブルってるであろう偉い人たちに同情する。最近とみに薄くなってきた市長さんのパワードの密度がさらに低下しそうだ。

「あっさりバレても機嫌悪くしないでくださいよ」

と苦笑混じりに言うナナさんが、

「あと、自分で正体かくしておいて配慮不足だとか文句つけるのもアウトです」

しっかり釘を刺してくれた。気まぐれな上司を少しでも制御するのが自分の役割と定めているのだろう。この人には本当に偉そうなところが全然無い。

その通り、とばかり深々と頷いたのはミノリさん。

「遊びに力関係を持ち込むのは、大人げない。そこを割り切れない。

ない。

「そうか」

だからこそ、俺は言わなきゃならない。

「最近、兄弟と連絡を取ってる、って言ったら、驚くか？」

がっ。

お袋が親父の胸ぐらを無言でひつつかむ。

想定外の行動だった。

「あ、あの、妙さん？」

「三秒あげます。釈明なさい」

我が母親ながら嫉妬深い。見事な邪推。目が三角になってます。

「知らぬ！ 存ぜぬ！ あずかり知らぬ！」

我が父親ながら、清々しいまでに勢いだけの否定連打。

「その意気や良し」

あれ？ それで引き下がっちゃうんだ。

「信じられない男と一緒にいる筈がないでしょう」

「ふん、それが夫婦の絆ってもんだ」

親父、頬が引きつってるぞ。

事あるごとにこんな風に釘を刺されてるんじゃ、浮気はできんだろうな。

というわけで、隠し子説は却下された模様。

「騙り、とすれば何が目的かしら」

「大財閥の跡目争いじゃあるまいし、うち程度の財産狙いとしては効率が悪すぎる。なら業界への影響力か？」

「何にせよ、私たち夫婦の信頼関係、甘く見られたものね」

「違うない」

不敵に笑い合う高天夫妻。

い人間は遊ぶべきじゃないわ」

これは遊びじゃなくて真剣な実力行使だ、と言っているようにも聞こえるのは気のせいだろうか。

「……ミノリちゃんはどう少し肩の力抜こう。怖いから」

ナナさん、苦勞するなあ。

「あたしって信用無いわね。いつも真面目に遊んでるってのに」

これを、自分にとってはあらゆる事が遊びでしかない、と意識してしまう自分の頭が嫌になります。

「不当に失礼な扱いを受けるのも慣れっこだしね」

本来なら誰に何を言われても失礼に当たる、と。

「嫉の悪いチワワに吠えつかれた程度で目くらまら立てるほど器は小さくないつもりよ」

つまり、他人を愛玩犬程度にしか見てないからこそ、寛容でいられると。

顔に出ていたのだろうか。こちらを見たユリさんが、にやっと微笑んだ。

「モエっちも相当のものね。呆れてはいても、全然恐れはいないでしょ」

「ほんの小娘ですから、皆さんの本当の怖さを知らないだけです」

「それは違うわね。よって立つ裏付けを持ってるからよ」

へえ。

……看破されてしまった。

「その年齢でまったくブレがないなんて、末恐ろしいわ。あたしとミノリちゃんがこんな会話してれば、市議のじいさんどもなら気配だけで逃げ出してるわよ」

じゃあ、両目のピンントを虚空においてぼーっとするサガノさん

は何なのだろうか。

私の視線に気づいたか、ユリさんは満足げに笑う。

「ほんと、この町には大物が多いわ。退屈しない」

それにしても、ここはほんとに美人率高い。

ユリさんの衣装は見るからにビジュアル系だけど、顔立ちは基本的に落ち着いた和風辛口で、口を開かず立ち居振る舞いに気をつけさえすれば、十分お嬢様に見える。

ちぐはぐな格好はしているけど、ミノリさんが人形じみたとてもない美少女であることは前述の通り。

凛々しくしかも優しげなナナさんは、女子校ではお姉様として慕われそうだ。

そこでぐんにやり垂れているサガノさんだが、しゃきっとすると豹変するのは先週確認済み。一見地味だが整った顔立ちだし、ギターを手にしたときの彼女にはえもいわれぬ華がある。だらーっとした服装を改めて背筋を伸ばせば、ビククリするぐらい魅力的になるだろう。

性別は違うけど、総合的に黒六連とでもいい勝負が出来そうだしなみに、読者諸賢のために補足しておく……ナナさんは長身でスマート、ミノリさんは華奢、同じぐらいの身長でユリさんはワガママボディー、サガノさんは意外におつきい（なにが？）。私？ 相応にべたんこですが何か？

「私はともかく、みなさんお綺麗だしマスクで隠すのは勿体ないですね」

「いや、絶対モエちゃんの方がずっとずっと可愛いと思う」

ナナさんがなぜか力説する。なんでそんな必死？

「今帰ったぞ。不肖の息子よ、うん、元気で何よりだな。はっはっはっ？」

「これから、親の方が不肖とか言うなよ」

息子相手だから偉そうな物言いなわけじゃない。テレビでもこんな感じなんだよな。

実際、このオッサンは各界の重鎮と同等の扱いを受けている。こんな態度も含めて高天光照という強烈なキャラクターを形成している事を、ただただ実力で認めさせているのだ。さすがはゴッド。

「そろそろ彼女は出来たかしら、ヒロ？」

「いや、母さん見てたら到底女性に幻想は持てない」

「うん、それもまた良し」

何がいいんだ、妖怪オババ。

「さて、せっかく我が家に帰ってきた事だし。俺たちは寝室に籠もるので後よろしく」

「弟が欲しい？ それとも妹がいいかしら？」

「さ、最低だな、このデリカシー欠如夫婦！」

これから、第一部完、みたいなモノログで終わるなつての。ドキッとしたぞ。

まあ、萌衣が自信をつけられたんなら良かったよ。俺も時間を割いた甲斐があったってものだ。

いや、我が両親とはいえ、あの二人強烈だわ。

親父殿は相変わらず神様じみてるし。母上様は妖怪じみてるし。

「そうね、十分綺麗よ」

「はあ……ありがとうございます」

誰にでも好かれたいわけじゃないし、ミノリさんみたい人言われても複雑な気分だけど、でもこの顔を魅力的って言ってもらえるのは嬉しいかも。

「あたしも見た目は相当のものだと思うけど、」

ユリさんは謙遜とか言う言葉とは無縁の人種に見えたが。それとも他人事なのか。

「別に容姿で音楽やる訳じゃないから」

見た目がネックになって売れてないバンドが聞いたら暴れるじやすまないな。

うちのリーダーがごめんなさい。と心の中であやまっておく。

「だから、あくまでも音楽で勝負できるメンバーを集めたつもり」

その言葉に対し、ナナさんは自分の顔を指さして首をかしげてみせる。

「昔ミノリちゃんに誘われてから、通信講座でだらだらやってただけです。しかも六年も掛かってやっと卒業できたレベルですよ」

「どこら辺がちよっとだか」

ユリさんが、にやあり。と嫌らしい笑みを浮かべる。

「珠坂新聞社の通信ベース講座はね、ゴッドフィンガー高天光照の完全監修というか趣味の産物よ。アルティメットコースまでやり遂げた人間は五指に満たないって話。他人と合わせた事がないだけで、実力的にはその辺のプロには劣らないんじゃないの」

ああ、アレかあ。

冗談だとはばかり思ってたのに、あんなの一人で最後までやる人、いたんだ。

でも、これはチャンスだと思う。

萌衣がいつまでもこそそしなきゃならないのを、仕方ないですませたくないんだ。

まかせてくれ。きつと何とかしてみせるから。

寛彰

W7〇月〇日 火

私には今のままで十分です。高天家に波風立てようなんて思っけません。

ヒロ君に存在を認めてもらっただけで、それで満足。

タイムツまで表に出ませんから。

ごめんね、面倒かけちゃって。

萌衣

W7〇月〇日 金

「親父、お袋。相談がある」

両親が帰ってきてから数日来タイミングをはかっていたが、落ちついた朝食後の席で話を切り出すことにした。

「分かっている分かっている。弟の名前は寛彰に決めさせてやる」

「ふざけたらはり倒すからそのつもりでね」

や独裁者（笑）

「我らが黒六連に捧げて『ケラエノ』行くよ！」
続いて親指を立てたのは私への合図。

了解。

ヒロ君が稲妻を彫った、黒のスティック。私が波を彫った、白のスティック。

二本のスティックを打ち合わせ、カウントダウンを始める。

「ワン・ツー・スリー・フォー！」

どっ、と観衆が沸いた。

私たちの演奏は完璧だった。

どのぐらい完璧だったかというと、

「いや、凄かったよ。本家はともかく『黒の六号』と同じぐらいには十分上手い！ 見た目は段違いだけだな（笑）」

とライブハウスのマネージャーさんに評されたぐらい。

ほんと、このメンバーは最高です。

惜しむらくはヒロ君が参加できないことだけかな。

「モエちゃん、はい」

あれ？ 私、泣いてた？

ここでハンカチがさっと出てくるのがナナさんがナナさんたる所以だな。ミノリさんは気が気じゃないだろう。

「ずばぜん」

「前にたまってるファンや黒ムチャさん達は私たちが相手しておくから、モエちゃんはまだ帰った方がいいよ。そろそろ中学生には遅い時間になっちゃうからね」

「ご配慮ありがとうございます」

「せめてコースぐらい終わらせてないと、恥ずかしくて聞かせられないと思ってたのに……」

ナナさんは呆然。魂を抜かれたようになってる。

「小学校の時、合奏を断られたんだ。『私と合奏したいなら、何か一つまともに弾けるようになりなさい』って」

「あんなの冗談よ。なんとかの一念？ ほんと地道魔神。珠坂を離れてる間もずっとやってたの？ 呆れるわ」

ミノリさんのこれは、褒めてるのだろうか。

「うん、絆だったから」

きゅー。

直球！

「……ナナはもう少し人心の機微というものを勉強する必要があるわね。そう無防備だと、きつといつか致命的に騙されるから」

ぶいと顔を背けるミノリさん。

うわあ、ツンデレだ。

「ミノリちゃんは騙したりしないよ。現に今、一緒に演奏しようとしてるし。無駄にはならなかったでしょ」

「……ああもう、軽口につきあってる時間はないのよ。さっさと始めましょう」

クールなミノリさんだけど、ナナさんには弱いんだなあ。

時間、かあ。

そういえば、一番大事なことを忘れていた。

「そんなに急ぐ理由とかあるんですか？」

沈黙。

「そもそも何のためにバンドやってるんです？」

視線がユリさんに集まった。

「ううん、気をつけてね。うちからお迎え来ってもらった方がいいかも」

「あはは、きつとお迎えの方が迷っちゃいますから」

コスチュームを脱いで髪型を変えてしまえば、盛り上がる群衆のど真ん中を突っ切っても簡単に脱出できる。

仮面バンドの最大のメリットを最大限に利用ってわけ。

「それじゃあ、あとはよろしくお願いします」

「はい、任されたよ」

明日からしばらくの間、姿を消しますね。山根さんにはよろしくお伝えください。

人前で演奏するってこと。知識ではよく分かってたはずなのに。

自分で経験してみると、ひと味もふた味も違いました。

大勢の人に求めてもらえる事が、こんなに自分を力づけるとは思いませんでした。

チャンスくれたユリさんにありがとう。

思い切って町に出た自分にありがとう。

そして誰よりも、ヒロ君にありがとう。

萌衣

W7〇月〇日 月

「……みんな、一体私に何を期待してるの？」

「それがリーダーの台詞ですか」

とげとげしい視線。ミノリさん本領発揮。

「面白そうだからのってるだけよ。大体、アリスの意図なんか誰に分かるっての……あ」

あ？

「そうそう、コーカロリーはタイマツに出るってことで」

タイマツ？

「で、黒六連をたたきつぶすの」

ふざけんな！

ヒロ君ならそう言ってるだろう。いや、たぶん言ったんだろうな。七瀬さん達に。

今思いついた振りをしてるけど（あるいは忘れてたのかも）、それが十家の総意なのかもしれない。

それなら、これだけの豪華（政治的な意味で）メンバーをそろえてきたのも納得できる。

アリス、というのもあるいは十家の偉いさんのコードネームなのかも。

「そのタイマツってのは何です？」

ナナさんが代わりに質問してくれた。

『珠坂インディーズバンド祭』で通称タイマツ。ゲストにインディーズ上りのプロも呼ばれたりするけど、基本的には素人バンドの祭典ね。これの優勝者はメジャーデビューへの道が開ける、プロを目指すバンドの登竜門の一つとされてる」

「では、今年の優勝候補はぶっちぎりで『黒六連』ですね」

ピンと来た。

「今頃はきっと、主催側とレコード会社の間でデビューの計画が出来上がってるはずです。あるいは、わざとインディーズを経由したのかも」

きわめて素直な思考でそう思ったのだけど。

「モエちゃん、やな中学生ね」

ユリさんに非難される筋合いはないと思います。

「で、スケジュールは？」

「一月後の日曜」

ミノリさんの質問に、ユリさんが事もなげに答えた。

ため息がスタジオを埋め尽くす。

一度も音を合わせたことがない、我々がコーカロリィ。目標は強敵というのもおこがましいインディーズ最強バンド、イベントはおそらく出来レース。

呆れた話だ。

先ほどから沈黙を保っていたサガノさんが立ち上がった。

「……一つだけ聞かせて」

壁に立てかけられていた見覚えのないギターを手に取るや、彼女の弛緩しきっていた瞳に眼光が宿り、たちまちプロフェッショナルの目つきになる。

この人、やる気なんだ。

「……黒六連って、何？」

再びため息の嵐。

「有名なバンド」

ユリさんの言は間違っていないが、まるで説明になってない。

「ふうん」

発足直後の単独・単曲ライブという無茶な状況にもかかわらず、二百人級のスペースを聴衆が埋め尽くしていた。

私の常識ではちょっと考えられない話だが、ユリさん達のバックを考えると何らかの動員が掛かっている可能性は十分ある。

そんなことを考えてしまう自分がちょっと嫌になる。我ながら冷めてるなあ。

でも。だからこそ。

観客席のノリを見て、彼らの瞳の輝きを見て、驚いた。

この人達、本気で『コーカロリィ』に会いに来てる！

いや、ユリさんアキオさんの手腕恐るべし。これならナチスで宣伝大臣が務まる。

ふと笑いがこみ上げてきた。

くすり。

左肩に手が置かれた。

「モエちゃん。あなた自身も、あなたを含めたこのチームも、十分信じるに足ると思うけど。自分も信じられない者に追いつかれるほど『黒六連』は甘くないわよ」

「そうですね、失礼しました」

この人もちょっとエキセントリックだけど、やっぱり大人なんだな。

「ギター持ったサガノちゃんやミノリちゃんを見習えばいいわよ。ガンガンいきましょ」

「それに、ユリさんもですね？」

「ふふふ、分かっているじゃない」

観客席から声上がる。

「「ナナさーん、ミノリーん！」」

が、質問したはずのサガノさんは気にした様子もなく。

「あたしは音楽、聞かないから」

なんでこんな人がここにいるんだろう？

「ただ弾くだけ」

彼女が無造作に紡ぎ出したただ一和音が、私たちから言葉を奪った。

本物の才能と本物の楽器の組み合わせは、理屈でなく魂を直接揺さぶってくる。

「演らないの？」

今日は初めて『コーカロリィ』の音あわせしました。

ギターのサガノさんは本物の天才です。いつも寝てるのに動き出すと凄い。まるで山根さんみたいな人です。何というか、よく知ってる音のような気がしますが……言わぬが花ですね。

ナナさんのベースは面白みはありませんが堅実で完璧で、真面目な人となりを感じられます。これも聞き覚えがあると思ったら、珠坂新聞社の通信講座出身とかで、父さんと同じ音でした。

ユリさんはサガノさんとはまた別種の天才です。運指法も何もあったものじゃないのに、どうしてもちゃんと弾けてるのか不思議でなりません。

ミノリさんは……まさに奇跡の歌声でした。

演奏する曲には十分な注意が必要だと思います。特に歌詞。

当面の目標はインディーズバンド祭だそうです。最初は無謀だと思ったのですが……

ああ、端から見てもあの二人はペラ扱いなんだ。

とくだらないことに感心してしまう。

律儀に腰を折るナナさんに、さっと一瞥をかえすだけのミノリさん。

「「ユリさーん！」」

軽く片手を振ってみせるリーダー。

「「サガノさーん！」」

和音一発で答えるギター。

それから、

「「モエちゃん！」」

「「モ・エ・たーん！！」」

高揚と同時にちょっとした悪寒が。最前列付近に一緒にツーテールをくつつけた暑苦しいお兄さんの一団が混ざってる気もするけど、意識の隅に追いやっておく事にして。

とても不思議な感じがした。

吹けば飛ぶほどちっぽけな高天萌衣という小娘の存在を認め、心にとめてくれる人がこれだけ居る。

形式上はどこにも存在しないことになっている人間にさえ、彼らは声援を送ってくれている。

外へ出ろと言う、ヒロ君のアドバイスを聞いて良かった。

ユリさんのスカウトに乗って良かった。

私はきつと、幸せ者だ。

リーダーが、ぱっと右手を挙げた。と同時に、一発で観客席が静まりかえる。

さすがユリさん。大スターなみの風格を備えている。

あの人、学校の先生とか意外と天職かもしれないな。さもなく

昔はそれなりに頼れるお姉ちゃんだったのに、最近はこんな具合。

甘やかすと限りなくつけあがるからなあ。

「俺は今日は寝てるから、後頼みます」

「今日は萌衣ちゃんが外出る日だっけ。じゃあついでにお買い物頼んじゃおうかな」

にゅふふ、と笑う。

見た目も中身も女学生みたいな人だ。

「ダメっすよ。忘れたんですか、今日萌衣の初ライブじゃないっすか。邪魔しないであげてください」

「あゝ、そうだったねえ。じゃあまた寝ようかな」

「寝るな！」

「おはようございます、山根さん」

「おはよう、萌衣ちゃん。今日も可愛いわね」

「お上手ですね。山根さんもとっても可愛らしいと思いますよ」

「ううん！ 私に優しい言葉をかけてくれるのは萌衣ちゃんだけっ！」

下手すると娘ぐらいの歳の子供に、ひしつ、と抱きついてくる。

ほんとうに子供っぽいなあと思いつつも、嫌な感じはしない。

母親とのふれあいにあこがれてるのかなあ。

「もしかしてヒロ君に何か言われたんですか？」

「美容院にも買い物にもついてきてくれないし、寝るなとか言うんだもの」

黒六連相手はさすがに無理としても、このメンバーなら結構いところまで行けそうな気がします。

そうそう『コーカロリィ』は獏犬座の星の名前だそうですよ。別に栄養価が高いわけじゃなくて、チャールズ王のハートとかいう意味だって。

『黒六連』の六連はすばる星の別名だそうだから、それに引っかけた名前なんでしょうね。

萌衣

W4 〇月〇日 月

コーカロリィのウェブサイトをみたよ。

集合写真と名前とパートが書いてあったな。

仮面にマントでもはっきり分かる美人集団じゃないか。中等部中で噂になってる。

来週には配信開始、再来週には初ライブだったな。頑張れ。

寛彰

W4 〇月〇日 火

「よしよし。今は無理ですけど、再来週にはきつとお供しますからね」

「約束ね？」

上目遣いで見上げてくる表情を見ると、どっちが年下か分からない。

「ええ、約束です」

指切りさせられてしまった。

この人、こんなに可愛らしいんだから優しい彼氏つくればいいのに。

学生時代にはきつともてたろうと思うけど。ここ何年もうちに籠もっちゃって全然歩かないから。

もしかして私たちのせいなのか、と責任感じてしまう。

「そんな顔しないでいいんだよ。ヒロ君は光昭さんとお妙さんの息子だけど、萌衣ちゃんは私が育てた私の娘みたいなものなんだから。萌衣ちゃんの成長を見守るのが私の一番の楽しみ」

ああ、こんな事を言われてしまつては、現状を受け入れてしまうしかないじゃないか。

ほんと、この人には敵わないなあ。

「それじゃライブ頑張つてねー」

「ありがとうございます」

夕刻。

駅裏の『テレセントリック・コンセンレーション』。通称でれこん。語呂はいいけどちっとも意味が分からない名前のライブハウス。

ウェブサイトなんて初耳です。

……検索検索。

ほんとだ。確かにこの間集合写真撮りましたけど。いつの間にこんな作ってたんでしょ。

配信もライブも聞いてないんですけど、忘れたのかわざとなのか。どちらにしても、あのユリさんなら大いにありそうな話です。

萌衣

W4 〇月〇日 木

七瀬の双子、タイムツ出る気満々だと思ったら、最初からやつらの分の枠空けてあるらしい。

あいかわらず恐ろしいコネだな。

このままじゃ絶対にだめな大人になる。それこそ山根さんみたいな。

いっぺん思い知らせる必要はあるんだが、いくら何でも大人数の前でやらかしたらフォローしようがないだろ。

ブレーキ役が必須だと思うんだが……

このままだと萌衣の予定とまともにかぶるんじゃないか？

寛彰

W4 〇月〇日 金

困りました。まさにダブルブッキングですね。

こうなったら、山根さんにお出まし願うしかないと思います。
私とヒロ君と交互に説得しましょう。

萌衣

W4 ○月○日 土

山根さん、説得するまでもなくノリノリだった。
かえって不安。

寛彰

W5 ○月○日 日

相変わらず集まりが悪い……。

今週は配信用の録りをやる事になっているのだけれど、実はまだ曲が決まってない。

「古今和歌集にグランドビートとコーラスを入れるってのはどうでしょう」

「それも悪くないけど、今回はそういうプロジェクトじゃないから」

前回の集まりでナナさんが出したアイディアはあっさり却下されてしまったわけで、ユリさんにはなにか腹案があるのだろう。

そのユリさんはまだ来てない。

そのかわり、見覚えのない長身やセマツチョ系のお兄さんと、ほんわかこにこ系の可愛らしいお姉さんがいる。

「それはいいから着替えてください。親しき仲にも礼儀ありつてね」

この人ときたら、レースのヒラヒラネグリジュという扇情的な姿で家中を闊歩するんだから困りものだ。

「まあヒロ君たら。本当は嬉しいくせに。このツンデレくん」

「いやマジでどうでもいいっすから」

「がっがーん！」

実際、今さらドギマギすることはないな。一緒に暮らし始めてすぐに底が見えちゃったし。

うちで住み込みのお手伝い（本人によれば『メイドさん』）をやってくれているこのロリおねえちゃんは、名前を山根愛子という。初見でこれを『なるこ』と読める人はまず居ないが、名は体を表すとはよく言ったものだ。

うちの母上の後輩だっていうから三十前後にはなってる筈だけど、垂れ目の童顔・ちっこい身体で、うちのエステ漬けの母上とは別の意味で年齢相応に見えない。留守がちの両親にかわって子守に雇われ、うちに来た頃から見た目がまるで変わってない気がする。

まあ別に容姿はどうでもいいんだが、この人と来たら中身も見た目通りの子供っぽさなのだ。

確かに家事全般に関して優秀な能力を発揮するのだが、お手伝いさんとしては多分に問題がある。

なにせやたら寝る。買い物に出れば迷う。十年暮らした町なのに全然道を覚えてないんじゃないだろうか。

そんな山根さんだというのに、あの母上が一目も二目も置いているのが不思議で仕方ない。なんか弱みを握ってるのかもしれない

ずいぶん距離が近いけど、恋人同士かな。

お兄さんの方がひょいと右手を挙げ、話しかけてきた。

「あー、君がモエちゃんだな。うちのバカ従姉妹と妹が迷惑かけてるらしいね、ほんと悪い」

ミノリさんのお兄さんかな。

彼女はユリさんのこと姉さんと呼んでいたけど、そういう事なら正確には従姉妹同士なのか。

「篤史ちゃんと私はただのお手伝いですから、気にしないでくださいいね」

「こらゆっか」

アツシと呼ばれたお兄さんが、ゆっかと呼ばれたお姉さんの口を掌でふさぐが、時既に遅し。

……

……………ええと。

脳内検索。ヒット1。

高等部の新川篤史先輩と婚約者の遠野結香先輩。

また有名人ですよ。新川といえば斗流の筆頭家。

これでユリさん、ミノリさんの素性まで芋づる式。

脳内リンク追跡中。合致率95%。

こ、こんなところに上様がいらっしやるはずがない！

と言うことは。あのお方と一緒にいるナナさんて……脳内検索、ヒット数0。もしかしてナナコ、ナナミ、ナナオ。

さすがにナナオはないとして、脳内あいまい検索中……合致率85%、32%、28%……えええ！？

きゃー。

とも考えたことはあるが、そんな方向に頭が回る人とも思えない。

ともかく、このロリおねえちゃんこそが俺と萌衣の唯一の理解者にして協力者なのだから、あんまり無碍にも出来ないわけ。

「だーっ！ そこで着替えるな！」

あんまり無碍にも出来ないわけ。

「三つ編みにするの手伝ってくださいす〜？」

あんまり無碍にも出来ないわけ。

「はいはい、へいへい」

山根さんの柔らかい焦げ茶色の髪はすべすべツヤツヤ。やつぱりたつぷりの睡眠がポイントかね。

「かなり長くなったっすね。そろそろ美容院行ったらどうっすか？」

「このところ萌衣ちゃんがバンド活動で忙しくて一緒に行ってくれないから」

外出時には保護者必須だしな。GPS携帯ぐらいじゃまだ不安が残る。

彼氏でも作ればいいのに。

「かわりにヒロ君ついてきてくれる？」

「だが断る！」

勘弁してくれ。

七瀬姉妹だけでも手に余ってるのに、休みの日までこんな大人数子供を相手にさせられてたまるか。

ああ、あいつらほんといたらこんな感じのダメ大人になりそうだよな。

「最近ヒロ君が冷たい。しくしく」

「嘘泣きしてもダメっす」

W5 〇月〇日 木

父さん達が？ 豪華ゲストじゃないですか。

驚きました。それが本当なら恥ずかしいところは見せられませんか。

今年のインディーズバンド祭りは盛り上がりそうです。

萌衣

W5 〇月〇日 金

いや、あくまでも観客らしいけどな。＜高天夫妻

山根さんが来週に備えて寝貯めしてるので、今日は三食とも総菜パン。

腹減るなあ。

こりゃ明日明後日も期待薄だ。萌衣は外食していいからな。そのぐらいなら小遣い残ってるだろ。

寛彰

orz
ORZ
OTZ

ああ、出来ることなら最後まで気づきたくなかったなあ。

正体隠すのなら、しっかりきっちり隠し通して欲しいところですよ。

ほんと、どんな顔して会えばいいんだろう。

そういった内心の動揺はおくびにも出さず（出てないと信じたい）、にこやかに挨拶しておく。

「お初にお目に掛かります。高天萌衣と申します。もしよろしければ、お名前をお聞かせいただけませんかでしょうか？」

「返す返すも、悪い。助かる」

新川先輩はそう言って頭を掻いた。

意外に愛嬌がある人物のようだが、素性を知っていると実にやりにくい。機嫌を損ねさせる者がいたら、珠坂に住めなくするぐらいのことは簡単だろうし。

こんな人たちと一緒にやってく同級生は心労が多いだろうな、と思うけど……実際にほそこまで一般に知られてるわけじゃないのかもしれない。

考えてみれば、この間のオタクな人たちも宮藤さん達にデレデレしてはいても、恐れ敬ってたようには見えなかった。

私にしてもたまたま叔父が詳しかったから、超VIPだって先入観で畏れ多く感じてしまっただけ。

こうやって面と向かって話してみれば、実際には年齢相応の普通の人たちなのではなからうかと思えるようになってきている。「とりあえず、えーと、アキオとサナエということよろしく」なんてあからさまな偽名……普通を通り越して俗っぽいなあ。

最初に、ごめんなさいを言っておきますね。

いつものようにスタジオに行ったら、なぜかびしり布団が弾いてあったんです。

ユリさんには明日に備えて英気を養うように、って言われて。そのまま集団お昼寝の時間になってしまいました。

サガノさんなんて三秒で熟睡です。びっくりです。

でも御陰様ですごく元気になりました。

明日こそはちゃんと頑張りますから。応援してくださいね。

萌衣

W6 〇月〇日 日

テーブルで牛乳と味気ない総菜パンを腹に詰め込んでいると、「おはようございます」

食堂のドアが開き、舌つ足らずな甘ったるい声が聞こえてきた。あれ、起きてきたよ。

「本当に早いっすね。まだ十時なのに」

「昨日はたっぷり寝させてもらいましたから。目覚ましが鳴る前にお目々ぱっちりですよん」

と、皮肉を解さずガッツポーズをとってみせるが、全然似合わないなあ。

全員揃うまで二十分ですんだ。早くなった、と喜ぶべきところだろうか。

「なんつーか、統一感のないチームだな、これ」

私たちを見渡し、篤史さんといアキオさんは失礼かつ適切な感想を漏らす。

「チームでなくてバンドなんですけどね」

「……それにしても……似合うな、ナナ」

「全然嬉しくないですから」

正体に気づいてしまったこちらとしても複雑な気分。

……妬けるなあ。

「それで、何を弾けばいい？」

ギターを抱いたサガノさんは既に臨戦態勢。

彼女の指がワキワキしている。いつもながら、普段の気の抜けたようなサガノさんとは別人のような気合い。

私たち『コーカロリィ』が先週弾いたのはありふれた練習曲だった。

でもそんなもので黒六連に対抗するのは不可能だ。

リーダーが何か考えてくれてる、はず。と思いたい。

『『セラエノ』。作詞連鳴、作曲・編曲連調』

一斉に息をのむ気配。

それはそうだ。私たちが当面の目標と見なした黒六連の代表曲なんだから。

驚いていないのは言った本人であるユリさんと、音楽を聴かないというサガノさん、それから状況を理解できてないサナエさんぐらいのものだ。

「正気か？」

質問とも感想ともつかないアキオさんの発言は、私たちの感想を端的に代弁していた。

「まずは黒六連のファンバンドを装いましょう。それが彼らにとって替わるための第一歩」

うわ、恐ろしいことを考える人だな。

「だから適度に手を抜かなきゃならない。彼らが『コーカロリィ』に脅威を感じない程度にね」

むしろこのメンツで、下手に弾くなんて器用な真似が出来れば苦労はしないんだけど。

「安心なさい。そこそこの腕のコピーバンドの録音を聞かせるから、これをお手本にして演奏すればオーケー」

確かに。そういう曲だと認識してしまえば、その通り弾くことは可能だと思う。

思いつきで適当に行動しているように見えて、実に準備がいい。この人だけは敵に回したくないな。

そのユリさんはマルチアンプの大仰なオーディオシステムから大蛇のようなケーブルを引っ張ってきた。

無理矢理ミニプラグに変換して携帯プレーヤーを繋ぐ。実にバランスが悪い。ケーブルの値段だけでプレーヤーの数十倍か。

ケーブルの硬さでプレーヤーが浮いちゃってるんですが。

そして、半端でないクオリティーで録音と演奏のアラが聞こえまくり。

初っぱなからノイズシャーシャーの酷い音源。

音は外してないけど一音一音にムラのある、びっみょーなギターソロから入る。

もうアップロードされてるはずですが、微妙な出来なので聴かないでください。お願いします。

それより、来週日曜に駅裏の『てれこん』で初ライブやるそうです。練習試合のようなものですね。

で、土曜にも集まることになったんですが……出来れば、ですけど。だめですか？

萌衣

W5 〇月 〇日 月

お、初ライブおめでとう。

凄いな。とんとん拍子じゃないか。

土曜は遠慮無く使ってよ。ウィークデーはほとんど俺が好きにしているんだからさ。

萌衣たってのお願いだから俺は聴いてないけど、『コーカロリィ』の演奏、早速話題になってた。

そういえばうちのバンド名も一応決まったんだが、

『りんぺんバンド』だと。

笑っていいぞ。いやむしろ笑ってくれ。

寛彰

狭いダイナミックレンジ、高域の落ちたこもった音。

ベースは音色は悪くないけどリズムキープに難あり。

ドラムスはバワフルだけど時々すっぱり力が抜ける。

ボーカルは勢いはあるけど技術がついてきてない。

……たしかにそこそこだ。素人としては悪くはないけど本家には遠く及ばない、といった程度。

こんなの真似したら、下手になりそう。録音技術も稚拙きわまりない。

でもその演奏の端々から、一から十まで完全に黒六連をコピーしようというこだわりが透けて見え、ひいては黒六連が好きで好きで好きで仕方ないという強い思いが伝わってくる。

「さあ、黒六連のファンになるわよ」

我らがリーダーはカードよろしく両手にCDジャケットを広げて見せ、またも奇っ怪なことを言い出した。

「はあ？」

不死鳥でも撃墜できそうなミノリさんの冷視線を軽く受け流し、「狂信者は異端には敏感きわまりないからね。表面だけ真似しても簡単にばれるでしょ」

子供に迎合しようと人気ゲームの話題を出した親や教師がかえってバカにされる、というのはよくあるシチュエーションだ。

黒ムチャさん達相手ならさらに難易度が高いだろう。同じものを好きな者同士の連帯感や嗅覚を甘く見ることはできない。

「対策はただ一つ。本気で彼らを好きになること」

それはそうだろう、けど。

「いいんですか？ これから倒そうとする相手に感情移入するような真似しちゃって」

W5 〇月 〇日 火

ありがとう、ヒロ君。

いただいた土曜日、大切にに使わせてもらいますね。

リンリン&ベンベンで『りんぺんバンド』ですか。巧いし、可愛いんじゃないですか。

でもヒロ君の名前が入ってないのは残念かな。

『りんぺんバンドfeaturing 高天寛彰』

とかどうでしょう。

萌衣

W5 〇月 〇日 水

俺的には自分の名前を入れることにはこだわらないんだけど。

萌衣がいいって言うから双子に話してみたら、『りんぺんバンドfeaturing ヒッキー』で本登録されちゃったよ。

なんだかなあ。あいつらのセンスだけはわかんね。

あ、来週帰ってくるって親父殿から連絡あった。

タイマツの主催者の四三氏から招待状が来たって。

母上様ともどもレコーディング中断して戻ってくる気らしい。

どういう風の吹き回しだろう。

の私はあんまり高尚な生き物じゃないわよ。サナエちゃんもサナエちゃんであるようにね」

暫しの間きょんととしていたアキオさんだったが、今度は苦笑する。

「なるほどね、さすが姉さん、と言わせてもらおう。ったく、非常識な」

アキオさんが何に呆れてるのかはわからないが、どうやらあんまり愉快でない話題と推察される。深入りしないでおう。

「ミノリもおんなじように、は行かないんだろうな」

「無理でしょ。北斗の領袖ってのは北斗そのものと同義だし。人の一部に過ぎない頭が人そのものを統べてるようなもの」

「そうだよなあ。アレだしなあ」

全然分らないながら、さらに不穏な感じになってきた。やっぱり方向転換した方がよさそう。

「ところで、アキオさん達は参加しないんですか？」

「俺？ 消費専門。サナエもソプラノリーダーぐらいしかできないぞ。ああ、初さん達はいけるんじゃないのか？」

「私たちですか？」

急に話を振られて少々驚いている双子メイドさんず。

ヒロ君の話じゃ七瀬さんところの双子は凄いらしいけど、確かにこちらのお二人も才気煥発って感じがする。

「歌ぐらいしか歌えませんが」

いや、それはそれで。

「双子でハモるのはいいかもしれません」

ナナさんに賛成。この二人なら見栄えもするし。

「目指せザ・ピーナッツ？」

下手するとミイラ取りがミイラになりそうだけれども。

「今さら仮面の一枚や二枚増やしたぐらいでどうこうなるとは思えないけど」

ユリさんの言うのは、黒六連が好きな振りをするのではなく、彼らを本気で好きな仮の人格を上に乗ねろ、ってこと。

一流の役者かスバイのような真似を簡単に要求する。ナナさん達の能力を信用してるんだらうけど。

私は自分を偽るとか苦手だな。

「それに、何かを尊敬し愛すること、それを超えようとする感情は矛盾しないわよ」

うわあ。

「俺は今日こそ師匠を超えるっ！」

「この農に挑もうとは百年早いわ！ くおのブアカ弟子めがあっ！」

サナエさんとアキオさんの小芝居じゃないけど（息あってるなあ）、先代を倒せば相伝、みたいな暑苦しい発想に聞こえる。

まあ確かに、黒六連なら相手にとって不足はない。

「じゃ、まずはメンバーのチェックね。かむかむえぶりばでい」

皆がテーブルを囲んだところで、ユリさんはタウン雑誌の黒六連紹介記事の中からサン格拉斯&髭のおじさんの写真を示す。

「そいつがガイアだな。そっちのでっかいのがオルテガ」

「いや、それ三連星だから。話統けていい、アッキー？」

「……いや、つい。申し訳ない」

ユリさんはこほん、と咳払いを挟むと、

「彼が鳴。通称大将。楽器万能でトークの名人。彼のような天才でなくては百戦錬磨のミュージシャン達のリーダーはつとまらな

それは古すぎ。ユリさん何歳ですか。

「あっちがプレアデス、私たちがコル・カロリ。なら、初さん終さんのデュオ名は『フォーマルハウト』ってところかしらね？」

ミノリさんは紫化するように言うが、なんだか表情が浮かない。声音にも若干のこわばりがある。

「げ。今〇美×とか歌われると嫌だな」

「ダメです没です絶対封印」

またも不穏な雰囲気発生。アキオさん達にも感染。ナナさんなんて両手で大きなバッテン出し。

「私たち、核爆弾か細菌兵器か何かですか」

「ねえ」

さすがの二人もちょっと表情が引きつって見える。

「似たようなものでしょ。間違っても一つ星に誓ったりしないように」

「御意のままに」

誓うと核爆弾並みに危ないんだろうか。うーん。

皆の至極真面目な表情（約一名気の抜けてるのを除く）を見たところ、すべて冗談というわけではなさそうだが。

もちろん、全面的に信じられる訳じゃないけど、ミノリさんのような例もある事だし。

どういう人たちなんだろう。十家って。

だめだめ。考えたらだめ。間違いない珠坂の暗部なんだから、深入り禁止。

今日、配信用の曲を録りました。

いわ

続いて、退廃的な雰囲気をもった垂れ目の美少年。

「こつちがボーカルの響。自慢の美声とイケメンに女の子はイチコロ」

一見ごついが優しい目の巨漢。

「これは轟、ドラムの天才。驚異のリーチでダブルドラムでも叩いてみせるわ。でも、飛行機だけはだめっばい」

髭に和装、枯れ枝風の青年。

「着物のが弾。ベーシストとしての腕は天下一品！ オタク？ 変人？ だから何??」

いかにも利発そうに見える小柄な美少年。

「彼は、キーボードの奏。ファンサービスは、美貌と頭の良さでお手のもの」

……コピペ然とした説明ありますがうございます。

「んでもってオーラス、リードギター、調！」

と、ユリさんがラスト一人を指さした直後、

「……!？」

らしからぬ俊敏さで雑誌を引ったくり、食い入るように見つめるサガノさん。

その速度ときたらカメレオンの捕食ばり。

「黒六連の演奏、聞かせて。さっきの曲でいい」

珍しくも気色ばんだサガノさんに詰め寄られ、さしものユリさんも少し引ききみ。

「ん、うん」

冒頭のギターソロを耳にした瞬間、やっぱり本物は全然違うなと感心する。

が、サガノさんの感想はちょっと違ったようだ。

「……見つけた」

あたかも肉食動物が獲物をロックオンしたかのような眼光。いつものが感情を感じさせない鴉のそれなら、今は猛禽。

ほんと、ギターがらみだと人が変わる。

何を思ったか。サガノさんは自分のギターを引き寄せ、スピーカーから流れる演奏に割り込んだ。

彼女は黒六連を知らないはず。ならば、さっきコピーバンドの演奏を一回聞いただけで一発耳コピ？

違う。あれは……本物の黒六連のリードギターを再現している！

一同でラストまで聴き入ってしまった。

拍手。

いやあ、本当に天才なんだ。ただただ凄いとしか言いようがない。

けど、今のただ才能があれば出来るってものじゃない。

とすれば、

「知り合い？」

ミノリさんの言うとおり。調さんとやらの音を知り尽くした間柄であるなら、そんな真似も可能かもしれない。

「兄さん」

なるほど。

サガノさんの答えに一同納得しかけたが、首をひねった者が約一名。

「一人っ子じゃなかったか？ 先輩」

アツシさんといアキオさんのツッコミ。

れてる系の方には、とにかく慎重に行動していただかないと大変なことになります。

「よし、みんなお疲れ！」

通し演奏五回でユリさんのオーケーが出た。

レコーダーに録音された、最後の演奏を再生してみる。

「で、どうよ？」

「完璧な出来に聞こえます。微妙に不慣れで絶妙に間違った演奏として、これ以上は望めないかと」

というのが私の感想。

「何度でも何度でも聴きたくなるような妙な魅力、というか魔力がありますね」

『黒六連』の演奏にはあって、コピーバンドである『黒の六号』にはなかった何か。

「ふふふ、みのりんボーカルは伊達じゃないわよ」

そういうユリさんの演奏にも魔的な何かが感じられてならないのだが。

「……なんか徒労感が」

ナナさんは、そうだろうなあ。上手くなるために黙々と練習してきたのに、下手に演れって言われたんだから。

「出来ないことは要求しないわよ。メンバーを信じてるからこそこんな無駄が言えるんだからね」

ほんと、他人をたきつけるのが上手い。

「はあ、二本豪華お菓子喰うネルソン」

ええと。

察するにミノリさんは、『日本語がおかしくなりそう』、と言

「正確には又従兄。あんまり上手くなかったけど、ギターが好き人だった」

過去形で言うのはあまりにも気の毒な気が。

「しかも昔よりダメになってる。ギタリストとして、なにより人として」

これまた強烈なダメ出しですこと。

あれで？

後半についてはサガノさんに発言権はない気がするけれど。

「是が非でもつかまえて何があったか白状させないと」

と、完全に犯罪者扱い。ギター持った彼女はほんと強気です。

「よし、じゃあいちど合わせてみるわよ。さっきの『黒の六号』を参考に」

ユリさんが指をならすと、メイドさん達（宮藤の双子さん）によって楽譜が配られる。

うわ、楽譜上にこまかなミスがいちいち指示されてる。こんな初めて見た。

汚染されないように別人格で演りたいぐらい。

「まかせて。完璧に下手に弾いてみせるから」

「サガノちゃんに關しては心配してないけど。ミノリちゃん、間違っても普通に歌っちゃダメだかね。感情も込めないで」

「そこらへんは承知してるから」

ほんとうだ。歌詞も意味が通らないよう、いろいろ改変されている。音だけならなんとなく原曲っぽく聞こえなくもない。

これは賢明な措置。偶然なんだろうけど偶然とは思えない出来事が連発。先週の惨事は思い出したくもありません。

彼女は巫女さんみたいなものなのか。そういった運命に溺愛さ

たいのだろう。

言語野に機能的ダメージを与えそうな空耳歌詞になりはててるから。それを何度も通して歌ったのだから、まだ影響が残ってる模様。

「指令、心霊、終礼、失礼……戻った？」

「ばっちり。すっかりいつものミノリ」

サムズアップするサガノさんういずギター。

いつもこうしてれば明るくて格好いいんだけど。

ギターをスタンドに置いた途端に、しなっとしてしまった。

だばっとした感じの服装が、単にだらっとして見える。

「……疲れた」

憑かれてた、の間違いじゃないの？ もしかしてギターが本体？

とか、いつもの事ながら疑念が浮かぶ。

「じゃ、みんなの許可も出たってことで、これうpるから。そのようにしておいて」

「らじゃ」

あのサイト、アキオさんが作ってたのか。

「あと適宜噂流せばいいんだな」

「おお、なかなか分かっておるではないか越後屋」

「いえいえお代官様こそ」

いっひっひ、と時代劇調でお下品に笑うイケメンと金髪美女。いやな構図だ。

「ユリさん、想像してたより遙かに俗っぽいな。あんまり違和感ないぞ。っていうかいつもの姉さんと大差ないじゃんか」

「そりゃそうよ。人より出でて人より人、ってね。少なくとも今